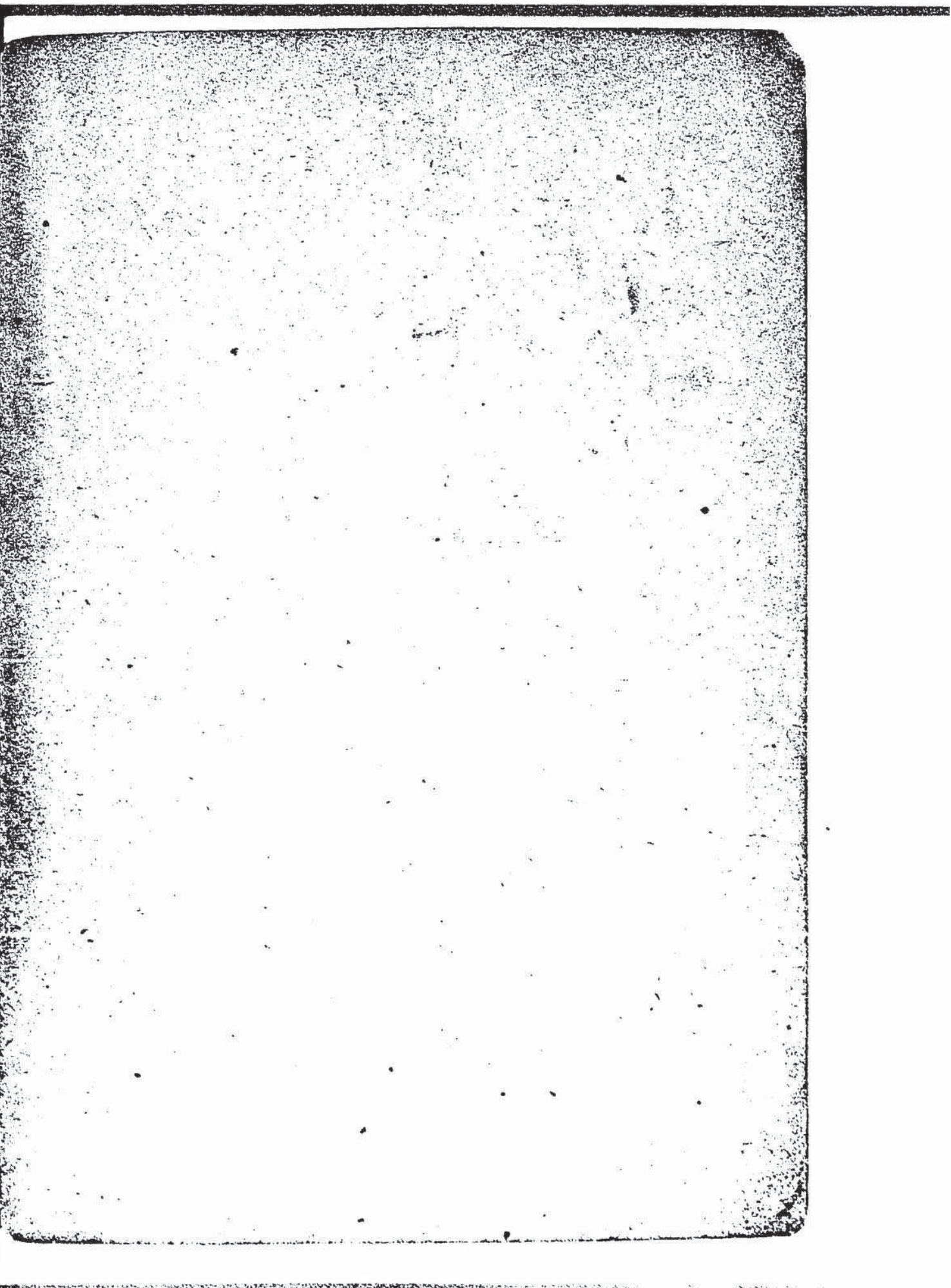


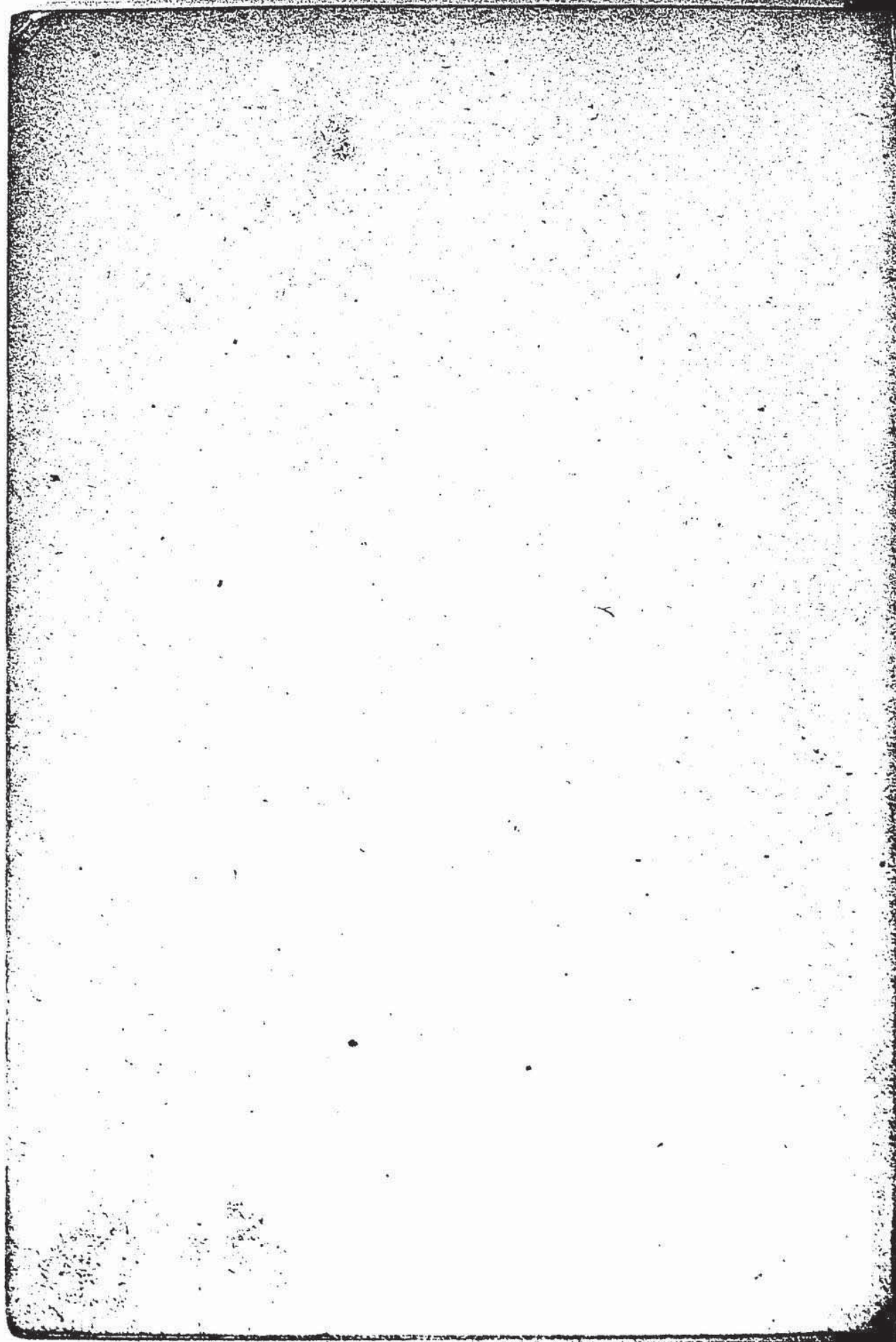


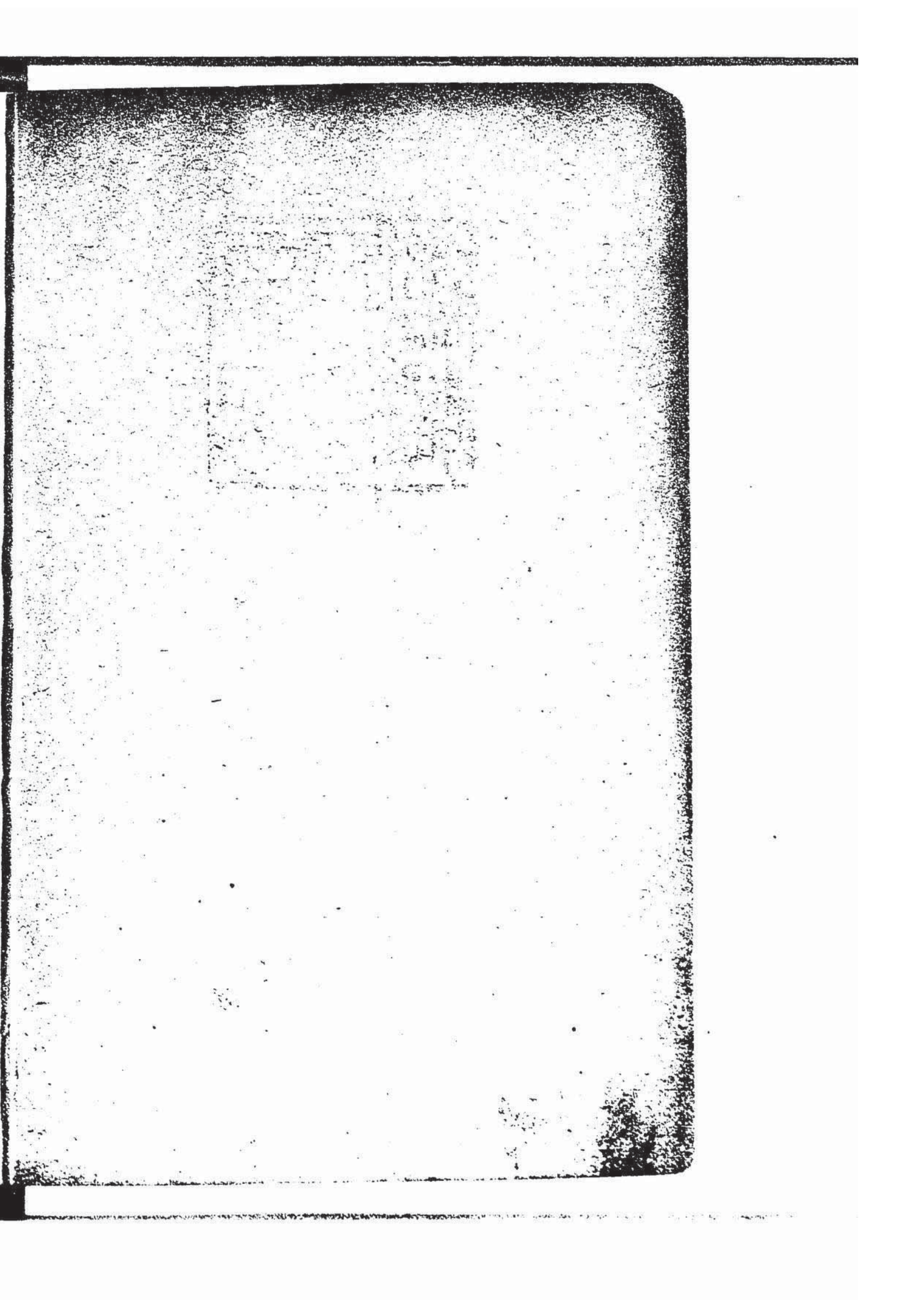
滑  
箱  
百面  
相

三梓亭  
福田遊仁

369  
325







持12  
996

借借  
百  
西  
木  
田  
遊  
一  
三



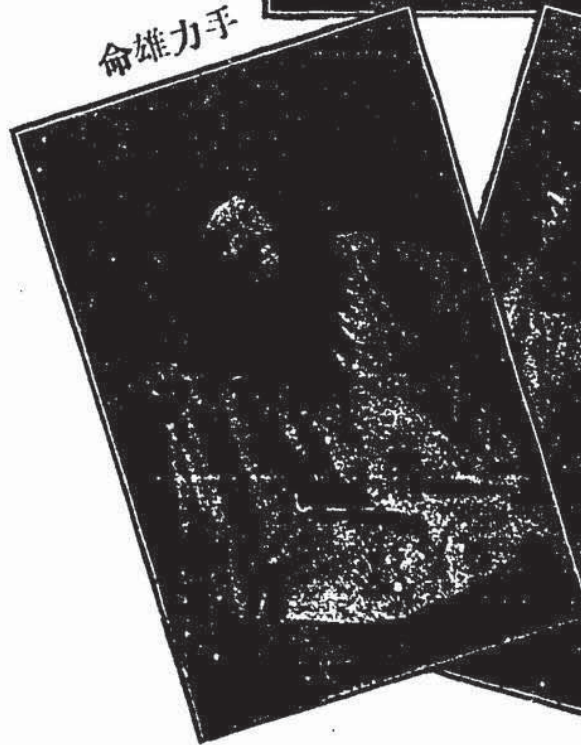
45. 6. 11  
岡交



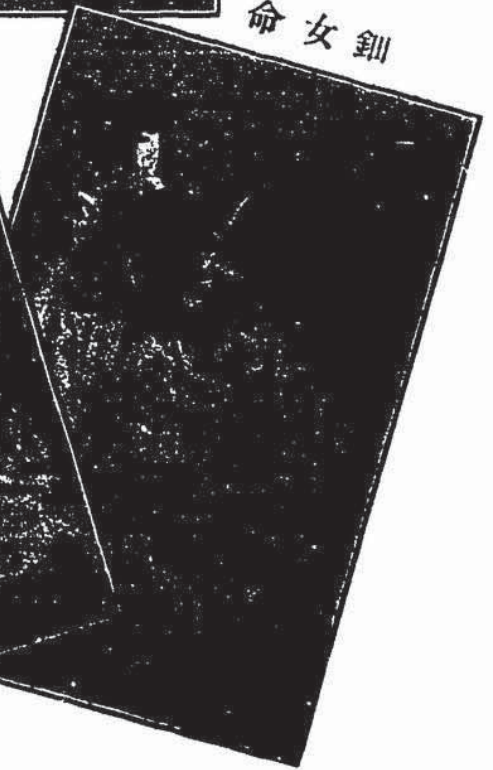
天照皇大神



手力雄命



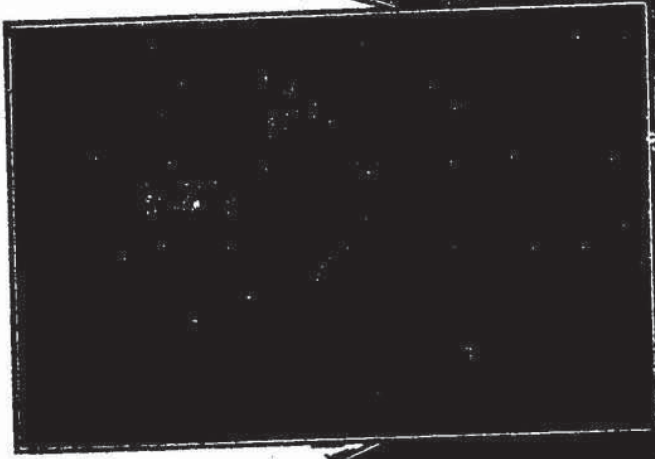
鉏女命



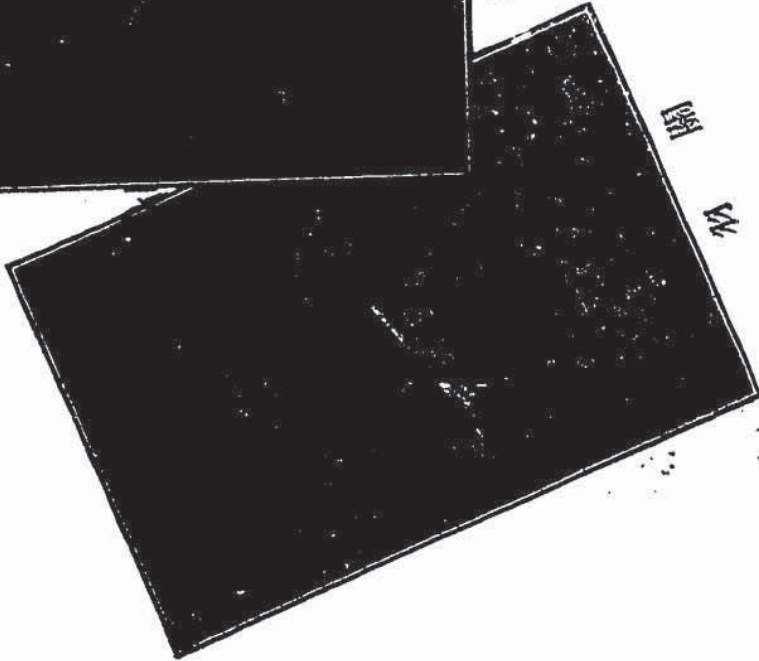




飛張



德玄



關



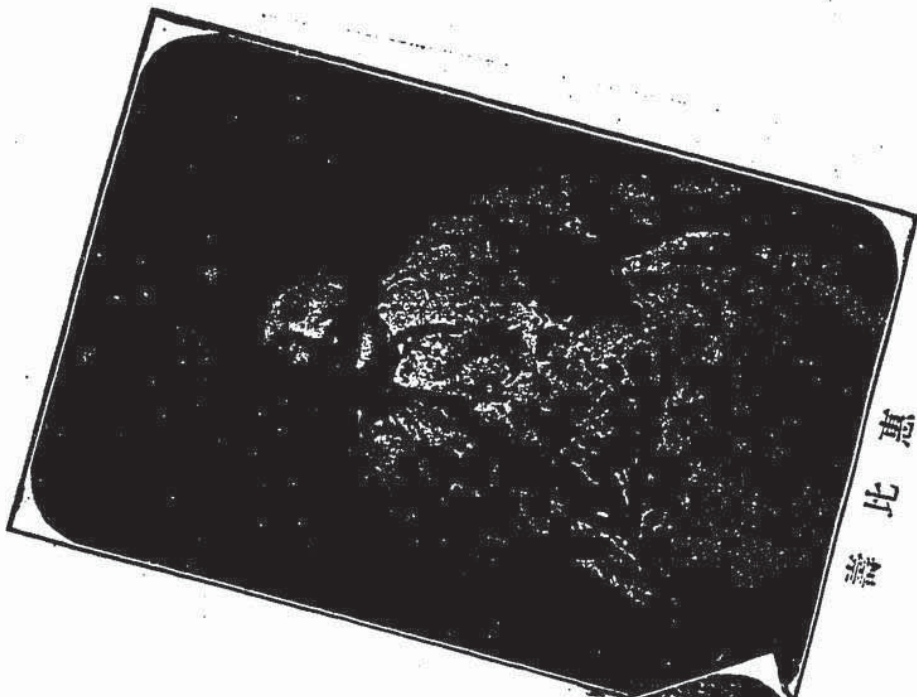
々 狸



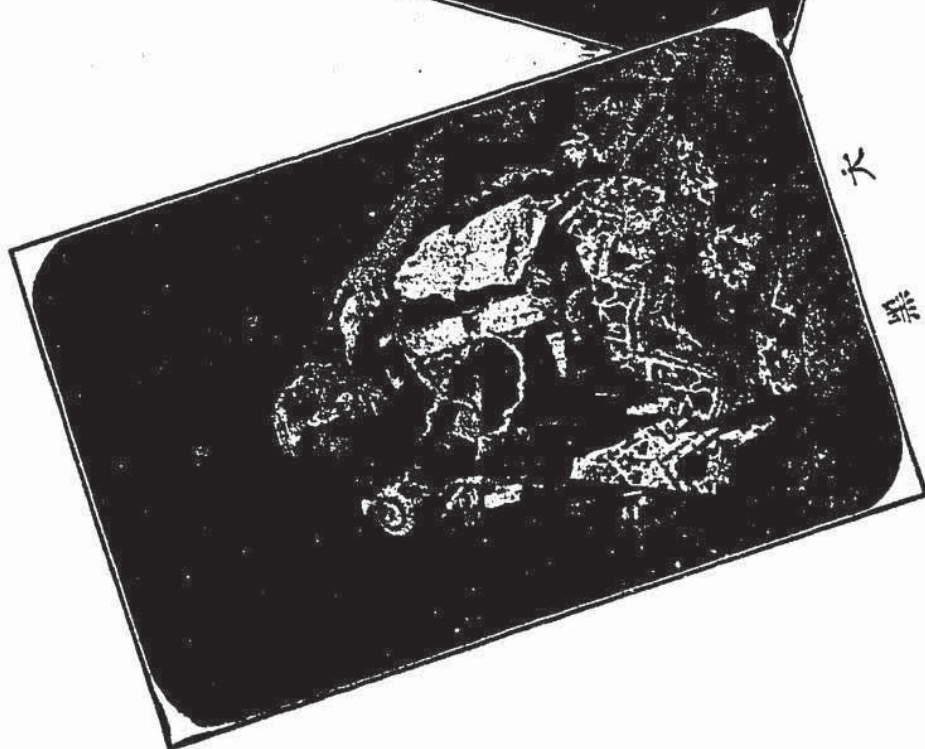
人 洋 の 装 和



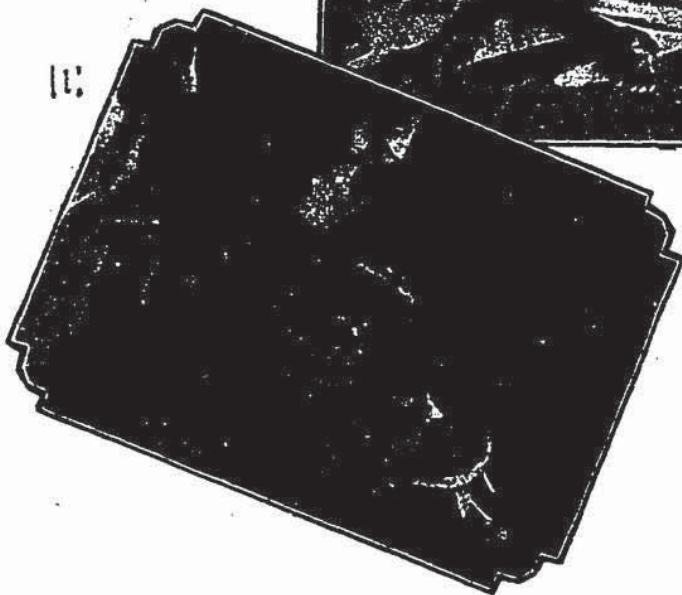
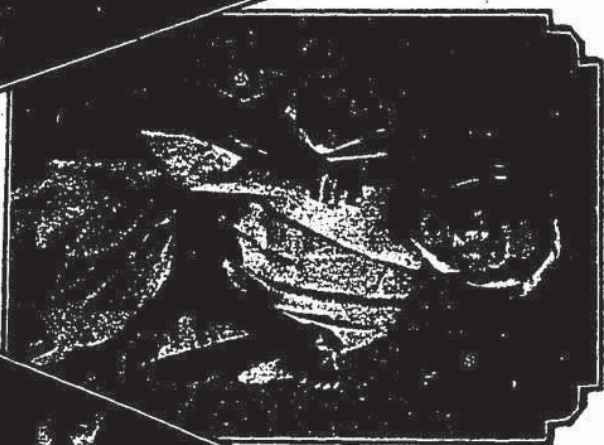
蝟



惠比壽



水  
黒



醉 生 人 三

狩 葉 紅



女 鬼



茂 維

老 夫 婦 と 壯 士



ハ イ カ ラ 夫 婦

蛤 燒 宿 の 名 桑



北  
八



彌  
次



茶店  
の  
亭主



按  
摩

滑稽百面相目次

八五郎の年禮	一
親父の學問	二
歌ぼめ	一九
粗忽の使者	二八
ニユウ	四二
安七	五二
壽限無	五七
江戸砂子	六五
蛙茶番	七六
しやれ小町	九二



滑稽百面相目次終

百	川	一〇〇
素人	船頭	一〇四
落語	虎の巻	一一八
たらちね		一二五
味噌藏の大宴會		一四六
若旦那氣質		一六〇
魚賣人		一六九
發句	泥棒	一七四
相撲	狂	一八〇
大晦日		一八七

## 滑 萬 種 萬

## 八五郎の年禮

エ、八五郎の年禮と云ふも話を申上げますが、是は福圓遊の専賣のお話して御座います。

八「へい八五郎で御座い、御慶を申上げます。隠居これはく、八五郎さん、御早やばやと有難ふ、舊年は何にかと御世話になりました、本年も相變らず御願ひ申上げ

三遊亭福圓遊講演

浪上義三郎速記

ます 八「へい御かみさん御慶を申上げます、へい御婆アさん御慶、御鍋どん御慶」

隠「八さんおまへが年始に来て御慶に嬉しいネ、おまへ何處で聞て来たな 八「御隠居さん御慶な御心配しては叶ねエ、御慶と云ふのは御芽出度と云ふ符帳だらふ……」

隠「然し八さん、此頃はおまへさんは大層品行がよくなつた實に豪イものだ 八「隠居さんの前だが、此節は發句を少し許りやりますので 隠「然うだツて、此間内の愚妻から聞きましたが、中々初心の様ではない、句ちやうが面白いと思妻が褒て居ま

したヨ 八「へい此間おまへさんの内の愚妻が俺の發句を見て感心して居ましたが、おまへさんの内の愚妻は女の癖に能く判る愚妻だネ 隠「コレは驚いた、俺が家内の事を愚妻と云ふと、おまへさんも一緒になつて愚妻と云ふのは驚いたなア 八「夫れでもおまへさんも云つて居るではないか 隠「俺は家の者だから構はない 八「へッそんな勝手な事はねエや 隠「處で八さん、新年の事だから何か一ツ名吟がありさうなものだナ 八「ありますとも大ありだ、先づ新年の御題と云ふのは何んでしたネ……」

隠「新年の御勅題は松上の鶴だ 八「去年は 隠「去年のは寒月梅花を照すさ 八「去年  
 ので何か良のはありますかネ 隠「ありますとも、是は私の句ではない、或る宗匠が  
 云つたのだが、大層良い句ださうだヨ 八「へい何んと云ふ句ですエ 隠「梅照す月や  
 涼しきみことのり、と云ふ句だ 八「俺のは然うではないよ、恙う云ふのだ、寒月に  
 梅花の尻をどやしけり 隠「夫れは何う云ふ譯だネ 八「隠居さんには濟ないが、實は  
 遊びに行たら俺の相方は梅花と云ふ女だ、其奴は馬鹿に尻が冷たいからひッ撲いて  
 遣りました 隠「そんな判らない事は叶ねエ 八「夫れでは今年の題で何にか出来まし  
 たか 隠「宜いのは出来ないが、千歳ふる松や朝日に鶴の聲、モー一ッは、うらゝか  
 や鶴舞ふ松に初日かげと云ふのだが、私も未だ初心だからよい句は出来ないヨ……  
 八「俺のは、猩々や柄杓擔いで瓶の側 隠「夫れでは鶴がないから困るし、松上が遠  
 ふから叶ない 八「鶴がないから龜を融通につかふのだ、其位の事はまけて呉なけ  
 れば困る 隠「馬鹿を云へ、此問題を書いて寄來してくれと云つたから、下女に持して

やつたが何うだ、アレで出来ましたかネ 八「へい出来て此處へ持て来ました 騷「夫  
 は面白い是非拜見致しませう 八「御覽を願います 騷「是は驚いた皆な假名ばかりだ  
 ネ 八「未だ字を知りませんから、發句を始めてからいろはを習つて居るので 騷「然  
 し今からでも手習をするとは見あげたものだ 八「其のくせ始終見下げられて居ます  
 是は一寸讀みにくひナ 八「然うだらう俺にも間を置くこと讀みにくひが、よし俺が讀  
 で聞せませう 騷「何うか然う願いたいネ 八「先づ旦那の呉れた題は蛙と云ふ題だ、  
 墓口を忘れて何にも蛙かな 騷「夫れは何う云ふ譯だエ、蛙と云ふのはかへるの事だ  
 ヨ 八「然か俺は何にも買はないと云ふ題と思つた、跡は寒餅と云ふ題で、かんもちや  
 何にをするにも首を振る、と云ふのは何うだ 騷「オイ、かんもちと云ふのは寒中  
 搗く餅の事だ 八「俺は横町の隠居が始終疝の作用で首を振つて居るから、かんもち  
 や何にをするにも首を振るとやつたのだ、跡は牡丹と云ふ題で、洋服の胸に立派な  
 ぼたんかな 騷「オヤ、驚いた 八「跡は鹿の子と云ふ題で、菓子皿の上に大福鹿

の子かな、鹿の子餅と云ふ餅だらう 騷然うではない、鹿の子と云ふ題だ 八「鹿と判らないから爲やうがねエ、跡がくじらと云ふ題だ、かね尺に二寸のびたるくじらかな 騷ものさしではないよ 八「跡が蝙蝠と云ふ題で 騷こふもりは蝙蝠と云つて夏の題だ 八「然うく夏の題だ、こふもりや深骨かたは女持 騷其の傘でない飛で居る蝙蝠の事だ 八「跡は四十からだ、人間の男盛りや四十から 騷鳥のことだよ、 八「夫では鳥ちがへたのだ 騷跡は 八「凧だ 騷凧はいかのぼりと云つて春の題だ 八「大凧の踊つて居るや神樂堂 騷恰で夫では馬鹿踊りだ 八「次は猿すべりと云ふ題で 騷猿すべりと云ふのは寺などにある木で、皮のむけた木で紅い美しい花の咲くものだ 八「何んでも構はねエさるすべりだ、獵師に追かけられて猿すべり 騷驚いたなア 八「跡が春のさめだ 騷春のさめではない、春雨だ 八「よしきた、船ぞこをがりくかじる春の鮫 騷雨の事だ、魚ではない 八「跡は水貝と云ふ題だ、水貝や慄へてあがる井戸もぐり 騷夫は何んだ 八「水を替て居るから井戸屋の親方の事だ

らう、跡は雁だ、差押へさるゝは借のわかれから 鷹 初春早々いけない句だなア

八「借じやア仕方がねエや 鷹 跡は 八「跡は踊と云ふ題だ 鷹 踊は秋の題だ 八「書

替に一分取られる踊かな 鷹 お前は下等だなア、踊と云ふと盆踊の事だよ 八「跡は

俺の自慢の句だ、口なしと云ふ題で 鷹 口なしと云ふと山椒と云つてアレは黄ろい

花の木だ 八「何んでも構はねエ口なしだ、口なしや鼻から下はすぐに腮、處へ又一

人變り者が遣つて参りました ○「へいお芽出度ふ 鷹 是は熊さん能く御出、本年も

又相變らず願ひます 八「是は熊さんお芽出度ふ 鷹 ヤア八公ではない、八さん御芽

出度ふ 鷹 今ネ熊さん、八さんの春興を聞きましたが、なかく能く出来ました、お

前さんも負ずに何にか一ツ願ひたいネ 鷹 隠居さんの前だが、私は慙う見へても憚

りながら、何處の催しでも天地人三才をはづした事はないからな 八「ソイツは美や

ましぬナ 鷹 實に夫れには恐れ入りましたヨ 鷹 然う褒られると少しさまりかたが

悪いが、八さんと隠居さんの前だから白狀するがネ、實はアノ句は皆な自分のでは

ないから可笑や、騨人様の句では叶ないネ、鵜夫れがネ、他人の句をぬすむのでも  
 ないヨ、只いろくの發句の本を買て來て、其中から良のを引こぬいて、ソイツを  
 焼直して出すのだ、此間恁う云ふ句があつたヨ、長閑さや隅田から廻り二人連と云  
 ふのがあつたから夫を焼直して、梅咲や隅田から廻る二人連、と云ふのを拵へたの  
 だ、騨人の句をぬすんでは風流にならないア、鵜何んでも景物さへ取れば構はな  
 いやア、騨夫れでごまかした所が若し運座の時には何うするエ、鵜運座と云ふのは  
 騨夫れは皆さんが集つて始めて題を出して、何か讀こんでこしらへるのだ、鵜運座  
 の時にはうんざりするア、構はねエや腹が痛いと言つて逃げるサ、夫れだがネ、  
 俺は人の句を焼直するのが慣てしまつて何んな句を出されても、直ぐ焼直して御覽に  
 入れるから、嘘だと思ふなら八さんと隠居さんで昔の句を聞いて御覽なせエ、片端  
 から直して見せるから、騨宜しい、夫れでは一番困らしてやりませう、昔の句に  
 恁う云ふのがあるヨ、古池や蛙飛込む水の音、鵜何に古池や蛙飛込む水の音か、宜



し、待合や風が飛込む靴の音 馬「コレは旨い、夫れでは、酒なくて何んのおのれが  
櫻かな 熊「酒なくて何んの己れが櫻かな、宜しきた、髻なくて何んの己れが餘かな  
馬「井のはたの櫻あぶなし酒の酔 熊「火のはたの安座あぶなし酒の酔は何うだい、  
馬「成程夫れでは一りんで事たる梅の匂ひかな 熊「七りんで事たる鍋の煮ものかな  
馬「これは恐れ入つた、道の邊の木花は馬にはまれけり 熊「道の邊のまぬけは馬車  
にしかれけり 馬「コレは面白い、唐崎の松は月よりおぼるにて 熊「笹巻の鮎は海  
苔よりおぼるにて、何うだい 馬「あざやか〜、蜻蛉釣今日は何處までいんだやら  
熊「そんだ拘摸今は何處まで逃げたやら 馬「夏草やつはもの共の夢の跡 馬「よし原  
や馬鹿ものどもの夢の跡 馬「夫れでは、梅が香にのつと日の出る山路かな 馬「真夜  
中によつとへ出る親父かな 馬「コレは亂暴然し感心しましたヨ 熊「何んなもので  
げす 馬「御二人ともに恚う申したら失禮ですが、まるで學問がないのに夫れだけの  
事をやるのは誠に恐入りましたが、君達の様ながさつの方が何うして風流の道へ入

られたかお聞き申したいネ、熊「夫れは恚う云ふ譯だから一ツ聞いておくんなさい、此  
 間深川の三啓さんの所へ往たらネ、宗匠と云ふ人が来て居たのだ、熊「夫れは何に宗  
 匠と云ふのだ、只宗匠ではない、熊「其坊主に俺が對つて、少し承はりてエと云  
 つてネ、恚う云ふ事を聞きましたヨ、私共は何んにも知らねエ職人ですが、字の讀  
 めねエ者にはあまへさん方のやる篤やとか、初雪やとか云ふものは出来ませんか  
 と聞くとネ、其坊さんが高慢な面をしてネ、凡そ人間と生れて是をやらうと思つて  
 勉強して、何んでも出来ない事はない、遣つて御覽なさいと來た、其の昔貞家卿と  
 云ふ人があつて、夫れは歌の名人だ、其人がある田舎へ行て一軒の草家へ泊つた、  
 スルと其處の家の婆さんが云ふには、貴下は歌修行の先生の様でがんですが、妾は田  
 舎者で學問も何んにもがんせんが、其歌をやるベイと思ふが出来ませんかと聞くと  
 貞家卿の云ふには出来ない事はない、私が今題をやるから一ツこしらへて見ろと、  
 時鳥と云ふ題をくれたとサ、すると婆さんが時鳥と云ふ鳥は何んな鳥でがんと聞

くと、アレは冥途の鳥だと云つたら、夫れでは妾の家の親父さんは三年跡におツち  
 んだから夫れで考えべいと、其の晩寝ないで考えて、やうく曉方になつて考えた  
 とヨ 熊「何う云ふのが出来ました 熊「時鳥おぬしやア冥途の鳥じやげな家の八兵衛  
 どんに逢や爲なんだか 熊「何んだかおかしいなア 熊「夫れを聞いて貞家卿と云ふ人が  
 大變に褒て私が直してやると云つて、直したら大層な歌になつたとサ、時鳥冥途の  
 鳥と聞くからは我なき夫にあいやしつらん、と云ふ豪イものが出来たと云ふから、  
 こいつは面白いと八公と相談して發句を始めましたのサ、先はあらくめで度かし  
 くだ 熊「感心ト 熊「御隠居さんの前だが歌發句の力と云ふものはゑらいもんでネ  
 歌を詠で雨を降らしたと云ふのがあるツてネ 熊「夫は小野の小町の雨乞の歌、こと  
 わりや日本ならば照もせでさりとてはまたあめが下とは 熊「發句ではありませんか  
 景氣が悪いなア 熊「夫れは發句にもあります、向島の三圍の額堂の脇にある碑で、  
 夕立や田を三めぐりの神なれば、あれは附合で、夕立や田を三めぐりの神なれば筑

波の山にのりし雨雲、と云つたら雨が降たと云ふ有名な發句がある。熊成程つけ合  
 と云へば、橋の上で大高源吾と云ふ人と寶晉齋其角と云ふ人と附合をしたと云ふ  
 話しがあります。隠居さん知つて居ますか。騷私しは深く知りません。熊俺は深  
 く知らねエ人に話しをするのは大すぎた、話して聞かせようか。騷是非聞せて下さ  
 いナ。熊少し講談になりますからお湯を一杯下さい、エヘン頃は元祿十五年十二月  
 十四日、朝まだきより雪は卅巴と降りしきる、屏風が戀の仲立に蝶と千鳥の三ッ  
 どもえ、もと木にかへるねぐら鳥、まだ口あをいではないかゝるなア。騷オイそんな  
 聲で唄つては叶ねエ。熊エヘン通りかゝつた永代橋、雪は鷺毛ふに似て飛で散亂な  
 す、人はかくしやうを來て立て徘徊爲す、徘徊なすから其角がやつて來たのだ。遊蛇  
 の目の傘に長合羽高足駄を穿て來ました、スルと向ふから來たのは大高源吾、煤竹  
 を擔ひでやつて來た、名前を子葉と云ふ、しようがないから煤竹賣と云ふ譯ではな  
 い、忠義の爲には何にか厭はん、互ひに顔を見合せて何か話すかと思ふと、其角が

筆を取て紙へさらく」と書て出した句が豪いや 熊「何んと書て出しました 熊「年の瀬や水の流れと人の身は 熊「宜いなア、夫から大高の句は 熊「浪のり船の音のよさかなサ 熊「オイ先刻から黙つて居れば宜いかげんな事を云いなさる、第一何處の橋で出會をしたのだへ 熊「永代橋サ、おまへさんは深く知らなければ黙つて御出なせエ 熊「夫でも餘り馬鹿くしすぎるからサ、アは永代ではない兩國の出會だ其角が年の瀬や水の流れと人の身はと云ふから、大高があした待れる其の寶船と云ふのだ、お前さんのは大高の句が違つて居るヨ 熊「何に句が違つて居る、お待なせよ、お前さんは兩國で本所區だ、俺は永代で深川區、アゝそれで區が違つたのだア。

## 親父の學問

御免を蒙りまして一席御邪魔をいたしまする、近頃御子供衆の御利登と云ふもの

は實に恐れ入つたもので御座います、先達ても新橋のステーションの所に十一二に  
 なる坊ちやん方が何方へか御旅行でもなさると見えて御見送りの子供衆と御話しな  
 すつて居らつしやるを承はりますと。○「いよいよ君は今日立のかへ。△「ア、僕は米  
 國へ行ヨ。○「彼邦へ行つたら繪葉書を送つてくれ給へ。△「宜しい、諸君失敬」實に  
 何うも驚きました、其の昔は江戸子が上方見物に参りまするに御友輩が品川邊まで  
 送つて参りますると御互に涙を滾して別れたもので御座います。○「兄い大きに御苦  
 勞様で、仕事の多忙どころをいろいろ御世話さまになつて相濟ません、何處まで送  
 つて下すつても同じ事で御座います、コ、ラで威勢よく歸つて貰ふやうにして……  
 △「じやア氣を付けて行きなヨ。○「オイ先刻頼んだ事を御願ひ申しますよ。△「何だへ  
 泣ッ面アしやアがつて何を頼むのだ。○「母親の事さ、何分不在中御頼み申します、  
 △「没趣味事を云ふナ、汝の母親ならば俺にも母親じやアねへか、夫より大事にし  
 て行て来い、先刻も前に寶丹を遣つて置たが、旅は水變りがあるから、水を飲度に

寶丹を飲ねへヨ、なんて恚う云ふ有様で御座います、只今では大阪神戸何處へ御出になるにも手数がかゝりません、汽車に乗ってドン／＼行ますから譯は御座いませんけれども其の昔は馬の背を借たり肩輿へ乗たり又はテク／＼歩いたもので御座いませんから容易には參られませんが、只今の坊ちやん方が御聞なされると宛然嘘のやうで御座います、此節は子供衆がいろ／＼落語を御拵へになりました、チヨイ／＼新聞なぞへ御出しになります、實に我々商賣人が恐れ入るやうな巧妙ものが御座ひます或學校の教員先生が生徒に向ひまして 先生「皆さん鳥渡御聞申します、海の沙と云ふものは何うして辛いのですか、知つて居る方は手を御擧なさい 生徒「先生知つて居ります 先生「何うして辛いのです 生徒「海の沙の辛のは鮭が居るからで御座います」復恚う云ふのが御座います、教員先生が子供衆を御呼になつて 先生「ア、デコ山さん鳥渡之へ御出なさい、貴下の作文は之は何ですか、貴下は不勉強だから恚う云ふ不巧作文が出来るのです、此事を貴下の阿父さんの所へ手紙で然う云つて

上ますが何うですか 生徒「阿父さんの所へ手紙で知らしても冗で御座います 先生何  
 故冗ですか 生徒「其の作文は阿父さんが拵へてくれたのです」夫じやア知らした所  
 が爲かたが御座いません、然し親子のあひだは妙なもので乞食の忤が親父に對つて  
 子「阿父さん 父「何だ 子「頃日は方々に火事があると云つて困つて居るが、此方は  
 家がないから安心だネ」乞食の親の云ひやうが宜い 父「夫れも之も皆な親父の御庇  
 だ」憊う間違つては大變で御座います、未だ一ツ憊う云ふのが御座います ○「道具  
 屋さん其所にある鐵砲の代は幾金で 道台は楳で御座います ○「アレ金を聞て居る  
 シだヨ 道「金は眞餘です ○「價を聞て居るンだヨ 道「ドーン」と申しました、能私  
 などが御客様に叱られます 客「貴様達は毎度一ツ話ばかりして居るが偶には珍し  
 い話チウものは出来ぬものであるかい ○「眞に恐れ入りました事で、私も何うか珍  
 しい話を拵へたいと神經を痛めて居りますが、到底出来ませんが何う云ふもので御  
 座いませう 客「何うも君は學問が無から叶ん、少し學校へ行つて勉強したら何うじ



や ○「有難ふ御座います」是から直に學校へ参りまして、教員先生へ御目にかゝつて御願ひ申しますと、教員先生曰く、曰くと云ふ程大業な事でもないが、先生御前の腕前ならば小學校の一年生だから其の心得で来い」と被仰ました、私の娘にも小學校の一年生が一人御座いますが、親父と子供と揃つて同じ一年生では白眼が利ませんから廢ましたが、矢張り私の近所にも然う云ふ方が御座いました、阿父さんが五十三歳悴が八歳二ヶ月、此の八歳二ヶ月の子供に親父が學問を教はつて居ります之餘り外見好ものでは御座いません 父「オイ龜鳥渡茲へ來イ 龜阿父さん何だへ、父親父に學問を教へろやイ 龜驚いたナ、教はる人に對してソナ失敬な事を云ふなら僕は御免を蒙るヨ 父ソナ事を云はずに教へてくれやイ、コン畜生 龜コン畜生は呆れたナ、ソナ野卑な言葉を遣う人には教へられませんヨ 父ソナ事を云はねへで、何か買てやるから教へてくんねエ 龜何か買て下されば御教へ申さう 父イヤニ慾張つて居るナ 龜阿父さん讀方を教へませう、能く字を揆きたまへ

父「心得た 龜「阿父さん御辭儀を爲るのですヨ 父「俺が汝に御辭儀を爲るのかへ、  
 龜坊に御辭儀を爲るのではないのだ、本に御辭儀を爲るのだヨ 父「成程、此奴は  
 理窟だナ、然し俺の御辭儀は餘り恰好が好ないからナ、オイ阿母ア是から龜坊に本  
 を教へて貰ふのだ、お前が居ちやア外見が悪いから何處へ行つて遊んで来イ 龜「阿  
 父さん御教へ申しますから能覺え給へ、母様今日は面白い唱歌を習つて参りました  
 父「母様けふは面白い……阿母ア何を笑つて居るのだ 妻「何を笑つて居るつて窓が  
 明て居るので、皆な見て笑つて居るじやアないか父「笑ふ奴には笑はして置け 龜「サ  
 ア阿父さん能覺え給へ、母様今日は面白い唱歌を習つて参りました 父「母様今日は  
 面白い生薑を 龜「生薑じやア御座いません、唱歌ですよ、母様今日は面白い唱歌を  
 習つて参りました 父「母様今日は面白い唱歌を習つて参りました 龜「只今歌ふて御  
 聞かせ申しませう 父「只今歌ふて御聞かせ申しませう 龜「是から阿父さん唱歌で御  
 座いますヨ 父「何だへ唱歌と云ふのは 龜「歌の事を唱歌と云ふので御座います 父「歌

が唱歌か、歌なら阿父さんはチャンと心得て居るヨ、混堂學校で勉強して巧妙も  
 だ、サーツ威勢よく行つてくれ 龜「走るに早き兔すら 父「ア、ドツコイ 龜「阿父さ  
 んソソナ事を云つては叶いません……走るに早き兔すら 父「走るに早き兔すら 龜「眠  
 むれば龜に追越さる 父「眠むれば龜に追越さる 龜「優れる人も怠たれば 父「優れる  
 人も怠たれば 龜「劣れる人の後になる 父「劣れる人の後になる 龜「岡めやく 我が  
 見らヨ 父「マア待、禿めとは何だ、俺の頭がハゲて居るからソソナ事を云ふんだら  
 う 龜「然うではありません、はげめやく 我が見らよと書てありますヨ 父「何ソソ  
 ナ事が書てあるものか 妻「何だネお前さん、はげめやくとチャンと書籍に書てあ  
 りますヨ 父「インヤ汝、子供の肩を持やアがる、殊によると龜公と怪いぞ 妻「何を  
 馬鹿な事を云ふんだネ、親子でソソナ事がありますか 父「此の道は別だからナ妻「逆  
 も學問では龜坊には敵はないヨ 父「學問では敵はねへが相撲取れば負ねへ

## 歌 ぼ め

さて歌ぼめと云ふみじくながら新作を一席申上げます、江戸子は五月の鯉の吹流し、口先ばかり臆は無し、江戸と申した其頃は、田夫野人が多く二タ言目には、ベランメーまごころすると胸ッ腹を蹴破るぜなどと申しましたが、只今では皆さんが品行がよくなりまして亂暴はなくなりました、手前のよふナ者でも、成る丈品の善事を御喋舌をしたのと存じて居りますが、自慢ではありませんが學問がありませんから、どふも失策が御座ります八五郎隠居さん先程から後に私が立つているのにお氣が附かれませんか 騷是は驚ろいた、何時の間にもやら、斷わりなしに人の座敷へづか／＼はゐつて來る奴があるか、失禮な男だ 八「まあいゝやな一寸見當を附た處が、花を活て居るやうだが花は何流だね 騷貴様が聞たつてわからなから無駄だ 八「こんちくしやう人を馬鹿にするなよし、俺が當て見よう、先づ此活方では、

一刀流かそれでなければ神蔭流か向井流か吉田流か知らん 騷「此男は馬鹿だナア、  
 劍術や、泳じやアあるめし、私のは遠州流と云ふのだ 八「成程、俺も然うだろふ  
 と思つた 騷「随分負惜みな奴だ 八「處で隠居さんお座敷が、されるになつて良い心  
 もちだが少しせまぬナ 騷「それはそのはずだ、此座敷は茶室だ 八「茶室といふのは  
 何だ 騷「茶を立てる座敷の事だ 八「英語でいつては困る 騷「英語ではなる、困つた  
 男だ 八「さつきから見て居るのだが、あすこにぶらさがつて居るのはナンダ 騷「あ  
 れは懸物だ 八「何に化物にしては、こわくねへナ 騷「化物ではなる懸物だよ 八「座  
 敷は新らしくていい心持だが、懸物がきたねへが新らしいのを、かけたらよからう  
 騷「あいにくよいのがないからナ 八「それではうちにあづかつたのがあるから、當  
 分借して、あげますか 騷「ハア、お前の貴家に何にか良いのが、ありますかね、  
 八「ありますとも、先づ此間學校の先生に讀でもらつたが、狩野法眼の墨繪の龍、  
 應擧の虎、渡邊華山なんていふのがあるよ 騷「それは恐入りました、何にか御先祖

からでも傳わつてゐるのかね 八「ナアニ淺草公園花屋敷の前の處で一ぶく十二錢ヅ  
 、だがね、二時間半懸あつて十一錢に負けてもらつたのだ 騨馬鹿にするな、それ  
 はいかねへよ 八「そふかね、其れでは是れはいけるのかね 騨良いと云ふわけでも  
 ないが内にあつたからかけて置たのだ 八「何んと書いてあるか御安い御用だが讀ん  
 で聞かして、御くんませへ 騨お前お讀みになつたらよかるふ 八「それがね俺あ有  
 筆だから讀ねへ 騨有筆は讀めるのだ無筆が讀め無いのだよ 八「その筆だからたの  
 むよ 騨鬼瓦行來の人を下に見る、といふのだ 八「成程いゝ都々逸だ、一寸歌つて  
 見よオ 騨よせよその聲でうたわれてたまるものか、第一都々逸では無い、五七五  
 文字、十七文字の發句だ 八「變な物があるものだ 騨先達ておまへ私の家のお惣妻に  
 ナンと云いなすつた、これからは開明の御代故よる方々と御附き合ひをしたるとい  
 つたらう 八「それはいつたよ、よゐ人と附合ひをすると、何にかもらつたりして、  
 得がゆくからね 騨お前は下等でいかぬなあ 八「それはね、お前さんの處の惣妻も

そらいつたよ 騷さわいよくいよく 亂暴らんぼうなやつだ 八「ダガネ鬼瓦おにがわ行來ゆきる人ひとを下したに見みるといふのはなんの事ことだ 騷さわそれは加賀かがの千代ちよといふ女をんながあつた、千代ちよが往來わうらいを通とほると近所きんじよの若い者ものが鬼娘おにむすめが通とほると、悪わるる口くちをいつたのだ、すると加賀かがの千代ちよは是これを聞きて醜みにく婦むすめであるが、勉強べんきやうして、お前達まへたちより出世しゆつせして見みせるといふ、氣高けだかい處ところを言いつたのだ 八「ゑらぬ事こと、いゝやアがつたナ、まだそのお千代子ちよこがいつたのがありますかへ、 騷さわそれはいくらもあります、其内そのうちに千代ちよが、或ある時ときさる御屋敷おやしきへあがつた事ことがあつた 八「へ、へ猿さるの屋敷やしきとは驚おどろいた 騷さわ猿さるではない、ある屋敷やしきへあがつたのだよ すると御女中おぢやうちゆうがのぞみて、フツつて居かるといつて、笑わらつたのだ、其そのときときの句くに、

ひとかへあるも柳やなぎは柳やなぎかな

といふ句くをよんだのだ、女中ぢやうちゆうが、顔かほを皆みんな赤あかくしてかくれたと云いふ事ことだ 八「成程なるほど、猿さるの屋敷やしきだからつらを赤あかくしたのだナ、まづ隠居いんきよ、もし、わたくしが、俳句はいくの事ことなんかを、やつたら、人ひとがどうしましやうね 騷さわそれはお前まへを、人ひとがたつとむね 八「は

しと茶わんでかへ 騷「それはかつ込むのだ、たつとむと云ふのは、馬鹿にしなる事  
 だ、ふだんお前の事を人様がなんと云ふ 八「それはヲ、八公とか、只、がら八とか  
 言ひます 騷「それを、俳句でもやれば人様は八公と言つたのが、先づ八さんと云ひ  
 八さんといつたのが八様と云ふやうになる 八「成程、八様それから八大明神、して  
 見ると大明神は戻りの八公か、だがね隠居の前だが、大家のやらうが、俺を一番馬  
 鹿に、しやアがるから是から、大家の凸凹の處へ行つて一番騷物をほめて、うやま  
 われて、来るからそふ思へ 騷「よしなよ、能く物を知らないでなにか云ふと、はじ  
 をかくから、よしなさいよ 八「へん人に物を教て置ておしがつてゐるな、かまわね  
 へ、是れから出懸けるよ、左様なら 騷「これ〜歸へるなら格子を、めていきなよ  
 八「何れ又來てめるよ……、こらく〜大家さん、貴家に在るかね 家「誰だ、八  
 公が、店賃を持つて來たかな 八「大家さん悪い病だナア、人の面さへ見れば店賃  
 の催促だ、いひかげんに忘れてもいゝ時分ですぜ、はどかり乍ら、いつもの八公ト



は、理<sup>ロ</sup>けが違<sup>ち</sup>がうぞ、八<sup>さま</sup>様から八<sup>だい</sup>大明神<sup>みやうじん</sup>だ、ヲイ大家<sup>おほや</sup>お前<sup>めづ</sup>のうらに懸<sup>かけ</sup>物<sup>もの</sup>があるか、あるなら見<sup>み</sup>せろ、先<sup>ま</sup>づ第<sup>だい</sup>一<sup>いち</sup>が家<sup>や</sup>根<sup>ね</sup>から、鬼<sup>おに</sup>が<sup>つ</sup>らを出<sup>だ</sup>したのだ、第<sup>だい</sup>二<sup>に</sup>がふとつて居<sup>ゐ</sup>るとかなんだ、ふとつているといつても笑<sup>わら</sup>ふやつが、あるかへ、一<sup>ト</sup>かへあるも蛙<sup>かはづ</sup>か蛙<sup>かはづ</sup>かな、柳<sup>やなぎ</sup>や柳<sup>やなぎ</sup>、なか、風<sup>かぜ</sup>次<sup>し</sup>第<sup>だい</sup>、山<sup>やま</sup>吹<sup>ふ</sup>きやうわ氣<sup>き</sup>で色<sup>いろ</sup>許<sup>ほ</sup>りしよんがいナアどふだ驚<sup>おど</sup>ろいたらう、大<sup>この</sup>ナ<sup>の</sup>ンダ此<sup>こ</sup>野<sup>の</sup>郎<sup>らう</sup>どふかしていやアがるナ、八<sup>おつ</sup>とど大<sup>おほ</sup>家<sup>や</sup>さんだまつて、懸<sup>かけ</sup>物<sup>もの</sup>をお見<sup>み</sup>せなせへ、大<sup>ど</sup>うかしやアがつたナ、懸<sup>かけ</sup>物<sup>もの</sup>はそこにある見<sup>み</sup>ろ、八<sup>は</sup>「なんだこれは石<sup>せき</sup>塔<sup>た</sup>だな、家<sup>は</sup>「馬<sup>ば</sup>鹿<sup>か</sup>、石<sup>せき</sup>塔<sup>た</sup>ではねへ、それは碑<sup>ひ</sup>と云<sup>い</sup>ふ物<sup>もの</sup>だ、石<sup>いし</sup>づりだ、八<sup>は</sup>「馬<sup>ば</sup>鹿<sup>か</sup>にするナ火<sup>ひ</sup>といふ物<sup>もの</sup>は赤<sup>あか</sup>いぞ、是<sup>これ</sup>は黒<sup>くろ</sup>いじやアねエか、サア何<sup>なん</sup>と書<sup>か</sup>いてあるかそれを言<sup>い</sup>へ、家<sup>は</sup>「是<sup>これ</sup>は(つまらぬといふわちるゝな智<sup>ち</sup>惠<sup>ゑ</sup>袋<sup>ぶくろ</sup>)といふのだ、八<sup>は</sup>「何<sup>なん</sup>の事<sup>こと</sup>だ、ごしやうだから、わけを聞<sup>き</sup>せる、家<sup>は</sup>「つまらぬといふわちるゝな智<sup>ち</sup>惠<sup>ゑ</sup>袋<sup>ぶくろ</sup>といふのは、人<sup>にん</sup>間<sup>げん</sup>はよく、あアつまらぬといふたらふ、あれハ自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の働<sup>はたら</sup>きのないのを人<sup>ひと</sup>様<sup>さま</sup>にふゐてふするよふなもので、此<sup>この</sup>けつこうな世<sup>よ</sup>の中<sup>なか</sup>に生<sup>う</sup>ま<sup>れ</sup>て來<sup>き</sup>てつまらぬぞと

云ふ物ではない 八「成程、わかりました、わつちが一番ほめてやらう、こいつはい、  
 俳句だ加賀の千代は巧妙ものだ 家馬鹿だナア、だまつて居ればわからないに、是  
 は俳句ではない六世川柳といふ、人の辭世だ 八「へい川柳なんて物があるか、俳句  
 に似て居るナア 家似ていても川柳だ 八「千住ダカ、小塚つ原だかわからない、左  
 様なら、馬あいのや 八「どう致しまして、又た來るらア……隠居の畜生、川柳を  
 教へねへからやりそくなつたが今度は大丈夫だ熊五郎やア八公寄らねエか、うちの  
 前を素通りか 八「おつと難有い、手前は良い友達をもつて仕合せだぞ、常もの八公  
 とは譯が違ふぞ、先づつまらぬなぞと云ふな、此結構な世の中に出て來て、つまら  
 ぬと云ふのは、自分の働らきのないのを人に知らせるよふなものだぞ 熊なにを言  
 つて居やアがる、つまらぬなぞと言つていやアしねへや 八「言、そふな面だから、  
 いふのだ先づ能く聞けよ、つまらぬと云ふはちるさなエ、トぬか袋、つらをぬつ  
 たり紅をつけたりと云ふ事がある、わかつたか、まだわからねへか、鬼が家根から

面を出したら、驚ろくだらう。熊「このつどうかしやあがつたナ。ハ」手前の處に懸物があるか有るなら見せる。熊「此處に有るから見ろ。ハ」ヤアこいつは何だ槍に徳利が書てあるな。熊「是は赤垣源藏の徳利と云ふのだ、其の徳利の中には矢野の菊水と云ふ酒が入つて居るのだ、其の槍が、赤垣源藏が打入の時持つて居た槍だぞ、俺は講談が好きだから知つて居るのだ。ハ」何か書て有るが、何と書てあるのだ。熊「其れは徳利の口からそれと言わねども昔を聞けば涙こぼれる」と書てあるのだ。ハ「一番ほめてやらう良い川柳だナ。熊「川柳じやアねへ。ハ」ヲツト加賀の千代の俳句ダナ。熊「川柳でも、俳句でもねへ、これは、狂歌堂眞顔といふ人の、狂歌だ。ハ」どうして狂歌だ、それをぬかせ。熊「俳句や川柳のよりは長いから、狂歌だ、よく覺て置け。ハ」又失策つたか、左様なら……こいつは驚ろいたナ、此度は大丈夫だ長けれやア狂歌で短かければ俳句か川柳だ、しめくもふ大丈夫だ、醫者の先生甘井よふかんさん、あすこへ行つて、一つ先生を驚ろかしてやらう、此處だ……先生御免なせへ

奥へづか／＼入つて来てすみません 先「是れは誰かと思たら八五郎さん能ふこそ御出 八「處で先生の前だが、徳利が口をきくと云ふのはどうでげす、又鬼が家根から面ア出したたり、一トかへあれど蛙は蛙哉で、實に感心致しましたよ 先「ハテ徳利が口を聞くと云ふのはいち子かな、八五郎サン、お前さんの様子を見ると目をすへて、じきりに何かわからぬ事を言ひなさるが、さては腦へ少しく異状を來たしたな、少しく腹薬をして轉地旅行でもせんければなりません、氣を落附なさい 八「じやうだんいつちやアこまりますぜ、なんにもいわずにだまつて、懸物を御見せなせへ、俺の腕前がわかる 先「懸物は粗末だがそこに有るから御覽なさい 八「先生は何んで御座います 先「これはていかきようの小倉の式紙だ 八「是れかい土鼠のしこしてのは 先「もぐらのしこしではない、小倉の式紙だよ 八「何と書いてあります、先「時鳥鳴つるかたをながむれば只有明の月ぞ残れる 八「成程こゝつは長へな先生いつそ、いせゐよくほめますぜ 先「御ほめくださる 懸「こゝつはい、狂歌だ、やつば

り、狂歌堂眞顔だらう 騷「いや狂歌ではない 八」川柳かへ 騷「川柳なれば此心持で  
いくとつんぼふは只有明の月許り 八「其れでは俳句かな 騷「俳句なれば一ト聲は月  
が鳴たか時鳥 八「其れでは狂歌でなくつて川柳でなくつて俳句でなくて、これはな  
んでムいますね 騷「是は後徳大寺の左大臣と云ふ御方の和歌だ 八「何に馬鹿だ馬鹿  
じやアわからねへ。

### 粗忽の使者

粗忽の使者と云ふお話を申し上げます、粗忽の者を使つて寄來すと云ふは誠に可笑  
様ですが、昔は御大名方が御本丸へ御登城遊ばす時に、殿様方が種々御自慢の御話  
を爲さいます。〇「是は松平殿、御貴殿何にか面白いお話は御座らぬかな 松「左様別  
に面白いと云ふ事も御座らんが、拙者は米を飯に致す事を存じ居るが、如何で御座

るな。〇「是は恐入り申した、シテ何う云ふ事を致すと米が飯になりすな。松「左様先づ一升の米を水にて研ぎまして、釜へ入れ水を入れ片手を入れて、水が是程あると一升の飯が出来ますが、粗州公「然らば二升の時は、松「左れば二升の時はエー兩の手を入れて、是れだけ水があれば二升の飯が出来申す。松「然らば三升になると、松「三升の時は二本手を入れた上へ足を片ツぽふ入れます。松「然らば四升の時は、松「四升の時は二本の手を入れた上へ兩足を入れます。松「杯と云ふて居られます、皆な殿様が御自慢話で持切る、其の中に、赤井御門守「松平殿、御貴公の御家來の内に何にか面白い人物は御座るまいか。松「されば別に面白いと申す程の者も御座らんが、極粗忽にて物忘れを致す者が御座るが、赤井「夫は面白い、然らば其者を拙者の屋敷へ御使に御遣はしになるまいか。松「夫れは安い事、早速使に遣はしましょう」と殿様同志で話が極つたのだが、遣られる人こそ宜ひ面の皮だ、殿様御城から御歸りになると、直に御家來の粗忽者じぶ田次武衛門へ丸の内の赤井御門守様へ使者を云ひ

附けました、そんな事は少しも知らない、じぶ田次武衛門御立關へ出て来て、モト  
 直に馬丁と辨當と間違て 次武「コリやア辨當は居らんか、辨當くと呼びますと  
 馬丁は 馬若し旦那辨當ではありますまゐ、馬丁ではありませんか 次武「如何にも  
 ペツ當であつた」と笑ふ 次武「拙者丸の内へ使者に參る、供の者は 馬へイお供揃  
 ひは出來て居ります 次武「左様か、馬を是へふつばつて參れ 馬馬は最前から居り  
 ます 次武「コラ斯様に小さい馬では乗れんではないか 馬丁「旦那馬鹿ア云つちやア  
 叶ません、夫れは犬で 次武「成程馬は此處に居つたか」と馬に乗ましたが、是も反  
 對に乗つて 次武「コリや馬丁此馬には頭がないぞ 馬丁「冗談云つちやア叶ません、  
 首は後ろにありますヨ 次武「成程、氣の毒だが、其頭を取つて此方へつけて呉れ、  
 馬丁「そんな事は出來ません 次武「此の馬は不自由だナ 馬丁「何處の馬だつて同じ  
 です 次武「夫では拙者が尻を持あげるから馬を廻せ 馬丁「馬鹿を云つては叶ません」  
 とやうくと馬を乗りかへてシトくと遣つて參りましたのが、丸の内赤井御門守

様の御屋敷、御使者アと云ふ觸れ込みで、使者の間へ通ると當家の重役で田中三  
 太夫、御年輩の御方禿た頭の真中に蜻蛉見たやうな鬘をつけて、夫れへ参りまして  
 三是は、御使者御苦勞に存じます、拙者事は赤井御門守の家來田中三太夫と申  
 す者、以後は御見知り置いて御別懸に願はしふ存じます 次武「コレは、御町亭な  
 る御挨拶、自分事はエーソノ何んで御座る、松平さまの正の家來、エーじぶ田次  
 武エーソノじぶ田次武左衛門は手前が舍弟で御座る、エー其の手前事は、エーじぶ  
 田次武右衛門と申す者、以後御見知り置いて御別懸に願ひまするで、なア 三「手前は  
 田中三太夫で、而て御使者の御口上は 次武「ハイ、手前事は松平さまの正の家來  
 じぶ田次武右衛門と申しまする者、御見知り置いて御心安く願ひます 三「御名前の  
 儀は兩三度伺ひましたが、シテ御使者の御口上は 次武「ハイ、是ははや困つた事が  
 出來致して御座る、武士にあるまじき事で、當家の御座敷を拜借して切腹致さんけ  
 ればならん事が出來致しました、ハイ實は面目次第も御座らんが、使者の口上ぶら



忘れたで御座る、切腹致すは最と安き事では御座るが、某も武士のはしくれ、イザ  
 戦場に於て殿の御馬前にて討死致すは望む處なれど、使者の口上ぶち忘れて切腹致  
 すは残念至極に御座りまする」ハラ／＼と涙をこぼしました 三「夫は／＼近頃御氣  
 の毒千萬、何にかして御思ひ出しになる御工夫は御座りますまいか 次武「ハイ、  
 御親切なる御心添へ有難き仕合に存ずる 三「若し貴公には最前より頻りにいしさを  
 御つめりになるやうであるが、夫れは何んの爲で御座るな 次武「ハイ、御見出しに  
 預り面目なき次第であるが、まア一通り御聞き下さい、拙者幼少の節に學問等を  
 致す時に、能く物忘れを致す、スルと兩親が手前のこの尻をつめり呉れますると、  
 痛ひ／＼と心得て思ひ出した事が御座るテ、夫れが今に於て習慣と相成りまして、  
 物忘れを致す度に此の尻をつめりますると、痛ひ／＼と心得て思ひ出して御座る、  
 武士は相身互ひ身、甚だ御無禮では御座るが、手前の尻を一寸御つめり下さらんか  
 三「何んと仰せらるゝ、貴公御幼少の節物忘れを致されると、御兩親が貴殿の尻を

つめりますか、夫れは何よりも安い事、御遠慮なく衣類を御まくり下さい、御つめり申しませう 次武「夫は千萬、忝い、何分宜しく、甚だ失禮」と尻をまくる 三「サアつめりました、如何で御座らうな 次武「あつめり下さるか存せぬが一向に通じませんな 三「なか／＼堅い御尻で御座いますな、是では如何で御座るな 次武「御つめり下さるか存せんが、恰で蠅のとまり居る様で御座る 三「ム、是でも通じませんか 次武「如何で御座らふ、御當家に指の先に力のある御家來が有ませうならば、御撰み出しを願ひたいもので、左なくば此處を拜借して切腹致し度、此儀御許しを願ひまする 三「イヤ決して御短慮なされてはなりません、短慮功を爲さずと申す事も御座れば、只今同役共と相談の仕り、早速指の先に力のある者を是へ連れ参りますれば少しお控へ下されたい 次武「何分宜しく願ひ奉つる 三「委細承知仕る」と直に次の室へ退り、種々相談致して居りました、御話は變りまして、最前御使者の参ります時、使者の室の此方に大工が仕事をして居りましたが、御使者と云ふ

ので皆逃ましたが、其中に大工の留と云ふ人物が逃げそこねて、委細様子を聞きま  
して、やうく庭へ出て参りまして、一人でゲタく笑つて居りますから友達が、

熊「ライ留、何を笑つて居やアがるのだ、面白くもねエ 留處がな皆な聞きねエ、

俺は可笑つて堪らねエよ 熊「何んだ 留「他じやアねエが、今日此の屋敷へ使者が來  
たらふ、其使者がヨ、先づ此方からは田中三太夫さんで、拙者事なんてエもので御  
座いとやツつけるとな、其使者が妙な面をして田舎の言葉ヨ、手前事はエーと云つ  
て暫く考えて居て、やうく松平まさめの家來、又エーと呻吟で、じぶ田次武左衛  
門は舍弟で、エーと呻吟やアがつて、又やうく思ひ出して、じぶ田次武右衛門と  
申す者で御座る、とやうく挨拶をするとな、田中の旦那が而て使者の口上はと聞  
くと、使者の口上打ち忘れたと云つて、切腹をするから座敷を貸せと云ふのだ、  
熊「ソイツは大變だ 留「マア聞けつてエば、田中さんも大變に心配をして、何うか  
思ひ出す工夫はないかと聞くと、へんてこな顔を爲ながら尻を自分でつめつて居

るから、何う云ふ譯だと聞くと、使者が云ふには、子供の時に能く手習かなんかす  
 るに、物忘れ致し、其時に親父やお母が尻をつめつて呉れた、スルと痛い〜と思  
 つて、思ひ出した事が御座るから、氣の氣だが三太夫さんに尻をつめつて呉れと頼  
 んだのだ、三太夫さん宜しい遠慮なく尻をまくれと、尻をまくらして一生懸命でつ  
 めると、當人一向に通じませんと來るのだ、終には田中さんも額へ青筋を出して、  
 土手をかじつてつめつたが一向に通じませんでした 熊「オイ留公、土手と云ふのは何ん  
 だ」留「三太夫さんは齒が無いから土手じゃアないか、夫れだからな餘り可哀想だか  
 ら俺が是から往つて、一番尻をつめつてやらうと思ふのだ 熊「廢せよ、夫れだから  
 汝の事をち煙草盆と云ふのだ、何んて云ふと人より先へ出たがる 留「黙つて居る、  
 ペラ棒め此方は是でも江戸子だ、人の困るのを見て居られるかい、一番つめつて助  
 けて遣るのだ、若し尻が堅くつて氣が付なければ、此の釘抜でつめつて遣るのだ、  
 熊「オイ無暗な事をするな 留「宜ひつて事よ」とツカ〜と御中の口へ遣つて参り

まして 留「へい御免ねエ 侍」コラ其方は職人體だが口が違やアせんか、此處は御中  
 の口だぞ 留「へい、違やアしません、一寸田中の旦那を呼で御吳なさいまし 侍」何  
 に田中様を、オト只今恰當是へ御出になつた 留「ヤア田中の旦那、只今は御骨折で  
 アノ尻は餘程堅いかな 三「是は怪しからん奴じや、借は其方御使者の室へ立寄たナ  
 留「イエ旦那、實は皆なが逃ましたが、俺許り逃げそくなつてな、聞ともなしに聞  
 きました、誠に氣の毒な侍だ、俺は孩兒の時から指の先に馬鹿に力があるのですか  
 ら、俺に一番尻をつめらして呉なさいましな 三「馬鹿を云へ、當家の武士に力の  
 ある者がないと云つて、職人を頼んでつめらした杯と他人に聞れると御當家の外聞  
 になる、左様な事は叶ん 留「そんな事を云はずにつめらして御吳なせエ、若し嘘だ  
 と思ふなら今お前さんの尻をつめつて見やう 三「コレ何を致す、怪しからん奴だ、  
 然し一寸此方へ上れ、少々相談を致すから 留「畏りました、メ々」と一と問へ上り  
 込で参りました、田中さんは同役と種々御相談をなされて、夫れでは一ツ彼の者へ

云ひ付けて見やう、と留公に向ひ 三「コレ職人 鯉へい 三」只今相談致した處が、  
 急の事ゆへ一寸差支へるから、其方一ツつめつてくれ、當家の家來のつもりで、何  
 分頼む宜ひか 鯉へい、やツつけますとも有難エ 三「其のやツつける杯とぞんざい  
 な口をさいてはならぬ、成る丈ケ言葉を侍らしく致せヨ 鯉へい宜し御座る、何  
 んでも上へ御の字を附て、下へ奉るを附けたら宜らふ、今日は好御天氣で御座り奉  
 つるとは何うだい 三「第一侍になるには其頭では叶ぬ、御同役に一寸髪を結てもら  
 へ、夫れから印半纏を脱ぎコラ／＼腹掛を取れ、其紋付の着物を着て、帯をメろ、  
 エ、然う下の方へ締ては叶ぬ、モツと上の方へ、夫れから其袴を穿のだが、袴を穿  
 た事があるか 鯉馬鹿にしちやア叶ねエ、星れで二度目だ、一遍は親分の葬式の時  
 に穿ましたヨ 三「何んと云ふがさつな奴だ、シテ其方の名前は何と云ふのだ 鯉俺  
 は留公と云ひます 三「只留公ではあるまい、留吉とか留次郎とか、留なんとか云ふ  
 のだらう 鯉夫れがな、子供の内は留坊で、今では大概留公、又人におごつてでも

遣ると、留兄イ何んて云ひますぜ 三シテ名字は何んと云ふな 留何んだイ、其の  
 名字なんて 三困るなア、中村とか又田中とか何んとか名字があるだらう 留夫れ  
 がネ、名字は確か大工だ 三馬鹿大工と云ふ名字があるか、夫れでは宜しい、中村  
 氏の御名前を拜借して中村留太夫と云ふ名になれ 留夫れでは俺が留太夫でお前さ  
 んが三太夫、恰で伊勢のちしが二人出来上つた 三拙者が只今彼方へ参り、其方次  
 の間に控へて居れ、必ず失禮があつてはならんぞ 留へイ宜しふ御座います」と是  
 から三太夫さん、使者の間へ参りますると、使者は只茫然して居ります 三御免、  
 如何で御座るな、少しは思ひ出しになりましたかナ 次武「ハイ、是はく拙者事は  
 松平正目の正の家来じぶ田次武右衛門と申す者、以後は御見知り置れまして御別懇  
 に願はしう存じます、テハア」 三是は驚ろきました、拙者は最前より度々御目通  
 りを致したる田中三太夫でも見忘れは恐れ入ります 次武「ヤア是はく何んとも失  
 禮、御見忘れ申した 三如何で御座るナ、思ひ出しになりましたかナ 次武「何んで

御座らふナ 三「イエ御使者の口上を 次武」成る程然うく途失念致した 三「益々驚  
 ろき入りました、小身者では御座りませんが、中村留太夫と申す者、アレに控へ居り  
 ますが、如何致しませうや 次武」千萬忝けない事で、何分よろしく御願ひ奉つる事  
 で 三「委細承知致した、御次に控へし中村留太夫、早々是へ、中村留太夫留太夫と  
 呼びましたが 留留公から無官で何うだい俺の服装は、黒紋付に袴穿、我ながら男  
 が十段もあがりやアがつた、一番此の服装で町内を歩行て見てイものだ、何んて云  
 やアがるだらふ、アラ留さん一寸御覽なさいヨ、眞實に立派な事だ、ア云ふ人を  
 一べん亭主にして見たいは、と來るに相違ない、有難ひ 三「御次に控へし留太夫、  
 コレ 留、オイ 三「コレ留太夫殿、是へく」と云はれて留公 留眞平御免なせエ、  
 三「コレ失禮があつてはならん、町亭に致せ 留宜しう御座り奉つる 三「只今申上  
 げました中村留太夫に御座りまする 次武」是はく始めて御面會を仕る、手前事は  
 松平正目の正の家來じぶ田次武右衛門と申し、至つて不骨者、御見知り置れて御別



懇に願ひますので、ハイ 三「是れ留太夫、御挨拶をせんか 留「何んだイ、及へさつ  
 なんて、へイ宜ふ御座り奉つるヨ、御私事は御中村御留太夫様と申し奉つる者で、  
 御私様の御指の先へ御力が御座り奉つるから、御前様お尻様を御つめり奉つる様な  
 譯で御座り奉つる、恐惶謹言 三「コラ／＼何を申す」と留公の袖を引張ると 留「オ  
 イ然ら袖を引張つては叶ねエ、何んば借物でき切ると叶ねエ 三「コラ／＼と目で知  
 らせますると、留公キヨロ／＼しながら 留「御田中三太夫さん、是に御出奉つては  
 御私様が、御口が御聞き奉つらねエから早くあちらへ御引込み奉つれ 三「然らば失  
 禮の無い様に 留「宜しう御座り奉つる」と三太夫さんは次の間へ引退りました 留「オ  
 イ御前さん、尻を早く御まくり奉つれ、オイ御まくり奉つれヨ 次武「何んと仰せら  
 れるか、何分判り兼ますするテ 留「何んでも宜しう御座り奉つるから、尻を御まくり  
 奉つれヨ、オイ誰か其處を御覗き奉つて御笑ひ奉つるナ、御覗き奉つて困り奉つる  
 ヨ 次武「然らば失禮」と尻をまくと 留「何んだイ毛むくじやらな御尻様で御座り

奉つるな」と指にて使者の尻をつめつて 鯿如何で御座り奉つるな 次武「御親切に  
 御つめり下さるかは知らんが、一向に通じませんな 鯿何うだい、是では 次武「恰  
 で蠅がどまり居る様で御座る 鯿何んだッて繩がどまり居る様で奉つるか、よし今  
 度は一件だぞ」と懐中から釘拔を取り出し鯿「オイ此方を御向き奉つては困り奉つる  
 ヨ、ソラ何うで御座り奉つるな」と釘抜にて尻をつめると 次武「是は早や餘程堪へ  
 ますわい 鯿何んだ餘程堪へ奉つると来たナ、夫れ思ひ出し奉れ 次武「是は堪へ難  
 のふ御座り奉つる 鯿奉つると来たな、ヤレ、エンヤラヤア 次武「オイ痛々……  
 鯿「ウントコラア 次武「オイイタ、、 鯿「ヨイトコラア 次武「オイイタ、、  
 、 鯿「ヤレ閻魔のこい 次武「思ひ出して御座る、思ひ出して御座る」田中三太夫間  
 の唐紙を排て 三「してお使者の御口上はナ 次武「ハイ、屋敷を出る折聞ずに参りま  
 した。

## ニ ユ ウ

昔淺草の駒形に半田屋長兵衛と云ふ、茶器の目利をする人が御座いました、其頃諸侯方へ召されて長兵衛が此の位の價格があると云ふ時は、直に其品物と見ずに、長兵衛が申す丈けにお買上げになつたと云ふ位で、最も此の人は大人で御座いますから、大概な處から呼びに来てもとんと参りません、家には變な奉公人を置さまして、馬鹿な者を愛して楽しんで居ると云ふ極無慾な人で御座います 是「何に行きませんヨ何んだと 女房デモ御手紙が参りましたよ 是「何處から 女房「萬屋五兵衛さんから 是「ウン、又迎いか、何うも度々招待状をつけられて困る、先方は此頃茶を始めて金持故極々我儘で、いろく道具を飾りちらしてあるのを皆なが胡麻アするので大天狗ださうだ、俺ア然う云ふ處は厭だから斷はつて呉な 女「だつて貴郎度々の事ですから一度位行ていらつしやい、勿體を附る様に思はれますから 是「茶も

何も遣つた事のねエ奴が變にひねつた事を云つたり、不茶人が偽物を飾つて置くの  
 を見て是は偽で御座いますと云へんから、ア結構なお道具だと賞なければならな  
 い、夫れが厭だから俺の代りに彌吉の馬鹿奴郎をやつて、一度で懲々する様にして  
 やらう 女お廢遊ばせヨ、貴郎彼を利と思召して目をかけて居らつしやいますか  
 今朝も合羽屋の乳母さんが店でお坊さんを遊ばして居ると、傍で彌吉が自分の踵の  
 皮をむひて喰させたりして、御氣の毒な小供衆だもんですから何んにも知らずにム  
 シヤ〜と喰しましたが、眞實に汚い事を爲るではありませんか、夫れに此頃では生  
 意氣になつて大人に腹を立せますヨ 長イヤ馬鹿と鉄は遣ひ様だ、お前は嫌ひだが  
 俺は好だヨ、彌吉や何處へ行つた、彌吉—— 彌エ、異フ、返事が面白いナ、サ  
 ア此方へ来イ 彌エ、長何んだ大きな體格をして立つて居る奴があるか、座れヨ  
 彌用があるなら直に行て来るにやア立てる方が早エヤ 長馬鹿だナ、假にも主人  
 が呼だら何か御用でもありませんかと手を突て云ふもんだ、チヨツ(舌打)大きな體格

で、汚へ手の垢を掌でグル／＼揉で出せば何の位ゐの手柄になる、物をつもつて考  
 えて見ろ、夫に此頃は生意氣になつて、大分大人にからかうてエが宜ないぞ、源藏  
 見たやうな堅ひ人を怒らせるじやアねエぞ 彌何にアノ人はネ、疝氣が起つて叶な  
 いと云つて居るから、私が夫は薬を服だつて贅で御座います、仰向けに寝て脇差の  
 小柄を腹の上にのつけてお置きなさいと云つたんで 長ムー禁厭かい 彌疝氣(千  
 住)の小柄ッ腹(小塚原)と云つたら怒りやアがツた、跡から芳藏の娘が勞症でエか  
 ら、南瓜の胡麻汁を喰つて云ひました 長何だイ夫れは 彌オヤム／＼ろうしやう、  
 南瓜の胡麻汁ツて 長馬鹿な事を云ふナ、汝は江戸子じやアねエぞ、十一の時に三  
 州西尾の在から親父が手を曳て家へ連れて来て、何うぞ置いて呉れど頼まれた時、俺  
 が鼠半切へ狂歌を書いてやツたツけ、ム、ウ何んと云つたツけ、「西尾から東をさし  
 て来た(北)小僧、皆身(南)の爲に年季奉公」と東西南北で書てやると、お前の親父  
 が夫れを國へ持て行て表装を加へて掛物として、古色が附き時代が附きますに從つ

て悴も成人致しませう、夫ればツかりが樂みで御座います、と親は夫れ程に思つて居るのに、親の心子知らずと云ふはお前の事だ、大きな體格をして居ながら、道具は些とも覺へやアしねエ、親の恩を忘れちやア濟ませんぞ 舅アハ、ハ、親玉——  
 長「何んだ他人が意見として居るのに寝る奴があるか、困るなアモ一十八だぜ、貴様も 舅「然うく來年は十九だ 長「そんな事は云はなくツても宜い、就ては今萬屋から手紙が來たんだ、先方で俺の顔を知らないから、お前が俺の代りに行くのだ、舅「夫では私が此の身代を貰ほふ 女「御覽なさい、馬鹿の癖に慾張つて居ますヨ、長「黙つて居な、俺は馬鹿が好だ、其儘却つて綿服で行け、先方へ行くと寄附へ通すから、夫れども廣間へ通すかも知らんが、鍋嶋か唐物か何か敷てあるだらう、圍ひへ通る、草履が出て居やう、路次は打水か何かしてあらう、先方も茶人だから來客は他になければお前一人だから、廣間へ通すかも知れねエが、お前は御辭儀が下手で誠に困る、兩手をチグハグに揆ては叶ぬヨ、手の先と頭の先を揃へて胸を詰て

しとやかに辭儀をして、兼々お招きに預りました半田屋長兵衛と申す者で、至つて  
 未熟者、此の後とも御見知り置れて御懇意に願ひますと云ふと、先づ此方へと目利  
 をして貰ふつもりで、自慢の掛物は松華堂醋吸三聖を見せるだらう、宜ひ掛物だ、  
 箱書は小堀権十郎で、仕立が確か宜つたヨ、天地が唐物純子、中が白茶地の古金襴  
 で、罽へエー何を、長松華堂の三致醋吸の圖で、風袋は一文字紫印金だ、能く見て  
 覺へて置け、罽エー紫のいん金だへ、アレはかゆくつて叶いませんもんだ、長何んだ  
 そんなびらうな事を云つてはありませんヨ、結構な御軸で御座いますと云ふんだ、  
 出して見せるか、懸けて見せるか知らんが、けれども掛けてあつたら、先づ辭儀を  
 して一應拜見して、誠に何うも御仕立と申し、落着のある松華堂は又別で御座いま  
 す、ア、結構な御品で斯様な御道具を拜見致しますのは、私共の眼の修行になりま  
 す、と云つて卑下するんだ、罽髻するのなら角の髪結床へ行きやア直だ、長髻を剃  
 るのではない、我身を賤しめるのだ、然うすると先方では惚込だと思ふから、御引

取の價格をと来る、其時に買かぶりを爲ない様に其掛物へ疵をつけるのだ。男エ、  
 「夫れは雑作もねエ破くか。長破く奴があるか、知れねエやうに疵をつけるのが道  
 具屋の秘事だヨ。男フ、ハ、ヒヂ、道具屋よりも畳屋の方が強いぜ。長黙つて人の  
 云ふ事を聞け、醋吸の三聖は結構で御座います、なれども些と御祝儀の席には向ま  
 せんかと存じます、孔子に老子、釋迦は佛だから御祝儀の席へは懸けられませんが、  
 と買ってくれと云はれない様に疵を見出して、惜しい事には何うも些と軸にニユウが  
 ありますと云つて、ニユウ杯を見出さなくツちやア叶ねエ。男へエー、ニユウチ  
 のは坊さまかい。長何故。男づくにゆうで御座いますツて。長然うじやアねエ軸に  
 ニユウがありますと云ふのだ。男へエー。長ニユウを知らん奴もねエもんだ。男ア  
 「何んの事だ。長疵が出来たと云つては素人じみるから、疵をニユウと云ふが道具  
 屋のあたりまへだ。男へエー始めて聞た。長何うかすると御客様に腰の物を出され  
 るかも知れねエ、然うしたら、私は小道具の方とは違ひますから刀劔の類は、流達



ひで御座いますから心得ませんが、拜見だけ致しますと云ふのだ。馬へイ畏りまし  
 た」とヒヨコ／＼川懸けましたが、愚者ゆへ萬屋五左衛門の表口から入れば宜い  
 に、裏口から飛込で二重の建仁寺垣を入り、外庭を通りましてやう／＼庭傳ひに参  
 りますと、茅葺門があつて閉てあるのを無理に押たから、門が抜け扉が開くはづみ  
 に中へ顛倒込み、泥土だらけになつて青苔や下草を踏み荒して這つて顛倒で石燈籠  
 を押し倒し、松ヶ枝を折ると云ふ騒ぎで、先程から萬屋の主人は圍へ入り伽羅を  
 焚て香を聞て居りました、彌吉は方々覗ひたが誰も居りません、フト圍ひへ眼をつ  
 け、彌吉は此の中に人が居るだらう、怪しからん奴、指の先へ唾をつけ、ブツリ障  
 子へ穴を開け覗き込んで、馬イヤ何か喰て居やアがる。主人「コレ誰か来たヨ、誰  
 だ、其處へ穴を明けたのは、怪しからん人だネ、貼立の障子へポツ／＼穴を明けて  
 亂暴な眞似をする、誰だぞ覗いちやア可ん、誰だ。馬ハ、怒つてやアがる、エへ  
 、、御免なさい。主人「是は驚ろいた、誰か来ないか變な人が来たから、其處は入

る處ではない、ツカ／＼入つて来りやア可ません 罽門を破つて入つた 主人、オ、  
 、亂暴狼籍で、飛石杯は狗の糞だらけにして、青苔をさん／＼に踏み荒した、石  
 燈籠を倒し松ヶ枝を折ツちまい、亂暴だ何方からお出でなすツた 罽アハ、驚ろ  
 いてしまつたな、コ、兼々お招きに預りました半田屋長兵衛で 主人へエー是は驚  
 ろき入つた、左様とは心得ず、甚だ御無禮の段々何んとも是は恐縮千萬、何うぞ是  
 エ／＼、速に御通りを願ひます、何うぞ是エ／＼ 罽ハ、狹ツこの處へ入つて  
 ナ、俺ア汝に禁厭を教へてやらうか 主人へ、御冗談ばかり、へエ成程、エー兼  
 々天下有名の御方で、大人で居らつしやると云ふ事は存じて居りましたが、今日は  
 萬屋の家へ始めて行くのだから、故意と裏口からお入りになり、茅葺門を押破つて  
 さんさんに下草をお荒しになりました處の御膽力、何うも誠に恐入りました事で、  
 今日御入来は何とも何うも有難い事で、大ひに身の躰れに相成ります、何卒速  
 に是へ／＼ 罽俺アお前に痲病が起つても直に癒る禁厭を教へてやらう、繩を持って

來な、直に癒らア 主人「ハテナ、ヘエ」 彌「痲病に（尋帯）に繩にかゝれと云ふのだ

主人「エへ、御冗談ばかり、御からかいは恐れ入ります、エー始めまして（叮嚀

にお辭儀をして）小生は當家の主人五左衛門と申す至つて武骨者で、何うぞ一度拜

顔を得たく心得居りましたが、中々大人は知らん處へ御來臨のない事は存じて居り

ましたが、一度にても先生の御入來がないと朋友の者へ外聞悪く思ひます所から、

御無禮を顧みず再度書面を差上げましたが、御斷りのみにて今日も御入來はあるま

いと存じましたが、計らざる處の御尊來、朋友の者へ外聞がよく誠に有難き事で恐

れ入ります、何うも御服装の工合、御袴の穿様から更に御飾りなさん所と云ひ、既

御穿物が何うも不思議で、我々がさや縮緬、羽二重を着ますのは心耻しい事、既

は新五百題にもあります通り「木綿着る男子のやうに奥ゆかし」と實に恐れ入りま

す、何うぞ此方へく 彌「お前さんの處から頼みがあつたので見に来た 主人「夫れ

は誠に恐れ入ります 彌「手を揃へて御辭儀をするんだが何うだい、此の位で恰度

揃へて居るか居ねエか見てくれ 主人へ、御冗談ばかり 彌揚物が判るか、揚物  
 てエと素人は天麩羅だと思ふだらうが、長エのをだんく縮たのを揚物と云ふのだ  
 夫から早く掛物を出して見せなヨ、破きやアしねエからも見せなせエ、インキンだ  
 むしの、くツついでる箱は川原崎權十郎の書で、エー這つて轉倒だったので忘れてしま  
 った、醋吸の三聖格子に障子に簾 アハ、ハ、ハ、ハ、オイ何うした確りしねエ」主人の  
 五左衛門は驚ろきまして太鼓張の襖を開けて 主人「アッ」と口をあけたまゝ水屋の  
 方へ飛び出しました 彌「オイハ、ハ、彼方へ逃げて行きやアがつた、馬鹿な奴だなア  
 先刻ムクく食て居た粟饅頭、ウン此處に煙の出る饅頭が喰かけて残して行きやア  
 がつたな」と香爐を手に取りあげて、銀の匙で火のついた香を口へ入れ 彌「オーあ  
 つい〜 主人「亂暴な人だ、火を喰てらア、口の中に疵が出来ましたらふ 彌「イエ  
 ニユウが出来ました。

安

七

昔から學文のない者が、金持に成ると、人を蔑視て威張り散らして洵に困る者ですから、坊ちゃん方も學校は十分に御勉強なさいまして、人の中で耻をかゝないようになしたいもので、私なども今更後悔して居ります。松太郎「ライ、竹、向ふを見ろ、梅も見ろよ、彼奴は按摩の七兵衛、安七だ、あの野郎は此頃は大層金持になつたと云つて、いやに威張ちらして、俺達が挨拶をしても、上へあたまをもち上げていやがる、何ぞと云ふと俺達の事を下等社會と言やアがる、一番彼奴に耻をかゝしてやらう、來た、やい安七何處へ行くのだ。安七「何だ下等社會が何にをいつて居るのだ、貴様達と附合いをするような身分ではない。三「やい汝は無暗に店子をいじめるナ、此間も糊屋の婆さんが長く病つてゐるのに損料布團なんぞをはがしやアがつたり、又店立を喰せやがつたり。肆「高利を貸て人をいじめやアがるナイ。安「家は

雨露を凌ぐ恩があるぞ、其れを疎にすれば店立はあたり前だ、又金貸は世界の融通  
 だぞ、高利は承知の上借るのだ、此下等社會め、其處退け邪魔をするな 安「ヤイ安  
 七何の爲に矢立をさしているのだ 安「矢立は文字を認める爲に帯ているが、それが  
 どうかしたのか此の馬鹿野郎めが 安「汝は字が書けないではないか 安「馬鹿を云へ  
 俺位の財産家になつて文字の一字や二字書けんといふ事があるか其處退け 竹「書け  
 るなら一番書いて見ろ 安「ハア貴様達は俺に耻をかゝせるつもりだな、よし一番  
 賭をしやう、貴様達三人で今懷中に金を幾何持て居る 安「竹、汝幾何ある 竹「俺か  
 俺はすこし、そのなんぞ金を忘れて來た、梅汝幾何ある 梅「俺は二十二錢だ 松「小  
 さな聲でわからない幾何だ 梅「二十二錢だよ 松「立派な男が二十二錢とはなさけね  
 へな 梅「兄いは幾何ある 松「俺は八錢だ 梅「何だと 松「只の八錢、面目ねへ 安「不  
 憫な奴等だせめて三人で一圓こしらへて來い、俺が貴様達のいふ字をかいたら一圓  
 とるし、若し書けなければ二圓にしてやるぞ何といふ字を書くのだ 三人「七と云ふ

字を書け、是から一圓持つて汝の家へ往から、見る書けなければ二圓取つた上に汝  
 のやかん頭を打ち毀すぞ安それには及ばぬ 三人「遠慮するな……」と三人はかけた  
 しました、安七跡を見送つて是は弱つた事が出来たぞ、俺が洒落に矢立と時計を持  
 て来たのだが何方も判らねへ、心は矢立にはやれども字はかけねへとは、これから  
 始まつたのだよし〜店子の佐平、彼奴は毎も筆を持つて居る、彼奴に聞いて一番  
 一圓取つてやらう、ありがてへ……はい御免よ 女房「ラヤ大家さんで御座いますか  
 あなたの所へ店賃をもつてあがらなければならぬのでムいですが、つい夫が風を  
 ひきまして、二三日商買を休んで居りまして其故御無沙汰になりました、申譯がム  
 いません 安「是々妻君わしは店賃の催促ではない、佐平はいませんか、いるならば  
 を書く事を教へて貰ひ返つて来ました、身體此處に谷まつてナア 玄「字にも種々  
 むずかしいのがムいます 安「むずかしいか容易いか判らない、七と云ふ字を書くの  
 だ 玄「七と云ふ字は種々ムいますが、質物の質ですか又數の七でムいますか 土「何

だか知らねへが俺の名前の七と云ふ字だよ。女「其れは譯はありません數の七でムい  
 ます。七「御前さん知つてゐるなら何ぞ教へて下さい、マアあがりこむよ。女「何ぞあ  
 あがり下さいまし。七「何う書くのですか氣の毒だが早く教へてくれ、一圓の仕事だ  
 から。女「先一をしめて上から棒を一本こう云ふ風にしめて右の方へ曲るのでムいま  
 す。七「何やるのだつて。女「こうくゝやるので。七「御前は慣て居るからそんな手附を  
 するが俺には少しも判らないじれつてへなア。女「それでは火箸を一本恚ふ横にして  
 今一本を縦にこうとうしてをいて右へ曲るので。七「成程有難てい判りました、火箸  
 を一寸借して下さい、一本こう横にして上から一本こうとうして、ウ、こう曲るか  
 女「貴所そんなに力を入れてほんとに曲ては困ります。七「先づ是で安心をしました有  
 難とう、左様なら……まてく。妻君や字を一字教はつた位いで、店賃を疎にしては  
 困る、佐平どんが持つて來たら直に店賃を持つて來なさい、ずるい人だ馬鹿くし  
 い……婆さん今歸つて來ました、事によると今に馬鹿松につぼ竹にがら梅が來るか



も知れないが驚ろきなさんな、一圓の商法づくだから何に火箸さへあれば驚ろくに  
 は及ばねへやア、來やがつた露路で大きな聲をしてなんだ亂暴な奴だ、是々何せ足  
 で格子を明るのだ何だ障子なんぞをかついで來たのか、怪ナンデイペランメイ、障  
 子は道具屋から借て來たのだ、今提灯屋のぶら衛門の處で摺鉢に墨がすつてあるや  
 つを借りて來た、さア筆も大きなやつがあるぞ錢は一圓借りて來たのでもなんでも  
 ねへや、一番書け 七「だれが借りて來たといつた、懷中につばつて居るのは何だ、  
 松「是は薪よ 七「薪を何にするのだ 梅「書けなければ汝の頭を殴るのだ 七「其れに  
 は及ばぬ 梅「遠慮するな 七「誰が遠慮するやつがある物か、先づ急ては事を仕損ず  
 るかたちが見える、エヘン七と云ふ字も澤山あるが質物の質と云ふ字か又數の七と  
 いふ字か 竹「いやに落附ていやアがるな汝の七だ 七「其れは數の七であるぞ 三人「早  
 く書けサア書け 七「婆さん心配しなさんなよ大丈夫だ、先づ障子を此處へ持て來い  
 松「サア持て來た書け 七「墨や筆を持て來い 竹「いやにかたづけやがるな其れ持つ

て来た書け 七よし、先づ筆をこう持たぞ豪からう 三人「何に豪いものか皆な見ろ  
 書けねへやつは筆の持ようで知れるぞサアかけ 七先づ一本こうしくだらうハアハ  
 三人「吐息をしていやあがるな跡を書け 七先づ五十銭の仕事をしたぞ、是から縦  
 に一本棒をこうしいてそれから、ハテナ 三人「おや首を振ていやアがるぞ大いに頼  
 むぜ 七ハテナト是からだハテナ 三人「何にがハテナダイ早く書け 七今書くこう  
 して 三人「何を考へて居るのだ、をやく旨まく右へ曲そうだぜ 七ラットそう旨  
 くゆく物かたとふく左りへ曲て了いました。

壽  
限  
無

お芽出度お話を申上げます、子寶を申しまして世に子ほど大切なものは御座いま  
 せん、最も子供より金の方が宜いと云ふ方も大分見へますが、子供があると無いと

は年を老てから違ひます、御婦人は子供を産のが役で、俗に云ふ疊の目が見へないと云ふ位の苦しいもので、當今は産婆學校卒業の若いお婆さんが御座います、女が年を老れば婆と極つて居る、處が十八歳二ヶ月杯と云ふ老婆が御座います、夫でも表看板には産婆と書て御座います、本來は産若としたら宜さうなもので、昔は六十何歳七十歳位のお婆さんが世話をいたしました、當今は子を産む女が三十八歳で産婆が十八歳、大變なお婆さんがある、熊何うしたエ生れたか、女無事に産落しましたヨ、熊生れたのはお姫さまか若様か、女何を云つて居るんだネ、男の子だヨ、熊男とくれば若様だらう、其奴は有難エお婆さんいろく有難う御座いました、熊熊さん、一寸御覽可愛い子が生れました、熊何う、へエー不思議なもんだネ、馬鹿に赤いネ、熊赤いから赤坊と云ふちやアありませんか、夫に此の赤い子は大きくなるよ色が白くなると云ひます、熊妙なもんだねエ、赤いのが白くなるのが面白エ、矢張鹽酸か何かで赤を抜んだと見へますネ、熊浸抜と一緒にしては叶ない熊

さん始めての子で大層喜びまして 熊時に名は何時命るんだエ、何うも赤坊くんと  
 呼ぶのは可笑いな 女 恰當今日は七夜だから何とか名を命たら宜らう 熊然うよな  
 ア、何うだい俺の名が熊だから、此奴には寅と命たら宜らう 女 寅に熊……何んだ  
 か動物園へ行つたやうだネ、一寸熊さん宜い事があるよ 熊何だ 女 横町の隠居さ  
 んは物識だつて云ふからアノ人に命名て貰つたら宜いだらう、夫に御隠居さんは長  
 命だし、お金はあるし別に不自由も無いから、アノ人にあやかる様何とか名を命て  
 もらつたら宜らう 熊 成程、じゃア隠居さんに一ツ頼んで見やう 熊 熊さん伊勢  
 屋と云ふ質屋の隠居さんの處へ出て参りました 熊 隠居さんは御出なさんすかエ、  
 隠 コレは、誰かと思つたら熊さんかい、マ此方へお上り 熊 隠居さん少し願  
 ひがあつて来ましたが 熊 又袴と羽織ではないか、お前に貸ても宜いが、葬式が済  
 でしやうと返して呉れないから困る 熊 コレは驚ろいた、一昨年借た物を未だ覚え  
 て居ますかい 熊 誰が忘れる奴があるもんか 熊 年を老ると物を忘れて叶ねエと云

ぶが、イヤにお前さんは物覚えが宜いネ、貸たものならドン／＼忘れなくつては困  
 る 匿「冗談云つちやア叶ねエ 熊「處で今日は芽出度事で来たんで 匿「婚禮かナ 熊「イ  
 エ若様が生れたんで 匿「ア！然うか、お邸に御分姫があつたのか 熊「エ！ 匿「イヤ  
 サ、お邸で御男子御出生あらせられたのか 熊「何だか知らねエが男の子が生れたん  
 で 匿「夫で今日喜びに行くのかイ 熊「何サ、俺の處で生れたんで 匿「自分の處で生  
 れた者を若様と云ふ奴があるものか 熊「今日が七夜なんで 匿「夫は芽出度な、銀も  
 黄金も玉も何かせん、まされる寶子にしかめやも、子供は金にまさつた寶だ 熊「何  
 でげすエ今お前さんの云つたのは 匿「アレは萬葉集にある子供を賞た歌で、洵に芽  
 出度もの 熊「ヘエ！然うで御座いますか、處で隠居さんお前さんに名を命て貰ふと  
 思つて來ましたが、何とか長命を爲さうな芽出度エ名を命ておくんなさい 匿「よろ  
 しい、お頼みなら命てあげやう 熊「今日が七夜でお前さんが質屋の隠居だから、恰  
 當宜らうと思つて來ました 匿「何んな名が宜いな 熊「何でも丈夫に育つて長命をす

る名を命ておくんなさい 鷹 夫では鶴は千年と云ふから鶴吉とでも命たら何うだい  
 鷹 モー些と長く生る名を命ておくんなさい 鷹 夫では龜吉は何うだい、龜は萬年  
 と云ふから芽出度名だが 鷹 幾何龜が芽出度たつて萬年経ば死ぬんで御座いませう  
 鷹 左様サ、萬年経ば死ぬだらうな 鷹 其奴は面白くねエ、俺の子供は何年経ても  
 死なないと云ふ名を命ておくんなさい 鷹 そんな無理な事を云つては困る、夫では  
 是は話だが何うだらう壽限無と命たら 鷹 何でがすエ、其壽限無とは 鷹 壽と云ふ  
 文字は壽、限は限る、無は無し、詰り壽命限りなしと云ふ事だな 鷹 其奴は有難エ  
 モツと芽出度エ名はありませんかい 鷹 五光のすりきれず 鷹 何でげすエ夫は 鷹 五  
 光は 鷹 天とう様の光りだ、俗に五光がさすと云ふ、アノ五光ばかりは何な物に當  
 つても決してすりきれない、従つて丈夫で長命なもので 鷹 成程、其外に何か芽出  
 度エのはありませんか 鷹 貝砂利水魚のスイギヤウバツ 鷹 夫は何う云ふ譯で 鷹 貝  
 砂利と云ふから貝に砂利だ、是は何の位る海にあるか數が知れぬ、スイギヤウバツ

と云ふのは、水の行末と文字に書く、水は何萬何千里行くか判らない、詰り長く世  
 の中に居ると云ふ事だ 熊其奴は芽出度エ、幾ら根の宜い奴だつて、水の行末や砂  
 利の勘定は出来ません 熊何うだイ是が宜らう 熊何うでせうモ一少し芽出度エの  
 はありませんか 熊夫では何うだイ、風來末と云ふのは 熊何です夫は 熊風の行  
 末は判らないと云ふ事だ 熊成程モツと長エ奴はありませんか 熊クネル處にスム  
 處とは何うだ 熊何でげすエ夫は 熊海にある藻が水のまに〜〜〜して居る  
 數は何の位あるか判らない、又スム處とは正月の飾りにする、アノトコロで、代  
 々此の處に住みたい杯と云つてアレを飾にする、芽出度ものだ 熊成程、何か外に  
 ありませんかイ 熊夫ではヤーブラ柑子のブラ柑子はは何うだ 熊何う云ふ譯なん  
 で 熊藪柑子は葉は落ても實は落ぬもの、夫でブラ〜〜して居て中々落ない、芽出  
 度ものだ、夫でヤーブラ柑子のブラ柑子と云ふ 熊モ一些と芽出度エのはありませ  
 んか 熊夫では何うだ、バイボ〜〜バイボのシエーリンガン、シエーリンガン

のグーリンダイ、グーリンダイのボンボコビー、ボンボコナーの長久命の長助。此  
 の内で宜いのを取つたら宜いだらう。熊其バイボイボと云ふのは何で。熊是は  
 昔天竺の王様で長命をした人の名で、シユーリンガンのグーリンダイと云ふ處に御  
 出なすつた、ボンボコビーのボンボコナーと云ふは、是も天竺で長命をした御夫婦  
 の名で、長久命は長く久しき命、長助は長く助ける、是だナ並べたら氣に叶たのが  
 あるだらう。熊濟みませんが初ッから書ておくんさい。隱居さんに書てもらつた  
 此の名前、女房と相談しまして此の芽出度名を殘らず寄て一ツにしてしまいました  
 から、恐ろしい長いものが出来ました、セツ八ツになると學校に參ります、子供が  
 朝誘ひに来る。小供「壽限無く」五光のすりされず貝砂利水魚のスイギョーバツフー  
 ライバツクネル處にスム處ヤイプラ柑子のプラ柑子、バイボく、バイボのシユーリ  
 ンガン、シユーリンガンのグーリンダイ、グーリンダイのボンボコビー、ボンボコ  
 ナーの長久命の長助さん學校へ行ふ。女房「大層金ちやん早いネ、今家のネ壽限無く」



五光のすりきれず貝砂利水魚の水行末フリーライバックネル處にスム處、ヤープラ柑  
 子のプラ柑子、バイボく、バイボのシエーリンガン、シエーリンガンのグーリンダ  
 イ、グーリンダイのボンポコビー、ボンポコナーの長久命の長助は今寝て居るから  
 ネ、待て居ておくれ、オイ金ちやんが来たヨ、壽限無く、五光のすりきれず、貝砂  
 利水魚のスイギョーバツ、フリーライバツ、クルネル處にスム處、ヤープラ柑子のプラ  
 柑子、バイボく、バイボのシエーリンガン、シエーリンガンのグーリンダイ、グー  
 リンダイのボンポコビー、ボンポコナーの長久命の長助や、早く起ないか、金、オイ  
 く、伯母さん、學校が遅くなるから先へ行くよ、然うで御座いませう、此の名を三  
 ツ四ツ呼れば大概遅くなる、學校へ行つて喧嘩をしまして、子供を撲つ、其子が  
 云いつけに来るが大變な騒ぎ、小俵、伯母さんお前の處のネ、壽限無く、五光のすり  
 きれず、貝砂利水魚のスイギョーバツ、フリーライバツ、クルネル處にスム處、ヤー  
 プラ柑子のプラ柑子、バイボく、バイボのシエーリンガン、シエーリンガンのグー

リンダイ、グリーンダイのボンポコビー、ボンポコナーの長久命の長助さんが石で頭を撲てこんなに瘤をこしらへたヨ 女房「アラア家の壽限無く五光のすりされず、貝砂利水魚のスイギヨイバツ、フリーライバツ、クネル處にスム處、ヤイブラ柑子のブラ柑子、バイポー〜バイポのシエーリンガン、シエーリンガンのグリーンダイ、グリーンダイのボンポコビー、ボンポコナーの長久命の長助がお前を撲てコブをこしらへたのかエ、何うお見せ 小供「餘り名が長いので、コブがヒツコンでしやつた。

### 滑稽江戸砂子

藝人も澤山御座いますが、幫間ほど六ヶ敷ものは御座いませぬ、幫間あげての上の幫間、幫間どらを打して陣を退き、御客様が咳をすれば直ぐ吐月峯、腹が痛いど

云へば夫れ藥、又厭な顔をすれば直ぐ御醫者様、醫者が首をかしげれば直に棺桶屋  
 へ駆けつける位でなければならぬ位で御座います、先づ其昔の御遊びが船遊  
 さんで、殊に夏は涼み船で御座います、家根船で御膳御料理に、女の子に御酌で、  
 實におつでげすヨ。旦那「オイ一八や、今日は十分に呑なヨ。一八」へイ有難ふ御座い  
 ます、私は今日位の大恐悦な事は御座いませぬヨ、奥様と御二人、又美人の聞へあ  
 るお鍋さんと御同船申すなんて、實に有難い、誰が見ても旦那様御夫婦、私とお鍋  
 さんと慥ふ並んだ處は又夫婦、陸で格氣をやいて居りますから、是が眞實のおかや  
 きもちでげすヨ。鍋「厭だヨ、お前と夫婦だなんて穢はしいヨ。一八」イヨ御立腹でげ  
 すナ、私は是非貴女をお内儀に貰ひたいネ、第一喧嘩の時杯は貴女の其三十八貫目  
 もある體格で押出した節にやア、長家の女房撫切りでげすぜ。鍋「何程妾が肥満て居  
 ると云つて、梅ヶ谷じゃアあるまいし、餘まり人を馬鹿におしでないヨ、是でもお  
 内儀に爲る人がありますヨ、ビ、イ。一八」是は誠に失禮、泣ては困ります、泣と

白粉がはげて顔へ縞が出来ます、夫が眞實の顔しまげんでげすヨ、鍋アラ憎らしい  
 奥様何んとか被仰つて下さいヨ、旦那是れく宜い加減にしる、一八「是は私が悪い  
 御勘辨を願ひます、毎時は旦那様と私と二人でげすから、實は時々奥様の事を考へ  
 ますよ、奥様一八さん、何んど考えるエ、一八「旦那と私は面白可笑憊ふやつて遊ん  
 で居るが、御宅では定めし御一人でお淋しからうと思ふと、涙がこぼれます、旦那「馬  
 鹿奴郎、何んて變な面をするんだ、福圓遊の百面相じやアあるめへし、鍋「旨く云つ  
 て居ますヨ、あのそらくしい顔で、一八「イヨ鍋どんモ、仲直りを爲ましやう、  
 其變り今に船が着と毎時の御茶屋に御越になると、私が音曲は申すに及ばず、振り  
 ごとや藝づくしで貴下の御機嫌を取り結びましやう、旦那「廢ヨ、御前の藝は御免を  
 蒙むるヨ、オイ一八昔から良幫間になると無暗に踊つたり列たり爲ないと云ふでは  
 ないか、今日は騒ぐのは廢にして、静かに遊ぶとしやうじやアないか、内の女房も  
 今月が臨月だからな、極静かにして面白い話かなんかで、一日位お前だつてつな

げさうなものだ 一八「イヨ、待て居ました、お話しと来た節には先づ世の中で知ら  
 ないものはないネ、天から水が落ちてくれれば夫れ雨だ、家が動けば夫れ地震、ジャン  
 く」と云へば夫れ火事だと云ふ位なものです 且那「一八恠ふ爲やう、今此處は  
 兩國だから、兩國から吾妻橋の間の兩側の古蹟を聞いて貰ふではないか 一八「宜し  
 い、旦那若し例へこじつけでも美事に御答へが出来ましたらば、何か御褒美を下さ  
 いナ 且那「遣るとも、其變り若し支へたらば今日の祝儀は抜だッ 一八「宜しい、先  
 づ御酒を一口呑で一番講釋にかゝらうかい、サア御三人で切り込で居らつしやい  
 錦「若し伺ひますがネ、向ふに見へる兩國橋は何う云ふ譯で兩國橋と云ふのです、  
 一八「イヨお出なすつたな、アレは下總の國と武藏の國へ架つて居るから、兩國橋  
 と云ふとは何うでげす 奥「夫では彼橋は何時頃に出來た橋ですエ 一八「アレは萬治  
 三年に架るとしてあります 且那「夫では彼の回向院に何時出來たのだ 一八「アレは  
 明暦の酉年正月十八十九日に江戸中の大火事がありました時、焼死んだ者が十萬八

千人あつた、時に此死骸を片付けるに困つて、御上から芝の増上寺へ御命令が下つて死骸を取片付ける爲に芝増上寺の建立となり、開山は貴上人で、國豊山回向院と云ふのです。且那、駒止橋と云ふのがあつたが、アレは何う云ふ譯だ。一八、あれは兩國の東詰に藤堂和泉守殿の御屋敷へ行く小橋がありまして、駒止橋ではなく、入堀の橋とも云ふ、此處に片葉の荻がありまして、片葉堀と云ふ一ツの名所で御座います。

且那、夫では彼處に嬉し野森と云ふのがあるが何う云ふ理由だ。一八、アレは大川端の或るお屋敷の大木の椎木の事で、其昔山谷通ひの船が是を見て佳景色と大いに喜ぶ、嬉しがつたから嬉し野森と云ふ、モ、此位で宜しう御座いませう。且那、何うして、左様事では叶ないヨ、向ふに見へる首尾の松と此方に見へる椎木と夫婦だと云ふが、何方が男で何方が女だか夫が聞きたいナ。一八、夫は水の中で根が抱合て居りますから、夫婦と云ふのでげすヨ。奥、夫だからサ、何方が旦那様で何方が奥さんだヨ。一八、成程是は困りましたなア、其何んで松が男で椎木が女の方でげす奥、可

怪いネ、松は縁子と云ふではないか 一八「夫が子供衆の事を権の實何んとか申しま  
すから男で 且那「大層苦しい答辯だなア 一八「此位ゐの事は御許しを願ひたいネ、  
且那「夫では駒止石と云ふのがあつたが、アレは何う云ふ理由で駒止石だ 一八「ア  
レは抑も八幡太郎義家、奥州御下向の折馬がそれて、彼の石で止つたから駒止石で  
げす 鱒「百本杭は 一八「アレは百本杭があるから百本杭サ 鱒「お前さん勘定をしま  
したか 一八「其位ゐは負て置サ 鱒「富士見の渡しは 一八「富士が見へるから富士見  
の渡しサ 且那「今の龜清の所は 一八「昔萬八と云ふ茶屋がありました 且那「今の明  
治病院の所は 一八「生村樓の跡、大地の深川亭の所に川長と云ふ料理屋あり、兩國  
には大橋、向兩國には小大橋洲崎屋と云ふ鰻屋さんあり、豊田屋と云ふ有名な黒  
焼屋があり、細小路には大津屋と云ふ料理屋、坊主と云ふ軍鶏屋あり、アレは皆兩  
國の舊家でげすヨ、コ、ラで御酒を一杯呑して下さい、詰らなく御催促をして神經  
を痛めます 且那「彼處に御藏橋と云ふ橋があるが、彼處は確か御藏しがめと云ふ名

物があつたが何う云ふ理由で、彼處のしがめは良のた 一八「アレは其昔あの近所に  
 公儀の御米藏あり、又アノ向ふは藏前の札差があつたので、船から米の揚ちるしに  
 米を川の中へ落すので、其米の水をしがめが吸ので、しがめが肥濟て大きくなるの  
 でげす、業平橋の下で捕る蜆が業平蜆、旦那お話しは少し横道へ入りますが、彼處  
 に縛られ地藏があります、彼の寺に鈍刻の天神様が御座います、あれは業平民長  
 と云ふ刻物の名人が鈍で刻ましたので、只今でも御座いますから今度御覽なさい、  
 旦那「オイ此御厩橋はあれは何時出来たのだ 一八「アレは橋錢を取た元祖の橋でげ  
 す 旦那「夫では厩河岸と云ふのは 一八「アレ 昔徳川家の厩があつて時々水馬の積  
 古を爲たりするから、人呼んで御厩の河岸と云ふ 旦那「夫ではあの薬師様は何時頃出  
 來たの 一八「アレは多田の満仲朝臣の守佛で、御脇立には不動様に毘沙門様は恵心  
 の御作なり、門前には雷堂百里の墓ありて、雷堂百里は俳諧に名ある御方で、辭世  
 を石に彫つけてありますヨ、エー確か



死しんで置おて涼すずしき月つきを見みるぞかし

と云いふ句ぐがありあります、コ、ラで放は免めんを願ねがひたいネ 且ま那な然さうは叶いねエ、是こからが肝かん甚じんだぞ、彼あ處こに夫めう婦と石いしと云いふのが、あつたさうだが、アレは 一八「アノ夫めう婦と石いしと云いふは彼あの河か岸しに一軒けんの石いし屋やさんがありありますが、彼あの御ご先せん祖ぞの店みせ先さきへ、或ある老らう人じん夫めう婦とが來きて吾われ々くの婆すを石いしに刻きで呉くれと代だい金きんを拂はつて歸かへつたから、早ま速すく拵こしらへて店みせへ置おいたが其その後ご何なん年ねん經へいても取とりに來こない、スルと往わう來らいの人ひとが之これを見みて、能よく出で來きて居あると云いふ騒さわぎ、中なかには饗まい錢せんを上あげる者ものがあると思おもへば花はなをあげあげる、線せん香かうをあげあげる、是これは縁えん結けつびの神かみ様さまであるたと大たい層そうな評ひやう判はんでげげした、今いまでは其その石いし像ざうが本ほん所じよの荒あ井あ町まちの出しゅつ産さん寺じと云いふ寺てらに納なめて御ご座ざいますから、何いつ時ときでも見みに往いつしやいいまし 且ま那な「夫めうでは駒こま形かた堂だうと云いふのは 一八「アレは朱しゆ雀せき院いんの御ご宇う、天てん慶けいの五ご年ねん寅とら年ねん安あ房ぼう守しゅ平へいの公こう雅やの建けん立りつなり、本ほん尊ぞんは馬ば頭とう觀くわん音おんなり、馬うまを作つくりて諸しよ願がんを祈いのる、此この河か岸しに淺せん草そう寺じ住じゆう職しやく權けん僧そう正せい宣せん存ぞんの殺せつ生しやう禁きん斷だんの碑ひがあり、此こ處こをこままん堂だうの渡わたしと申まをします、此この傍そばに鎌かまヶ淵ふちと云いふ所ところが

御座いますヨ、昔濱藏と云ふ漁師が腰にさしてあつた鎌を川中へ落しました、何うしても取れない、遂に其鎌が主になつて今でも雨が降ると時々水の中から鎌首をもちやげる、是は嘘でげす。且那ソイツは面白いが、並木と云ふのは何う云ふ理由だ。一八「夫は彼の邊は一面の原でげた。且那「夫れでは山はないのか。一八「夫は大あり、先づ四谷大木戸の邊より櫻田、北は牛込、本郷、湯島は山にて今の浅草邊は武藏野の續きで平原なり、今の並木邊りは恰當松並木があつて、所々に民家があつて茅葺家根の百姓家で、草鞋などを賣て居た、自から草が浅いから浅草と云ふ、ア「馬鹿に骨が折ました、コ、ラで御免しを願ひます。且那「夫では今の観音様の上つたのは何處で上つたのだ。一八「ア「は其山の宿の通りに一の権現、俗に云ふあかん堂と云ふ、別當は現生院、人皇三十四代推古天皇の御時に、中納言臣の中友罪を得て武藏へ流され、中友の臣に友成、濱成、武成の三士、主と共に漁夫となる、其時今の隅田川の宮戸川にて、或時観音の像を船にて揚げる、かゝる尊き御婆を何れへ

か安置致したいと主従相談の上、御堂を拵へ度と氣を揉ましたが、草のぼろくとして木がない、其時傍を見るとあかざが茂つて居たから、右のあかざで御堂を拵らへた、夫故あかん堂ではない、あかざ堂と云ふので御座います、其時の句に

御尊體あかざのまゝでかゞみけり

と云ふ名吟が御座います 且那夫では今の觀音様の御堂は何時出来のたエ 一八一ア  
レは鎌倉頼朝時代に今の金龍山へ御遷しになりましたので、淺草寺建立に就て場所を御撰みになりましたのは、伊豫の宇和島の名僧にて明安上人是なりでげす、御堂建立は人皇九十六代普請奉行は梶原と宇津宮の御兩人、何うでげすナ例へ嘘でも何んでも是丈けの事をこじつける所は金鶏勳章で御座いませう 無若し一八さん、お前のこじつけを聞たので奥さんがお腹が痛いと思仰るから、モ一宜い加減にお腹なさいヨ、ソラモ一吾妻橋が見へて來ましたから 一八一イヤ一有難い、御約束の吾妻橋へ來ましたか、吾妻橋と諸共に二ツ並べし枕橋、君に逢ふ夜は誰白髻の森越て、

待乳の山と庵崎の其鐘ヶ淵、むつごとも嬉しの仲じやアないかいナア、鯉「オイー  
 八さん、大變だ、お前さんが夢中になつて喋舌て居る内、いよ／＼奥様があかさん  
 が生れさうだとサ、一八「夫は大變、日頃の御恩此時なり、産婆は何方で、何に麴町  
 の十三丁目、船頭さん電話／＼、何に家根には電話はない、此奴は弱つた、若し奥  
 様確然願ひますヨ、旦那何う致しませよう、旦那「騒ぐな、俺の別荘は向ふに見へる  
 船頭早くアノ棧橋へ着ろ」と是から別荘へ着ました、夫々御手當になる、其内に玉  
 のやうなる男の子、安々と出生、一同の大喜び、船頭始め皆々よつて赤子さんの顔  
 を見て、坊ちゃんも芽出度と云ふと、赤子さんが餘程御船が好と見へて、船頭の顔  
 を見て「コギヤア／＼と御泣になりました。

## 蛙 茶 番

一夜明けますと初春の御祝い、何方でも御大家にては種々御催しが御座います、  
 其内に旦那方の御芝居とくると餘程面白い事が御座います吉兵衛、へい今日は御目出  
 度ふ、御當家では相變らず御芝居、今日の御狂言は何んで御座いますナ 主人「イヤ  
 是はく御早くからよろこそ御出で、今日の藝題は井出の玉川と云ふ題でげすから  
 先づ天竺徳兵衛の譲りを演ます 主「夫は結構で御座いますナ、先づさし詰徳兵衛は  
 何誰が御やりになります 主「徳兵衛は手前が音羽屋張で相勤めますから宜しく御覽  
 を願ひます 主「十分に拜見致します、アノ赤松満祐と云ふ役は誰が致しますナ 主「ア  
 レは森本さんの旦那が高島屋と吉右衛門、兩人を加味して御やりになります 主「猶  
 更結構で御座いますナ 主「夫に漁師四人、アレはデコ山さん、トンネルさん、荒井  
 さん、佐藤さんが大こりで御覽に入れます 主「成程、彼處へ大きな蛙が出ますが、

アレは何誰が御勤めになりますナ 吉實は其蛙の事に就て誠に當惑致して居る處で  
 全體此の役々は皆さんが忘年会の時に籤抽で極まりましたので、所が蛙は春田の若旦那  
 が當りました處が、御存知の通り色氣たツぶりのみへほうと来て居ますから、何分  
 役が納らず今日になつて旅行したと云ふ御断りで、御覽の通り見物も最早餘興場へ  
 充滿に詰かけて居りますし、實に困りきりますが、甚だ恐れ入りますが、貴下は體  
 格もよし、如何で御座いませう、一ツ蛙を願ひ度ものですが 吉エ、何う致しまし  
 て蛙丈はは平に御免を願ひます、日頃御當家の御厄介にはなつては居りますが、蛙  
 の儀は平に御用捨に預りたい、實の所今日は私家内も拜見に參つて居りますし、  
 近所の姉エさん方も大分見へますやうで、外の婦人は兎も角も手前の家内と申しま  
 す者は、要すには餘程入費もかゝり居りますし、若し手前の蛙を見まして離縁で  
 も請求されますと困りますから、是ばかりは御言葉に背きます 吉兵衛さん泣な  
 くツても宜しい、女房ののろけを云ひながら泣奴があるものか 吉エ御立腹で恐

れ入ります、如何で御座います、此方の小僧さんの長松どん、アノ小僧さんは中々芝居心が御座いますから、長松どんに御やらせになりましたは、主へエー私共のアノ長松が、少しも存じませんが、是は驚ろきましたナ、主夫が豪將の許に弱兵なしでげす、主夫では一ツ呼で聞て見ましよう、長松く、主へーイ、何んぞ御用で、主マア其處へ座れ、何うだ長松、今日一ツ芝居へ出て貰ひたいものだ、主へーイ、困りましたナ、何んな役を勧めますので、何んなら廿四孝の勝頼か、太十の十次郎夫でなければお染久松の久松でもやりますか、主そんな役ではない、天竺徳兵衛の蛙をやつてくれ、主冗談云つては叶せせんヨ、蛙などは御断りだ、主貴様は主人の云ひつけを背くか、主私はねエ、御當家は質兩替屋でしやう、其商法の道を覺えに參つて居りますので、芝居は云はゞ慰みだ、御免蒙ります、主成程夫では只は頼まない、是は少しだが貴様の小遣にやるから取て置け、主是は一圓だ、是も商法づくだやりましやう、主よし、主蛙はやりますが、花道へ行て蛙を引抜いて百日置

で四天、高い草鞋で一ツ誰かをつかつて、とんぼを打して六法の引込を願ひたい、  
 主「そんな我儘を云はずにやつてくれ 馬へい、仕方がねエやります 主「然うか、  
 夫では今番頭の源兵衛を呼で本讀を聞いて直にやつて呉れ、源兵衛一寸此處へ来て呉  
 れ 馬へい、馬鹿に繁劇い、客はワイト云ふ、實に困る 主「是れ源兵衛どん、蛙  
 が出来ましたから、お前一ツ筋を通してやつてくんナ、ア長松がやるとよ 馬へ  
 い「畏りました、長松どん上手にやつてお呉れ、去年は遣り損なつたから、今私が筋  
 を通すから能お聞きヨ、浪の音で幕が明く、其處へ漁師四人出る、柿色の筒袖に腰  
 笈を置いて、各々櫂を持って本舞臺へかゝり、コ、に科白があるヨ 漁師「何んとうづ丸  
 よ、昨日の海は近年にない大暴であつたナ ○「然うだ、俺の親分徳兵衛殿の  
 船 今に於て行方知れず、何んと案じられた事ではないか □「然うとも、何ん  
 と此近邊の島々を探ねて見やうではないか ○「夫が宜らう、皆も一緒にござんせ  
 う、と濱唄と云ふ鳴物で引込でしまう、夫から出入の長唄の師匠が大薩摩をやる



と、木の頭と共に今まで後ろに釣てあつた浪の幕が落ると、島の處だネ、先づ大きな岩が幾らもあり、夫から海の遠見だよ、こゝに内の旦那が寄ば宜いのに天竺徳兵衛の役だ、先づ絞りの筒袖に腰襷、御約束のこしらへた、櫛を突て居眠りをして居る處だ、スルと大どろで岩が割ると、白髪の異人、木の葉の着物髯がぼうくと生て居る、是が森本の旦那の役で、赤松満祐と云ふ天竺徳兵衛の親父さんだ、鳴物がうすどろ満祐の科白「起さよ徳兵衛、大日丸イヤサ起よ、徳兵衛大日丸」と云ふ、今迄眠つて居た徳兵衛が気が付いて、木魂と云ふ鳴物で、不思議さうに四邊を見廻し、徳兵衛科白「ハテ心得ぬ、此處は名にあふ山城の井出の玉川冬がれて、實に嚴寒のこゝわさや、夜半にものども言とへど、猿の叫ぶ聲ならで、正に我名を呼びつるは、狐狸の所業か、何奴なるぞ 赤松満祐科白「汝が父の赤松満祐 徳兵衛科白「ヤ、何んと、是からしぜん節と云ふ鳴物になり 満祐科白「足利一家に滅され、其無念已みがた、此の玉川へげんじやくなし、年頃行ふ墓の妖術 今ぞ傳へん大日丸 徳兵衛科白「コハ有難

さ父の御言葉、妖術受つぐ上からは、足利一家を滅さんこと瞬間内満祐科白「コハ勇  
 し、汝が言葉、イデ妖術を傳へ得させん、之を見よ」とコ、デ赤松満祐が徳兵衛に  
 妖術を譲る處を能お聞きヨ、赤松満祐が螺の壺焼見たいな手附をするかと思ふと、  
 又かにかから天王見たやうな手附をして、科白にかゝる、南無さつまるま、ふんだる  
 さやア、四五正天、はらいそくと云ふと、鳴物がどろんくと云ふ大どろ、徳兵  
 衛が大氣取に氣取て、旦那が無けなしの目をむきながら、ハテ心得ぬときツかけで  
 是から水氣三重と云ふ鳴物で科白だ、諸虫土に堆む頃數多の蛙の啼つるは、奇代な  
 術を見るものじやアなア、然うすると又大どろで、お前が墓で此處へ出さへすれば  
 宜いのだ、長何んだイ、俺の役は詰らねエなア、番そんなに愚痴をこぼすなよ、其  
 代り皆さんが芝居見物に行く時は、必ず貴様をお伴に行くやうに願つてやるよ其ソ  
 イツは有難エ、源へイ、旦那様蛙は出来ました、御安心を願ひます、主然うかく  
 是は皆さんお揃いで、今日は御挨拶も何にも要ませぬから、づんぐ、餘興場へお通

りを願ひます、先刻から手が鳴て居るから、そろ／＼幕を明けやう、役者は皆揃つたか、何に二階で稽古をして居る、今時分稽古をされては困るナ、何んてい音をさせるのですエ、何に客がグズ／＼云つて居る、寅吉や皆さんへ然う云つてやんナ、然う騒いでは困る、お静に願ひます、と云つてやれ 寅夫が叶ません、見物の云ふのには、今朝の九時からといふ招待だから十時に來ましたが、モ一是れ五時になる實にやりきれぬと云つて、なか／＼五人や六人で制しても肯ません、夫に子供が舞臺へゾロ／＼上り込てやりきれません 圭イヤ其奴は困る、未だ例時の舞臺番の半公は何うしましたエ、コレ長松一寸半公の所へ行つて呼んで來な 長畏りました、女房「あアコレ／＼長松お待ヨ 長何んで御座います 女房「あまへ半さんの所へ行ても來やアしないヨ、先日半さんが來て毎年舞臺番許りでは氣が利ませんから、此度は是非役者に遣つて呉れと旦那へ願つたら、旦那が云ふには俺の内ではお化芝居ではないから貴様の様な、そんな瘦た男はだめだからかつたら、大層怒つて歸つ

て行つたからネ、長松や恚うおしよ、彼奴に油をかけてやるのだヨ 長へい油と云ふと石油ですか、魚どうですか 女房然うじやアないヨ、恚う云ふのだよ、お前が行くと定めし怒るだらうからネ、近所の娘さんや、御内儀達が云ふには、素人の芝居も宜ひが白粉をつけると、恰で午房の白あい見たやうだし、十能見たやうな手を出したり、十三文甲高の足をして、變てこの腰つきをして居るのは實に可笑い、夫よりは半さんの舞臺番ときた節には音羽屋丸出した、アノ綺麗な入墨を出して半分の疊の上に座つた處は、實にほれくすると云つたツて半さんが舞臺番に来るなら見に行くが、來なければ皆なが行かないと云つて御覽、當人が馬鹿だから直に来るからネ 長へい、宜しゆう御座います、行つて参ります、蛙と使の早替りはこたへる、やア相變らず穢い長家だなア、ヤア半公内に居るナ、今日は半さん居ますか、半「誰かと思つたら伊勢屋の長松さん、何か用か 長「オイ然う沈着て居ては困るぜ例時の通り内の芝居だ、子供が舞臺へ上つて困るから直に來て呉れとよ 半「何を云

つて云やアがるのだい、舞臺番なんぞは眞平だ、此間店へ行つて、今年は役に使  
 て呉れと云つたら、旦那が俺の内は化芝居ではないから、お前は使へぬと云や  
 アがつたらう、ペランメイ、手前の所の旦那は何んだい、アノ面はアノ禿頭め、舞  
 臺番に行くものかい、馬鹿にするなと歸つたら然う云つて呉れ、長大層怒つたな、  
 よし今油をかけるぞ、半「何に、長夫は來なければ來ないでも宜いが、今近所の娘さ  
 ん達がちまへの事を然う云つたぜ、半「何に女達が俺の事を何んと云つたか夫を云、  
 長「ヤア氣取りだしやアがつたナ、アノネ、よさう、半「何んと云つたか聞せろやイ  
 長「いよ、油が眞物、女中連が寄て云ふには素人が芝居をすると、白粉をつ  
 けると恰で午房の白あい見たやうだし、大きな手を荷厄介にしたり、十三文甲高の  
 足でへッぴり腰をするのは見るのも厭だとサ、夫に引替へ半さんの舞臺番と來たら  
 昔の芝居の様で、第一半さんは脊がすツさりと高くツて、色の白い所に綺麗な入墨  
 があつて、アノ粹な姿で半疊の上に尻を捲つて座つた所は何んとも云へない、美

男だによ、若し半さんが来るなら見物に行くが、半さんが来なければ行かないと昔  
 なが然う云つたぜ、夫では半さんは今日は来ないと家へ行つて断りをぶふヨ、左様  
 なら半「アめ長松さん、一寸待ねエヨ、芝居とくると女が来ねエとどうせい景氣が  
 悪いから、よし来た、女の子が可哀想だ、俺が行つてやらう 長「夫では直ぐ来るか  
 イ半「待なヨ、恁うと、今日は一番役者を俺が舞臺番で喰てやらう、去年お祭りの  
 時に着た白縮緬の笠洲先生が腕を振つて描て呉れた、黒繪の龍の着物、あいつを着  
 込で、積鼻禪は緋縮緬の大巾をメめ込、豊田屋の旦那に貰つた博多の帯で、半疊の  
 上に座り込だ節には女の子は堪らねエやア、役者を見ないで俺許り見るに極つて居  
 らア、有難エ〜 長「オイ〜そんなに威張ても、着物や積鼻禪は内にはあるめエ  
 定めし六一銀行へ往つて居るだらう 半「何んだ六一銀行と云ふのは 長「判らないな  
 ア、質屋の事ヨ 半「能知つて居るナ、其通りだ 長「何か入れ替物はあるか 半「然う  
 さなア、鍋でも釜でも持て行くから構はねエや 長「成程積鼻禪の入替に釜を持て行

くとはまん更縁の無い事はないやア、夫では早く来てお呉れヨ 半「ヨシ、サア  
 是から大變だゾ、先づ恚う荷拵へをして、大風呂敷をしッ脊負て、こう、く、  
 ハイ御免ねエ 番頭「是は入らつしやい、半さん何んでげす大風呂敷を持て 半「番頭  
 さん、黙つて鍋釜は申すに及ばず、身代ありツ丈け持て来たから白縮緬の小袖に緋  
 縮緬の積鼻禪に大切な帯を出してお呉んなさい 番「貴下の事ですから宜しう御座い  
 ます、コレ小僧や出して上げな 小僧「へいお待遠さま 半「ヲツとよし、先着て  
 見ますから店を貸ておくんなせエ、何うです番頭さん、俺の此の服装は 番「實にお  
 美事なことで 半「只お美事じゃア困るなア、此墨繪の龍の勢いの宜い事は、笠洲先  
 生の腕を振つた所だ、何うです此の帯 番「實に恐れ入りました 半「恐入つたじゃア  
 困るなア、未だ恐入らせる物がある、恚う尻を捲つた所は何うだい 番「イヨ、美  
 しい事で、半「美しい事では叶ねへ、先づ此の積鼻禪は唐縮緬やかんこ縮緬や、新縮  
 緬とは譯が違ふのだ、こいつは眞縮緬で、三越で買たんだぜ、性が宜いから先をく

わへてポンと放すと、チリ／＼と縮まつてしまふのだ、目方が三貫六百目あつて、  
 此町内でも此の位ゝな積鼻禪を持たものは無しヨ、五町以内には先づ無いネ、評判  
 しておくんないました、是から誰が何んと云つても湯に行くから悪く思はないで  
 おくんない、お前さんも伊勢屋へ芝居を見にお出なさい、今日は俺が役者を片ッ  
 端から喰ふつもりで、番して見ると恰で貴下は臺灣の人見た様ですネ、半、左様なら  
 コラ／＼と、今日は湯屋、是は入らつしやい、半さん今朝程湯へ入らつしやつた  
 様でしたが、是で二度目ですナ、半、大將マア俺の服装を見ておくんない、何うで  
 すナ、湯屋、誠に御立派の事で、墨繪の龍で御座いますネ、半、只墨繪の龍ばかりは心  
 細い、白縮緬へ先生が腕を振つたのだぜ、未だ驚ろかせる物があるぜ、是を見てお  
 くんない、湯屋、成程美事な御積鼻禪で、恰で御息さんが抱瘡でもしたやうで、  
 赤は又別段で御座いますナ、半、只赤いと云つたつて叶ねエ、能見てもくんない、  
 唐縮緬やかん縮緬や新縮緬とは譯が違ふぜ、而も真縮緬で三越で買つたんだぜ、



性が良いから先を喰へて放すとチリ／＼と縮まるぜ、目方は三貫六百目はあるぜ、  
 先づ五町四方には此の位の品物を持つて居る人はねエぜ、何うか評判をして置く  
 んなせエ 湯屋エー評判いたしますとも 半「有難エ、大將氣の毒だが練袋を貸して  
 おくんなせエ、そんな小さいのでは叶ねエや、五布蒲團の綿を引こ抜ておくんなせ  
 エ、練を入れてころがつて居るから、夫からあわ棒にへる棒にこいとろ棒、鶯の糞  
 に石鹼に洗粉を頼みますぜ、夫れから油紙を一枚貸して置くんなせエ 湯屋油紙を  
 何んになさるので 半「噴鼻禪を入れて頭へ載せて湯へ入るのだ 湯屋大丈夫で御座  
 います、私が確かり御預かり致します」是から半さんは湯へ入り、無暗に洗い終に  
 は都々逸を唄ふと云ふ始末、御話しは替りまして伊勢屋の方では幕があかないので  
 客はワイ／＼云ふ騒ぎ 主人「コレ、長松や未だ舞臺番は来ませんか、困るなア、氣  
 の毒だがモ一、一遍半公の處へ行つて半さんに來なければ幕をあけてしまひますと斷  
 はつて來てくれ 長「畏まりました、モ一、蛙の支度をしてしまつたものを、へイ只今

行つて参りますよ」と小僧が半公の家へ行つて見ると留守、質屋へ行つて聞けば先  
 刻湯へ行つたとの事、小僧大めんくらゐで湯屋へ遣つて参りました。長「今日は半さ  
 んは来て居りますか。湯屋へイ居らつしやいます、只今湯に入つて大變な騒ぎ、都  
 々逸を唄ふやら恰で氣狂いの始末で、長「オイ、半さん大變だヨ、お前の來るのが  
 遅いからモ一幕を明けてしまふと旦那が怒つて居るぜ、女の子は氣を揉むし大騒ぎ  
 だ、來ないと幕を明けてしまふから其つもりで左様なら、半「何んだ長松、モ一幕を  
 明けると遊戯では叶ねエ、是丈け支度をしてろうずになつて堪るものか、今直に行  
 くから少し待てくれと云つてくんナ、オヤモ一行つてしまやアがつたナ、こいつは  
 大變」と半さん大あわてで着物を着て、取る物も取りあへず駆出した。湯屋「モシ、  
 半さん、先刻預かつた積鼻禪を忘れましたヨ、オ、イ——半さん——」と呼びまし  
 た、半公は先刻餘まり大切にして積鼻禪を亭主に預けたのをすっかり忘れてしまし  
 たものだ。友達「オイ半さん大層威勢の宜い服装で何處へ行くのだ、馬鹿に男があが

るものだ、驚ろいた 半「ヤア入さん、寝ては困るヨ、今日は伊勢屋の芝居で舞臺番  
 ヨ、おめへに褒られると面目ねエが、先づ此着物は眞縮緬で、白に墨繪の龍とさきて  
 居るのだ、是は常陸山の親類の豊田屋の悴分楓湖さんの高弟で笠洲先生の筆だ、何  
 うだ驚ろいたらう 八「實に驚ろいたヨ 半「未だ驚ろかせるものがある」と尻をぐる  
 りと捲つたが、當人噴鼻禪を忘れたのは氣がつかない 八「ヤア是は驚ろいた 半「何  
 んだイ飛び上りやアがつて、是は唐縮緬やかんて縮緬や新縮緬とは譯が違ふぞ、眞  
 縮緬だ、性が良いから先端を喰へて引張ると、ヂリ〜と縮まらア、目方は三貫六  
 百目あらア、先づ五町居廻りには此位ゐな品物を持た者はないぜ、何うか評判して  
 くれ 八「評判どころではねエ新聞に出してやるヨ 半「オイ向ふから女連が来た一ツ  
 見せてやらう、オイさゝちやん、みるちやん此の服装を見ておくんなさい、何うだ  
 イ此の尻を捲つた處は、オヤ皆な逃げ出したナ」と急々と伊勢屋へ遣つて参りまし  
 た 半「へい今日はお目出度ふ 圭「お目出とふ處ではない、早く舞臺へ行つてお呉れ

子供が騒いで困る、サア半公が来ましたから、幕を明けて下さい」と是からいよく幕があくと見物は大喜び、其内口上がある、只今の様でなく一切舊式でやる、口上東西、此の處御覽に入れまする狂言名題、浪枕異國話し、相勘めまする役人替名、赤松満祐一役市川左團次、漁師浪六一役市川團袋、同浪七中村でこ助、同浪八一役片岡下童、同うづ丸一役市川わらんじ、天笠徳兵衛一役尾上菊五郎、右の役人残らず罷り出ます、先は其爲め口上左様」と是より浪音にて幕が明くと、お素人とは云いながら皆々上手もので大受けて、四人の漁師が引込むと御約束の大薩摩、夫れ赤松満祐を天笠徳兵衛に妖術譲りと云ふ處で、一寸舞臺に役者が居なくなると、半公ニ、ゾと舞臺の隅で、例の半疊の上へ乗つて尻を捲り、ア子供舞臺へ乗ては叶ねエ、と態と大きな聲を出して乗り出した、スルと見物の人々、〇「何うだい半さんの舞臺番と来た節にやア實に宜いネ、第一服装が宜いアノ墨繪の龍のこしらへ」と褒めて居りましたが、半さんは自慢の積鼻禪を見せやうと云ふ了見で、わざと股をひ

ろげ氣どつて居ると、見物の人々が股間へ目をつけ、〇「是は驚ろいた、まア半さんの股間を御覧なさい」と一同大笑い、餘興場も崩れる許り、其内に赤松満祐に徳兵衛の渡り科白があつて、とどの詰り南無さつまるま、ふんだるさやア、四五正天、はらゐそくと妖術を譲ると、徳兵衛は科白諸虫土に堆む頃、數多の蛙の啼つるは、奇代の術を見るものじやなア」と云ふさツかけ、今蛙が出るだらうと何時まで待つても蛙が出ない、スルと樂屋では大いに氣を揉み、△ソラ長松、蛙が出るのだ長「蛙はとでも出られません、△何故出られないヨ、長「半さんの股間から青大將が出て居ります。

しやれ小町

しやれ小町と云ふ御話しを一席申上げます、御婦人方の慎しむべきものは格氣城

妬で御座います、又餘り焼もちがな過ぎては何んだか薄情の様に見へますから  
 焼もちに遠火に焼く人の胸も焦さず味もよし、又都々逸と云ふ書物に毎度上  
 つて御世話になると遠火でそろ／＼焼く女房、と云つて御座います 女房鳥渡御免  
 なさいナ 隠居誰だヨ 女「ハイ、妾で御座いますヨ 隠誰かと思つたら御長家のお  
 町さんだナ 女「ハイお町さんで御座いますヨ、御前を待ち／＼蚊帳の外かネ 隠何  
 んだ泣ながら洒落て居やアがるな、まア内へ入んなさい 女「御免なさいヨ 隠何う  
 した又喧嘩だナ 女「極つて居りますヨ、旦那の前ですが、妾はネ口惜くつて／＼無  
 念骨髄に達しました 隠何うしたのだ 女「旦那アノ内の奴郎は此節何處へ入つて居  
 りますか、穴ツぱのり許りして居りまして、少しも家へは歸つて参りません、今度  
 歸つて参りましたらウンとしをさをする積りで 隠夫はち前が悪い、假りにも亭主  
 をつかまへてしをさをするとは何んだ、貴様が悪い 女「オヤ厭に家の亭主の肩を持  
 ネ、こん畜生 隠イヤまア私の云ふ事を聞きなさい、其昔は在原の業平朝臣と云ふ

人があつて、此方は大した美男子であつたのだ。女「美男子と申しますと、  
 此美男子と云ふのは美しい男の事だ。女「英語ですか。男「英語ではない、此奥様を井筒姫と云つ  
 て、是は又貞女な方だ。女「貞女と申すと、男「貞女と云ふのは操正しい女の事だよ。  
 女「何んだつて詰らない。男「倍は操正しいと云ふ事が御判りにならないナ。女「勿論、  
 男「貞女と云ふのは心懸けの宜い御女中の事だ。女「夫れでは先づ妾見たやうな女の  
 事だ。男「冗談云つては叶ねエ、又御近所に吉田と云ふ處があつて、高橋左衛門の娘  
 に生駒姫と云ふ婦人があつて、此の生駒姫と有原と人知れず良い中であつたのだ、  
 女「良い中と申しますと、男「じれつていな、先づ情婦であつたのだ。女「アラ口惜い  
 ぢやアありませんか。男「お前が怒つても爲かたがない、昔の事だからなア、或る日  
 の事で、大暴風雨があつたのだが、其雨風も驚ろかずに在原が支度して、出懸けや  
 うとすると奥様は厭な顔も爲ないで、簑笠を持って来て、君には今宵も御出遊ばしま  
 すか、御機嫌よろしゆふと云つて兩手を揆へた、流石の在原も考えるネ、俺が情婦

の處へ行くに、厭な顔を爲さないで雨具を出すと云ふのは、是は變だと外へ出る振り  
 をして、庭へ廻つて垣根の後ろで様子を聞いて居ると、奥様には縁先へお出になつて  
 歌を詠れた 女へ「豚が飼つてあるノ、異何故 女だつて豚を呼だつて 異豚ではな  
 い、歌だヨ風吹ば沖津白浪立田山夜には君は獨りこゆらん、と此歌を聞て在原が  
 感心しましたよ、オ、我女房は貞女なものだ、俺がこんな不行跡な事をして居るの  
 に、焼もちもやかず歌を口づさむとは實に豪イ、モ、決して情婦の所へは行かぬと  
 生駒姫の所へは行かなくなつて、御夫婦仲よく暮したと云ふ、御前だつて亭主を抽  
 まへて奴郎呼はりする許りが、能ではない少しは歌の一ツも詠うと云ふ柔しい丁見  
 にならなくつては叶ねエよ、第一夫婦の仲にも禮儀と云ふ物がある、お前禮儀を知  
 らないな 女「禮儀と申しますと、おゐしい物ですか 異喰物ではないヨ、此間お前  
 の内の様子を見て居たが、恰當雪の降り續いた時だ、アノ寒いのお前の御亭主の  
 八五郎さんが歸つて來た、天秤を擔いで嚙ぞ冷たからうと俺は思つたヨ、ア、云ふ



時はお前が門口まで出て、能くお歸りになりましたと莞爾と亭主の顔を見て笑ふの  
 だ 女「アラ厭ヨ、アノ面を見て笑エと云つても笑ひにくい面ですヨ 旦那笑ひにくい  
 面とは何んだ、能くお歸りになりました、嗚ぞ御寒かつたで御座いませう、早く炬  
 燵へ御入りなさいとか、又あんかへ御あたりなさいとか、しやもが買てありますか  
 ら一杯おあがんなさいとか、偶には云つて遣んなさい 女「夏歸つて来たら如何取計  
 ひませうや 旦那大層大業になつて来たな、然うサな夏歸つて来たら嗚ぞお熱う御座  
 いましたらうから、行水を沸して置きましたから早くおつかいなさいとか、只今氷  
 を取つて参りますとか云つて遣んなさい、夫れからお前の内の八五郎さんは、餘り  
 笑つた事がないな 女「エー、アン畜生は不人相で笑つた事がありませんヨ 旦那ア  
 云ふ人には洒落を云ふと笑ふものだが、お前は洒落は出来るか 女「出来るかとは何  
 んです、かだの、とてだのは人を疑る言葉であるぞ、洒落なら妾は博士と云つても  
 宜い位の、先づ自慢ですヨ 旦那自慢する奴に餘り旨い人はないが、よし夫では俺が

今題を出すか、一番洒落るか、女しやれますとも、サア題でも椅子でも何んでも出して下さい。騷よし、一番困らしてやるぞ、幸ひ其處に神棚があるがアノ御造酒徳利でしやれて見な。女御造酒徳利なんぞは雑作はない、御酒の徳利正に受取申候とは何うで御座います。騷成程、右の通りを御造酒の徳利は面白いナ、夫では其處に衝立があるだらう、此の衝立でしやれて見な。女衝立なんぞは雑作なしですヨ、エ、とついたて十五日廿八日とは何うです。騷是は驚ろいた、夫では此火鉢にしよたんが掛つてあるが、此じよたんでしやれて見な。女じよこんに唐獅子、竹に虎、騷是はあざやかだ、此の疊で。女疊庖丁剃刀研。騷彼處に足駄がある。女足駄通れば二階から招ぐ、しかも鹿の子の振り袖で。騷オイ、そんな聲で唄つては叶ねエ、しかし感心だ、其工合で入さんが歸つて來たら遣つて見な。女有難ふ、夫れでは何んですネ、家の亭主が歸つて來たら、先づ門口で莞爾笑つて世辭を云つて、夫れからしやれて、夫れから歌は何んと申しましたつけ。騷風吹ば沖津白浪立田山夜には

君は獨りこゆらんと云ふのだ。女「有難ふ、左様なら、暑氣を付けて行きなヨ。女「ア  
 ーラ宜つてヨ。暑氣よくつてよと云ふがらでもない。女「先づ有難いな、慥ふやつて家  
 へ歸つて来て、是から家の人が歸つて來ると云ふ寸法だ、モ一歸つて來る時分だが  
 オヤ／＼噂をすれば影とやら歸つて來やアがつたヨ。何んて恐い面だらう。八五郎今  
 歸つたヨ。女「あらマア能くも歸りだねエ、ヲホ／＼。八「何んだ氣味悪い不てん  
 に笑やアがつて。女「嘘ぞ寒かつたらうネ、サアあんかが出來て居るからあたるかエ  
 夫れとも炬燵へ潜り込むかい、夫れとも行水を遣ふかエ、只今氷を取て參ります、  
 暑氣拂ひにヒヤ奴でなをしを飲かエ。八「夏も冬もごツたにして居やアがる。女「マア  
 火鉢の向ふへお座り、さア蒲團をお敷なヨ。八「夫りやア何んだ。女「是れからしやれ  
 るぞ、驚ろくなヨ、何んじやと云つたネ……夫りや何んじや、そらさぬ、顔で福さ  
 せる。八「夏蠅せい。女「うるさき、うるさき、何を見てはねる、十五夜も月様見てはね  
 る。八「そんな事は云ふない。女「云ふなを棚の此方より現れ出たる武智光秀。八「手前

氣狂ひになつたナ、女氣狂ひ、四谷、赤坂、麴町、ダラ／＼落るが茶の水、ハ若  
 し隣りの茂兵衛さんに喜兵衛さん、家の女房が氣狂ひになりましたから一寸来て  
 下さい、女隣りから茂兵衛来る、喜兵衛の音、ハ此奴は大變だ、俺は逃出すぞ女、ヲ  
 ヤ／＼トウ／＼逃げ出したネ、逃げた振りて庭へ廻つて、家には垣根がないから、  
 塀の後ろで居るに相違ない、先づ簀笠をコゝ置てと、アノ人が殺生が好きだから  
 道具が揃つて居るのが嬉しいネ、是から先づ兩手をコゝ突て、君には今宵も御出遊  
 ばしますか、御機嫌よろしゆふ、と成駒屋を氣どつて、是から歌だが、サア大變だ  
 歌を忘れてしまつた、餘まりおしやべりを爲過ぎたからネ、エーと何んど云つたつ  
 け、然う／＼戀しくば尋ね来て見よ和泉なる信田の森の裏見葛の葉、ヲヤ些ともあ  
 てにならないネ、歸つて来ないネ、隠居、ハイ御免ヨ、お町さん何うしたエ、女、是は  
 旦那入らつしやいまし、先程家の亭主が歸つて参りましたから、貴下に教へてお貰  
 ひ申した通り門口で莞爾笑ひまして、夫れから世辭を云ひ、又しやれも遣りました

し、歌を詠でも八五郎は歸つて参りません 屋「そんな判らない八さんでもないが、歌はどんなのを詠たのだ 女「さまつて居りませアね、戀しくば尋ね来て見よ和泉なる信田の森のうらみ葛の葉、と詠ました 屋「その歌は違つて居るよ、夫れは狐の歌だ 女「ドリーで又穴探しに参りました。」

百 川

エ「爰許は百川と云ふ御話をうかゞいます、只今では小さい小供衆が西洋人の話をして居るのを聞いて、アレは一人は米國人で、相手の方の方は英國人と云ふ事が判るので、實に恐れ入つたものでげす、其昔は同じ日本内でも言葉の判らない所があります、夫でげすから江戸と云ふ所は生馬の眼の玉を抜と云つて大層恐がつたもんで御座います 亭主「ハイ、百兵衛さん、御二階で御手が鳴から一寸行て下さい

耳「ハア、私は二三日前此處の家へ飯焚に來んだから、何んだかアノ人達の云ふ  
 言は少しも判んねエからお前さま行つたら宜んべい、其俺が行く位なら頼みやア  
 しねえヨ、ヘーイ御手がなつて居るヨ、早く行つて下さい、耳何で行くだネ、其二  
 階へ行つたら、今朝程は女中共は髪を洗つて居りますし、跡は朝参りにまゐりまし  
 て未だ歸つて参りませんから、私に御用を被仰つて下さいましと云ふのだ、耳行け  
 つてば行くが困つたなア、二階では何うしたんだなア、酒が無えや、此の家に借が  
 ある譯ではあるめへ、ドン／＼手をひッ叩け（ボン／＼）下からヒアと返事を爲な  
 がら百兵衛が上つて参りました、耳ハア是は御免なせエまし、私は當家の抱へ人で  
 御座エますが、シジケンケンの事で参つたで御座エますが、御返答が伺ひ度つて参り  
 ました、御返答は如何で御座エますか、其儀が承り度もんでがす八五郎、へい、賊  
 にはや御最もさま、其御腹立は何んともはや、何うも無五郎、オイ兄弟、何をそんな  
 に詫まつて居るのだ、八何んだか此の人が理窟を云つて居るから詫まつて居る處だ

能「何う云ふ譯だ、ハ」夫が其の判らねエや、熊「此奴ア馬鹿だ、サア俺が代つてやらう、是は御出なせエ、先づ此の奴郎は理窟の判らねエ奴で、コト見へても俺は町内でも若い者頭をして居るので、何んでげすか今御前さんが云つた事をモト一遍願ひたいもんで、耳、ハア私ハ當家の抱エ人で、シジケンノ事で參つただから御返答を承りてエのがす、熊「其奴は一々御最もさまで成程何うも恐れ入やした、ハ」オ、イ、熊、何をそんなに恐れ入つて居るのだ、熊「此の奴郎位エ物の道理の判らねエ奴はねえなア、オイ皆ナ、變手古な面をするな、判りきつて居るじやアねエか……」皆々「何う云ふ譯だ、熊「此方は談判人だアな、皆々「シジケンが何うとかしたと云つて居るではねエか、熊「夫れだから判つて居らア、去年の祭りの時に汝達がしとん、劍を磨に遣ると云つて、祭りが済むと皆なで質に入れて遊びに行つたらう、ソコがヨ來月は祭りが来るに、其儘になつて居るから、町内の年寄や世話人が氣を揉で此の人を頼んで談判に寄來したのだ、ねエお前さんが談判に來たんだ、耳、ハア抱へ人

で御座います 熊、デ、シジン劔の事だネ 耳、ハア主人家の事で来やアした 熊、夫れ  
 ですからお前さんが歸つたら、町内の年寄に然う云つてお呉んなさい、祭りにはし  
 じん劔が間にあわなかつた節には氏子中の恥辱だ、蛇度祭りには間に合せますから  
 安心して居て呉んねエと、お前さんから能く然う云つてお呉んなさいまし、朝早く  
 から何うも濟みません、オイ汝達も然うじやアねエか、俺ばかり喋舌らせやアがつ  
 て、此の人に酒でもさせ、未だ何んにもありませんが一ツお飲んなせエまし 耳、ハ  
 ア、是は私に酒を飲つてエ有難エが、其のあんだか返事聞きてエもんだ 熊、夫れだ  
 からお前さんの顔の潰れる様な事は爲ねエから、黙つて吞込で歸つておくんなせエ  
 オイ何か肴はねエか、未だ河岸が来ねエから何んにも無エつて、ア、其處に慈姑の  
 口取がある、オイ夫を持って来イ、サア一ツお喰んなせエ 耳、夫れでも其貴下が返事  
 聞きてエもんだ 耳、だからサ、悪い様には爲ねエからお前さんが飲込で歸つておく  
 んなせエ 耳、是れ飲込かな 耳、飲込みにくからうが、莞爾笑つて下せエ 耳、是れ飲



込で笑へッて」と百兵衛さんが口取慈姑を指で摘んで「百ハア是れ飲込ば笑ふ處  
 か涙がこぼれますは、ハ「冗談云はねエで御頼み申しますぜ、百「よんどころねエ」と  
 慈姑を飲込で目を白黒致しましたから、皆なは驚ろいて脊中を叩くと、百兵衛さん  
 泣ながら下へ降りて行きました。皆「何うだい、世の中に随分判らない奴もあるも  
 んだ、俺は何うなるかと思つたヨ、熊「汝達は粹な事を知らねエから困るヨ、皆「何  
 故、熊「能く考へて見ろ、俺達が朝から折角旨く酒を飲で居る處へ、人の代言でもす  
 る人が恐い顔をして、シジケンは何うなりましたなんて理窟を云つて、折角飲だ  
 酒をまづくしては叶ねエと思つて、シジケンの一件も飲込ましたし、序に慈姑も  
 飲込で御覧に入れましよう、と人を笑はせる腕前杯は恐れ入り奉つるだ、數多の人  
 と交際にはア「いさいたいものだ、オイ夫は然うと酒が無エ、此の家は何うしたのだ  
 オイ早く手を叩けヨ、亭主「ヘーイ、百兵衛さん、お前が二階から降りて來ると直に  
 又御手が鳴ぜ、オイ柱へ寄かゝつて何を泣て居るのだエ、百「ハア、私國へ歸りま

す、二階へ上る度にこんな物を飲込くと云ふが、今度二階へ行たらば、ハア何に  
 イ飲込と云ふか知れねエ、一命が危いからモ一駄目でがす、オ前さんが田舎の人  
 だから、御客様が馬鹿にするのだ、ヘーイ、あんなに御手が鳴から早く行ても呉れ  
 ヨ耳夫れは主命だから據ろねエ、行く事は行くが、今度何を飲されるか知れねエ  
 二階へ上つてモ一再度お前様に面會が出来るか判らない、主従は三世と云ふから、  
 能く貴下の顔見せて下せエ、亭馬鹿云つちやア叶ねエ、早く二階へ行て下さい、今  
 度二階へ行たら能沈着てコー云ふのだ、私は田舎者で二三日前に此家へ飯焚に参り  
 まして、未だ目見得中で御座いますが、今朝程は女中共が朝参りに参りましたし、  
 又髪を洗つて居りまして手が放されませんから、私が御用を聞きに参りましたのだ  
 から、田舎者だと思つて御冗談をおしやらないで、御用を云ひつけて下さい、と  
 能く可憐に云ふのだ耳ハア行てめエります」二階では何うしやアがつたのだ、  
 手を叩けよ、とドン／＼手を叩く耳ヒヤア、ハオヤ又先刻の奴が來たぜ耳ハ

オ、御免なせエまし、今度は何を飲込のだな 熊「コレは驚ろいた、マア此方へ御出  
 なせエ、先刻の話は年寄連中は何んと申しました 耳「ハア貴下方に云ひますかねエ  
 私は此處の家へ二三日前に来た飯焚ですが、女子供が来る譯だがネ、髪を洗つた  
 り、又朝参りに行つたりして手が放されねエから、私が参りましたが、田舎者だと  
 思つて御冗談ぶたないで、貴下方用を云ひつけて下せエましヨ、用はあんだネ 熊「オ  
 ヤ變手子だぜ、夫ではお前さんは此處の家の飯焚かエ 耳「ハア、飯焚ですが、  
 ハ「夫でもお前談判人だと云つたではないか 耳「何に談判人ではない、當家の抱へ  
 人と云つたのだ 熊「成程抱へられたから抱へ人か、だつてシシン劍の事を云つたで  
 はないか 耳「シシンケンではない、主人の家の事だから主人家の事と云つたのだヨ  
 熊「何んだ然うか ハ「熊公汝大層此の人を褒て云やアがつたではねエか、此奴は大  
 笑ひだ、オイ用と云ふのは他じやアねエ、酒がないからドシ／＼持て来て呉れ、夫  
 から肴も早くしてくんねエ、夫から氣の毒だが一ツ御前使に行て来て呉れ、他でも

ねエが慙ふ云ふのだ、長谷川町の常盤津の師匠でかめ文字と云ふ人の所へ行つて、  
 只今浮世小路の百々川から来ました、魚河岸の若エ者が五六人で来て居ますから  
 師匠に曲理の箱を持って直に來て下せと云つて、事によると箱を渡すから箱を持って  
 來て呉れ、オイ茫然して居ては困るぜ、判つたかエ 耳ハア、何んだか初は判ら  
 ない困つたなア 八然うか、中程は判つて居るのかネ 耳夫れがうる覺えで 八夫  
 れでは終は宜ひのか 耳夫れがハア、形無しで 八夫れでは丸ツきり判らねエのだ  
 困るなア 熊オツト、よし、今此處の家の大將が二階の梯子段から半分頭を出  
 して聞て居たヨ、下へ行て旦つくに聞て行きな 耳ハア、宜しう御座います」と  
 下へ降りて参りますと 亭主百兵衛さん、今聞て居ましたヨ、家の印袴纏を着て行  
 つて、長谷川町の常盤津のかめ文字さんと云ふ師匠の處へ行つて、慙ふ云ふのだ、  
 私、浮世小路の百川から参りましたが、今朝魚河岸の若イ衆が五六人來まして、  
 御師匠さんに直ぐ來て下さいと云ふのだ、夫れから箱を持って來るのだヨ、若し判ら

なかつたら長谷川町で名高い師匠と聞くと直に知れるから早く行って来なさい 耳ハ  
 アー行て参ります」と出懸けましたが、表へ出ると往來の賑かさ、うろくとやう  
 く遣つて参りましたのが長谷川町 耳是は困つた、私行く處を忘れたゾ、ヨシ此  
 處の髮結床で見て見へイ若し床場さま、一寸御聞き申しますがネ 若者何んだイ、  
 耳私が行く所は何處だんべイ 若狎戯るなア、お前の行く處を俺が知るものか、  
 耳何うか思ひ出して下せエ、覺えの悪ひ人だ 若お前が覺えが惡ひのじやアねエ  
 か 耳能く考へたら俺だ、アノ此處は長谷川町かネ 若然ラヨ 耳此の町内で名高  
 い人があるかネ 若名高い人は幾人もあるヨ、名は何んと云ふものだ 耳夫れがハ  
 ア判らねエ、何んだか頭へかの字が附て居るだが 若ム、夫れでは頭にかの字と、  
 ハテナ親方何處でしよう 親方然ラヨなア、若しやかもじさんではないか 耳其の  
 人は名高いかな 若名高いとも 耳其處に違ひない、何處だネ 若夫れは向ふに見  
 へる黒塀のある、ソラ赤松のある、門構へで玄關には高張提灯が立てある 耳ハ

有難ふ御座ります」と遣つて参りました。耳「此處だく、大層でかい家だぞ、ハイ御免なせエ。門人「ド、何方から御出になりました。耳「私何んだ、其の浮世小路の百川から参りましたが、魚河岸の若ひ衆が今朝がけにさられやして、ハア、何に五六名サ、夫れだから来て貰ひてエと云ひやした、夫れに何んだか箱を背負て來いと云ひやしたぞ。門人「左様か、暫くお控へなさい、只今取次ます。耳「早く御頼み申しますぞ。門弟「先生へ申し上げます。先生「何んだナ。門人「只今浮世小路の百川から使ひが参りました、魚河岸の若ひ者がけさがけに切れまして、先生へ御見舞を願ひ度と申して参りました、夫れに藥籠を持って行と申して居りますが、如何致します。先生「左様か、魚河岸の者は氣が荒くツて誠に困る、他ならぬ魚河岸の事ゆへ、病家先も澤山あるが、即刻に御見舞申すと云つて、然うして焼酎生玉子、白布等の用意として置けと申しつけてやれ。門弟「先生藥籠は如何致しますせう。先生「左様サ、確實な人物なら持して遣んなさい。門弟「畏りました」と玄關へ出て参りました。門弟「コ

レお使の人御待遠であつた耳「ドーダネ来るかな 門第家へ御歸りになつたら罷く  
 然う云つて下さい、先生は病家先も諸方にあるが、外ならぬ川岸の御若ひ衆の事だ  
 から速に御見舞申す、夫れに焼酎、白布、生玉子の用意をして置く様に云つて下さ  
 い、此の箱を大事に持つて行くのだ、宜しかネ判りましたか 耳「ハア判りやした、  
 ハイ左様なら」と歸つて参りましたが御話し替りまして、百川ではやうくの事で  
 女中が出て参り、いろく酒肴が出る大景氣になりました 熊「オイ皆ナ呑だく  
 オイお竹さん、お梅さん、お松さん又洗髪はオツだ、今にネ歌女文字さんが来ると  
 吉さんのさがやあむろと来るのだ、有難エと皆々へレケになりまして、向ふ鉢巻  
 の大肌ぬぎ、もんもんくりからの自慢の入墨を出して大陽氣 熊「オイ姐さん未だ使  
 は歸つて来ねエか、何に今歸つて来た、直に此處へ寄来して呉れ、やア御苦勞さま  
 何うした師匠は来るか 耳「ハイ行て参りました、アノ然う云ひましたヨ、其の病家  
 先も澤山あるが、外ならぬ魚河岸の若ひ衆のこんだから早速に御見舞申すと、夫れ

に焼酎と白布、生玉子の用意をして置けと云ひやした。八「オイ兄イ、何んだかへん  
 てこだぜ。熊「オイ汝は粹な事を知らねエから困る。八「だッて恰で俺達は病人の始末  
 だ。熊「だからヨ、俺達は恰で病人も同じだ、二日酔いやアねエか。八「病家先がある  
 と云ふのは可怪いじやアねエか。熊「病家先とは師匠が出稽古が澤山あるかと云ふ酒  
 落だ。八「生玉子と云ふのは何う云ふ譯だ。熊「極つて居るではないか、汝達は夕べ  
 だから養生に生玉子と云ふのは感心じやアねエか。八「成程、焼酎は何う云ふのだ、  
 熊「アレは、焼酎で惚たわき戀慕か、何んかでガブ呑をするつもりだヨ。八「白布は  
 何うするのだ。熊「知れきつて居らア、布晒か、かつぼれでも踊るのだ、なんでも宜  
 ひや、なアオイ師匠が箱をよこしたか、何うしたエ。耳「ハア、箱を脊負て参りま  
 した、是れでがす。八「何んだイ、アノ此の箱は。熊「夫れだから話せねエと云ふのだ  
 八「馬鹿に小さいではないか。熊「當りめエよ、師匠は物事にこッて居るから、三味  
 線の三ッ折でもないと云ふので、何か機械かなんかでベチャ〜と恣ふ小さくなる



のだ、實に恐れ入つたものだ、コレ見ろ更紗の風呂敷はバツチリの中結び、慥ふ見  
 た處は誰が見ても恰で醫者様の藥箱と外は見へねエや、オイ誰か此箱を其の床の間  
 へあげて置けヨ、オイ皆な跡で一ツ陽氣にぢん句だく」と皿を叩く井を叩く、總  
 踊りと云ふ騒ぎの所へ、左様な事は少しも知らずに、かもじ先生二階へ上つて來て  
 先生是は怪しからん、何んだ朝から不行儀千萬、向ふ鉢巻の大肌ぬぎ、怪我人を控  
 へ此の有様」と暫し茫然突立て御出になりましたが、其内に一人の若ひ者が踊りな  
 がら是を見つけて「○是は大變何時の間にかもじ先生が御出になつた」と皆々  
 に教へると、熊是はく「先生能く御出になりました、先達て喧嘩の時に御厄介にな  
 りまして、未だ御禮にも上りませんで、オイ皆な先生が入らしつた、肌を入れろ、  
 鉢巻を取れ、マア先生此方へ、今日は朝から何方へ御出懸けで、へい」先生別  
 に何方と云ふ譯でもない、此方へ出ました譯で、面々、病人のある所で斯様にお騒  
 ぎになつては困る、而て其の袈裟がけに切られたと云ふ御方は何方に御出になる、

熊「へ、袈裟がけになんですか、先生何處に喧嘩でもあつたのですか、先生是は怪  
 しからん、して焼酎、白布、生玉子杯の用意は整つて居るかな、熊皆な聞て居まし  
 たネ、焼酎を御飲んなさるか、先生いよく怪しからん、只今手前を呼びに御遣は  
 しになつたらふ、八「冗談云つては叶ねエ、酒の場に先生杯呼だつて仕方ない、先生益  
 々怪しからん、現在私の藥箱がアノ床の間にあるではないか、八「オヤ何んですかエ  
 アレは先生の藥箱でこんでもねエ、夫れではアノ田舎者の大きな男が迎ひに行まし  
 たかエ、先生如何にも左様、熊皆な聞たか、先生の所へ間違へて行つたのだと、  
 八「夫れだ、兄イがイヤにアノ男を褒て、又失策てしまつた、何とも先生へ申譯が  
 ねエ、皆な先生に詫れ」と皆々平詫り、熊「夫れにしてもいましくしひはアノ奴  
 郎、先生へ申し譯がねエ、アノ奴郎を此處へ呼で來イ、女中「オイ百兵衛さん、百、ヒ  
 エ、何んでがす、未だ何にか吞込むか、熊「此奴郎、無暗に吞込たがつて居やアがる  
 恰で嫂の始末だ、然うじやアねエやイ、此のぬけ作め、常盤津の歌女文字さんを呼

で来いと云つたら、かもじさんを呼で来やアがつてぬけ作奴郎め 耳俺そんなにぬけて居るか 熊ぬけて居らア 耳待なヨ、かめもじ、かもじ、只た一字だ。

### 素 人 船 頭

此話は福圓遊の師匠圓遊の遺物素人船頭と云ふ御話で御座いますが、福圓遊のは若旦那が餘り御道樂でなく致しまして、青年方の前でも學校でも御喋舌の出来るやうに致しましたから、少し話の筋が違つて居りますから其おつもりで御讀を願ひます。親方、夫れでは若旦那何うしても船頭をやつて見やうと云ふのですか 若旦那「へい是非一ツ願ひます、私は船をあやつる事を覚えまして、南極探險か北極探險にでも出懸けやうと云ふ精神で御座います、素より日本は海國でありますから、船を漕ぐ事を能く覺へるのが必要で、私はゆくゆく海軍へでも入るか、商人になれば郵船會

社の社長にでもなるつもりで御座います、是非御承知を願ひます 親方、何んだかお前さんの云ふ事は、私には學文がないから判りませんが、夫れ程思ふなら遣つて御覽なさいだが、却々骨が折れますから辛抱が出来ますか何うだか 若旦那、夫れは案より覺悟で御座います、就きましてはアノ河岸にお在なされる、松さん、竹さん、梅さんを是へお呼びになりまして、今日より私が仲間入を致しますから、何分御引立を願ふと云ふ事を貴下から御紹介を願ひます 親方、何んだか恰で活動の辯士の様ですネ オイおでこや、河岸に居る若い者三人を二階へ一寸來いと云つて呼で來な 女中、ハイ、畏りました、若し松さん、竹さん、梅さん親方が呼で居るよ」と聲をかけました、三人は今下手將基最中で、竹、困つたなア飛車取り大手か 女中、オイ呼で居ますヨ 松、嘘だヨ、彼奴は毎時でもかつぐのだヨ、アノ位の馬鹿のくせに他人をかつぐ女はないヨ、此間も俺が棧橋で積鼻禪を洗つて居ると、早く来て下さいいぼやが始まつたと云ふから、俺は其儘駆て往て、ぼやは何處だと聞くと、竈の下がぼや〜

燃て居ると吐しやアがつて、夫れが爲に噴鼻禪一本損害を及ぼしてしまつた。梅、眞  
 實だヨ、俺も先達かつがれた、アノ女が此節は自働車は立派だと云ふから、俺が自  
 働車も宜ひが、今は空中飛行機で方々歩行だらうと云ふと、又アノ女が今度三階馬  
 車が出来たが、誠に品柄が宜ひと云ふから、夫れは何處で出来たのだ、大方外國で  
 出来るのだらうと、俺が云ふと、何に然うではない上總の加納山で出来たと云ふか  
 う、何う云ふ譯だと聞くと、彼奴が變手子な聲を爲やアがつて、三階馬車は上總山  
 と洒落やアがるのだ。女中「アラ親方幾ら呼でもまゐりませんヨ。親方、オイ来ないか  
 松「へー、親方の聲だヨ、アノ聲の低氣壓を考えて見ると、アノ聲が陽に發して陰  
 に響く所を見ると、是は殊によると何か小言に相違ない、右前達何か小言を喰ふ様  
 な事はないか、能く二人て考えて見な。竹「大ありだ、實は先達花火の晩に新造のみ  
 よしを打ッかいたのだ。松「何に船のみよしをかいた、困るなア。竹「木場の旦那が無  
 理に酒を呑めと云ふもんだから、遂に酔はらつてトウ／＼失策た。松「だから叶ぬ

エ、親方に見つかつてから詫るのは巾が利ねエや、ヨシ俺が一番辯を振つて詫つて  
 やらう、何んでも先んずる時は人を制す、遅るゝ時は人に制さるゝと云ふ事がある  
 竹「何んだ夫れは 松「先達俺が講釋の先生に聞て來て、何處で一番遣つてやらうと  
 しまつて置たら、漸々役にたつて有難ひ、御性だからモ一べん云つて呉れ、先ん  
 ずる時は人を制す、遅るゝ時は制される 竹「へ、又親方が呼で居るぜ 松「心得た  
 先づ何んでも構はねエ、俺が先んずるから俺の尻へ尾て來い、何故然う俺の尻を持  
 ちあげるのだ 竹「持ちあげるのではないヨ、お前が愚圖々々して居るから、お前の  
 尻の下へ俺の頭がゆくのだヨ 松「成程考えて見れば贅はねエや」とやうく二階へ  
 上つて参りまして 松「へい親方何んとも申し譯が御座いません、此の奴郎が早く詫  
 つてしまへば宜いのに、何時までも黙つて居るから、トウ／＼親方に見つかるやう  
 な譯で、先んずる時は人を制す、遅るゝ時は制さるゝと云ふ事を知らないので、誠  
 に濟みません、何うか御勘辨を願ひます」とやたらにピヨ／＼御辭儀を致しまし

て、菓子皿の中へ頭を入れると云ふありさま 親方「オイ松、汝菓子皿の中へ頭を入  
 れやアがつて、額へ羊羹がくつついて居らア、馬鹿奴郎 松「へい、何うも有難エ、  
 親方「オイ何故羊羹を喰ふのだ 松「へい何うも其の、お腹も立つても御座いませう  
 が、御勘辨を願ひますやうな譯で、實は其の竹の奴郎が花火の晩に船のひんばなを  
 ぶツかいたんで 親方「俺は少しも知らねエ、然う云ふ事は早く知らさなければ叶ね  
 エ 松「夫れでは親方未だ知らねエのですかエ 親方「俺は始めて聞た 竹「夫れ見ねエ  
 松公汝の先んずるは餘り當にはならねエ 松「モ一云つてしまつたから、お断念なさ  
 い、夫れでは親方呼だのは小言ではねエのですかエ 親方「小言ではねエ 松「夫れで  
 は何か呉れるのですかエ 親方「慾張るなエ、此處に御在なさる若旦那が今度船頭に  
 成りたいと被仰るのだから、汝達能く船を漕ぐ事をお教へ申せと云ふのだ 松「へい  
 然うですかエ、へい若旦那お芽出度御座ひます 親方「財産家の若旦那が船頭になる  
 のが何んでお芽出度のだ 松「夫れでは御愁傷さまで 親方「何んだくやみを云やアが

つて「松」親方の様に然う小言計り云つては困ります、然し若旦那是から何でも私  
 がお教へ申しますから、恚ふ云ふ商賣と云ふものは宵越の錢を遣ふやうでは叶ませ  
 ん、私なんぞは何處の附合でも厭と云つた事はないのだ、何處の矢場へ幕、何處の  
 氷屋へ提灯、芝居の惣見物と云ふので、一遍でも交際を外した事はねエので御座い  
 ます「竹」オイ松、旨く云つて居やアがる、此間「汝」壹圓の交際で入王子まで逃たら  
 う「松」何に何時俺が逃た、ア「成程」アは去年の暮だ、アノ時は少し都合が悪いか  
 ら逃たが、今は二圓だつて驚ろかねエや「竹」そんなら五圓の交際なら何うする「松」何  
 に五圓か、エ「五圓」なら少し隠れらア「親方」松汝は一番宜ないぜ、先達若旦那と一  
 緒に湯に往つて、驚ろいた若旦那の脊中を見ると大きな面が書てあるから、何うし  
 たのだと聞くと、松さんが被仰つたのは威勢の宜い商賣は入墨がなくつては威勢が  
 悪いから、入墨をほつて上げませうと云つて、脊中へ書て呉れましたと云つたが、  
 汝何か若旦那の身體へ入墨を爲る氣か「松」イエ別に入墨を爲る氣でもねエのですが



遂言葉のはり合で入墨の下繪を描たので、辨慶を描つもりで一ツ威勢よく描つもり  
 で云つたのだが、俺は繪の方は餘り巧妙ねエから、辨慶の首が大き過ぎて、脊中いつ  
 ばいに描てしまつて、何うも恚ふも爲やうがねエから、俺の脊中へ右の腕で、アノ  
 奴郎の脊中へ左りの腕、三枚續きの入墨 親方馬鹿、三枚續きの入墨があるかエ、  
 若旦那「エー皆さん、冗談は借置て、私は今日より貴下方の仲間入をするので御座い  
 ますから、只今より私の事を若旦那なんと云はずに、皆さんの様に私は徳三郎と申  
 しますから、矢ッ張徳やいと御呼びなすつて下さいまし 茲夫れは叶ません、昨日  
 までも今日までも、若旦那の爲に御厄介になつた御方の事を、今更徳やアなんて呼  
 びつけに出来ませんやアネ 竹松、汝の様に御ベツかつては叶ねエや、是からお客  
 様と一緒になつて、船頭の居る中で、若旦那と云ふ人間があつては御祝儀が貰へね  
 エや、時世時節とあきらめさんせ、牡丹も菰被て冬籠りと云ふ法律が都々逸と云ふ  
 書物に出て居らア 茲夫れでは汝一ッ若旦那の事を呼びつけにして見ろ 親方竹、

一番口あけに呼びつけにして見ろ、早く遣れ 竹ソイツは困つたねエ、然う皆なの  
 様に傍から早くやれ〜と號令をかけられては、折角出かゝつた奴が出そくなつて  
 しまはア、酒の場でオイ一ツ唄ひねエと來る、よし來たと直に唄ふと工合が宜いが  
 何うかすると唄ひそくなつて、皆なに竹さんの番だよ、お前の番だよ、と云はれる  
 都々逸が咽喉まで來ても逆戻りをするじやアねエか 藝文句は宜いから早く若  
 旦那を呼びつけにして見ろヨ 竹へー今遣りますヨ、ねエ若旦那、先づ皆なで御客  
 様の前へ出らア、すると徳三郎さまなんてエ名は變だ、徳どのも可笑いや、徳大明  
 神も猶ほ面白くねエや、ソコデエー思ひきつて、徳やイ、御免なさい 親方、何を詫  
 つて居やアがるのだへ」と是から致しまして毎日若イ者が親切に船の漕やう、其の  
 外を教へて居りました、頃しも隅田川に燈籠流しが御座いまして、今日は朝から船  
 は皆な出はらつて居りまして、家には船頭は一人も居りません、中に徳さんばかり  
 は未だ御船を漕ぐ事が碌に出來ませんので、店の隅の暖簾の後ろで柱に寄りかゝつ

て一人で居眠をして居ります、家で船を漕ののですから大丈夫で御座います、恰當此  
 處へ遣つて参りましたのが、でこ山さんに燈道さんと云ふ御年輩の御客様御二人連  
 でさんれる「オイ出子山さん、お前は酔て居るから然う剛情をはるが、迎も電車は満  
 員だ叶ないから、俺の云ふ事を聞いて船で往ふじやアないか で「およしヨ、お前こ  
 そ酔て居るから困る、今日は物日だから船は迎も無いから御よしヨさんれる」大丈夫  
 だヨ、俺の始終行く向ふに見へる柳橋の船宿は、俺が宜ひ御客様だから直に船が出  
 来るから、黙つて尾てお出ヨ、やア今日はちかみ何うしたエ 女房「アママア貴下能  
 くママ入らつしやつた事、御機嫌よろしゆふ、先日は誠に失禮御構い申しも致しま  
 せんで、旦那アノ時の女の子が大層旦那の事を褒て居ましたヨ、是非モ一べんア  
 「云ふ粹な旦那のお供を爲たいから、旦那がお出になつたらお願ひしてくれッて、  
 貴下罪ですヨさんれる」何うだい俺の景氣は先づこんなものだ、オイ驚ろいたらう、  
 所で御かみ船を一艘向島までやつて貰ひたいものだ 女房「あらママア叶ませんねエ、

今日(けふ)は御存知(ごぞんち)の通り(どおり)物日(ものひ)でせう、朝(あさ)から船(ふね)は出拂(でばら)つて一艘(いっそう)もないの、残念(ざんねん)ですわねエ  
 何故(なぜ)貴下(あなた)昨日(きのう)にでも云(い)つて下(くだ)さらないの、で、「ソラ御覽(ごらん)な、御前(ごまへ)の上等(じやうとう)御客(ごきゃく)は當(あ)て  
 ならないせ」とんれる「オイお内儀(かみ)、此(こ)の男(おとこ)は他人(たにん)の愛(あい)ひを喜(よろこ)ぶ男(おとこ)だ、俺(おれ)が此處(こゝ)の家(うち)へ  
 來(き)れば船(ふね)は屹度(きつど)出(で)來(き)ると自慢(じまん)して來(き)たのだ、お金(かね)は幾何(いくばく)でも出(だ)すから、何(なに)うか一ツ  
 近所(きんじよ)か何(なに)んかで船(ふね)を都合(つがふ)して呉(く)れな、女房(にようばう)實(じつ)は御船(ごふね)はチヨキが一艘(いっそう)御座(ござ)います  
 船頭(せんとう)がないので、妾(めかけ)が男(おとこ)なら眞實(まこと)に御供(ごとも)をしたいのですかねエ」とお内儀(かみ)が頻(しき)りに  
 言(い)ひ譯(わけ)を云(い)つて居(を)りますると、暖簾(のれん)の影(かげ)から例(れい)の若旦那(わかだんな)の徳三郎(とくざう)さんが、お内儀(かみ)の  
 袖(そで)を引張(ひっは)つて、徳(とく)若(じやく)しお内儀(かみ)私(わたし)が參(まゐ)りませう、女房(にようばう)叶(い)ませんヨ、未だ無理(むり)ですヨ、徳(とく)イ  
 、エ大丈夫(だいぢやうぶ)ですヨ、昨日(きのう)も向河岸(むかえがし)まで船(ふね)を漕(こ)ましたから、女房(にようばう)叶(い)ませんヨ、とんれる「オ  
 イおかみさん、變(へん)な事(こと)を爲(し)ては叶(い)ねエ、何(なに)んだか暖簾(のれん)の後(うし)ろから手(て)が出(で)て、お前(まへ)の  
 袖(そで)を引(ひ)ツぱるではないか、オイ暖簾(のれん)の後(うし)ろの人(ひと)、此處(こゝ)へ出(で)なさいヨ、ヤア！出(で)た好  
 男子(おとこ)だ、オイお前(まへ)は何(なに)んだイ、徳(とく)私(わたし)は船頭(せんとう)で、宜(よろ)しく御愛顧(ごあいぐん)を願(ねが)ひます、とんれる「イ

ヨーお前は船頭かエ、有難い船は漕るかエ、徳、大漕、旦那私に漕して頂戴なさんねる。漕  
 で頂戴、徳、宜しい、只今支度致します」とかみさんが頻りに氣を揉で居る内、例の  
 徳さん船の支度が出来まして、徳、サア旦那方船へ往つしやイ、で、「オイ俺は御免蒙  
 るヨ、さんねる」何故、で、「だッてアノ船頭何んだか色のなまッ白い役者見たいな様で  
 何んだか病人かも知れねエ、さんねる」お前は能くそんな事を云ふヨ、大丈夫だから早  
 く船へお乗りよ」と無理にお友達の手を取つて引ばり込だが、若旦那の船頭は大喜  
 びで、徳、へイ旦那上を御覧なさい、柳橋の上に皆なが羨まじさうに船の中を見て居  
 ますヨ、オヤ藝者が笑つて居ますヨ、さんねる「夏蠅なア、若衆早く船を出しねエな、  
 徳、畏りましたが、旦那船の心持の宜ひのは、先づおかみさんが何んの役にも立ち  
 ませんが、船へ手をかけて御機嫌よろしゆふと、船頭が棹を一本はると船がスーと  
 出ると云ふ呼吸と云ふものは、實にしんしやうで、さんねる「早く其のしんしやうを遣  
 つて貰ひたいネ、女屋、へイ御機嫌よろしく、徳、ウン」とヨー一本棹をはるとさんねる「船

頭さん、少しも船は動かないぜ。女房「御機嫌よろしう。舞「ウーン」とコー棒をはる  
 とウーン。女房「若し若旦那そんな腰つきでは船が出ませんヨ、モット腰を落して下  
 ツ腹へ力を入れてウーン。舞「然う下ツ腹へ力を入れれば失禮をするではありません  
 か。で「オオイ、だから俺は厭だと云つたのだ、船に乗て船頭に失禮をされては世話  
 はないや、先刻から此の船は何時間此處に居ると思ふ、モ一四十五分かゝつて居る  
 ぜ、實に情けない、アレ御覽橋の上で皆なが見て笑つて居るぜ、アノ左りの方に汚  
 い帽子を冠つて、汚い折靴を抱へて居る五十格好の男が居るだらう、アレは俺の家  
 へ来る高利貸だ、此頃は俺が少しも遣らないのだが、明日ッから屹度甚く談じられ  
 るに違ひない、船遊山をする位の猶豫があるなら直ぐ金を返せと来るに違ひない  
 ア「進退極まつたさんねる「オイ何をそんなに愚痴を云ふのだ、おあさくらめヨ、オイ船  
 頭さん、船が少しも動かないヨ、御機嫌よろしゆふを是で二十八度聞て居るヨ、オ  
 イ船頭さん、船が結いてあるではないか。舞「成程結いてありますな、繫つてあつて

は船が出ない筈だ」と是から綱を解く。鶴「サア出ますヨ。女房「御機嫌よろしゆふ、

鶴「棹をコゝはるが、サア大變若し旦那、棹を取られてしまつた、一寸抜取つて

下さいヨ。とんれる「厄介な奴だなア、ソレ棹を遣るヨ。鶴「ハイ有難ふ。さんれる「何故然

う棹をまわすのだ、俺の頭を撲たではないか。鶴「成程確に撲ました、失禮だが是か

らが旦那宜ひ處だ、棹から艦に替る處が宜ひネ、柳橋から小船で急せ山谷堀と云ふ

唄を御存知ですか。とんれる「そんな唄は俺が三ツか四ツ位の時によくお婆さんが唄

つたが、アレは古い唄だ、元祿時分だらふ、オイ船頭さん馬鹿に船が動くぜ、オヤ

く石崖の處へガリくくツつくではないか。鶴「へい此船は石崖が好で、モシ旦那

ソツチの肥満た人、石崖を突て下さい、手で突ては叶ませんヨ、蝙蝠傘の柄かなん

かで、でこやま「厄介な奴だなア、ソラ突ヨ、ア、叶ねエ、トウく蝙蝠傘を石崖の間

へ狭んで取られてしまつた、船を跡へ返して御呉れヨ。鶴「然ら勝手に船が戻せる位

おなら貴下には頼みませんヨ、モ、仕方が御座いません、あゝあらめなさい、て、オ

ヤ／＼情けないなア」是から追々大川へ出て参りました。で、「一吹煙草を吸ふと思ふのだが、あんまり船が動いて何うする事も出来ない、何を笑つて居るのだヨ、煙草盆を持て一寸と出してお呉ヨ。さんねる」サアおつけな。て、「何うしても煙管が煙草盆の處へいかないよ。さんねる」ソラ、アラ駄目だ、一イニフ三、とやう／＼火がついたが、今度は煙管が口へ入らないよ、方々面中を突いて叶ねエ、オイ船頭さん向ふから川蒸氣が来るぜ、大丈夫かネ。鴛夫れが判りません、若し危険と思つたら貴下方聲をかけて下さい、汗が出て眼へ入るので先が見へませんから、旦那私の顔の汗を拭て下さい。さんねる」ソラ汗を拭てやつたよ。鴛有難ふ、モシ一人の旦那、見て居ないで扇であほいで下さいヨ。で、「ソラヨ、扇であほひで居るヨ、確りしてお呉れヨ。こゝなつてはお前が頼みだからネ、オヤ／＼船がグル／＼廻るヨ。鴛此處の處は時々船が廻るので、廻る船にはさからはらずで、モゝ何うしても遣り切れませんが、貴下方は泳ぎは少しは御存知ですか。二人二人ともかたなしたが、お前は船頭の事だ



から定めし出来るだらう 傳夫れがかたなしなんで、コゝなつたら仕方がない、死  
 なば諸共一蓮たく生、ア南無阿彌陀佛 で、オイ心細い事は御免蒙ひるヨ、オイ  
 船頭さん、俺は向島へ行くのだヨ、何んだか御臺場が見へて來たぜ、何處まで流す  
 つもりだエ 傳御心配なさいますな、豈夫米國までは参りません。

### 落語虎の巻

何も御愛想が御座いませんから、昔の名人が寄まして作へました御話の内、最も  
 秀逸ばかりを御覧に入れます、是を落語虎の巻と名付けます、

#### 旗頭

○熊谷直實は士の黨の旗頭だと云ふが、敦盛は何の黨だ △アレは最期まで青葉  
 の笛を持たからさのとうであらふ、

石橋

下女「今度富十郎が石橋を致しますが、おかみさん貫下にそっくりで御座います、  
 おかみさん「アラ妾しに似たとは容貌がかエ 下女「イ、エ おかみさん「妾かエ 下女「イ、エ  
 おかみさん「夫れでは何處が似て居るの 下女「ハイ、あぐしの赤いところが、

遺言

アノ邪見の忤め故に遺言は態とそむけと云ふがよると子供を呼び「○」最早俺も暇乞  
 ひだ死でも必ず物入をするな、菰に包で川へ捨よ」と云ふて死す、忤思ふやう、借  
 てく是迄親の仰せを背ひたが、一代に一度の事、是ばかりは用ひすばなるまら、

拳

胡摩味噌を摺て居る處へ「チトあんばいをしやう」と拳を出すぞ 甲「イヤダ、  
 乙「そんなら此の手を捻つて見ろ、

鷹の者

主人友を呼び新宅を見て呉れ 客「ム」能く出来た、たる木を竹でした處が何うも宜い節を脱たか 主人「イヤ脱ぬ 客何故 主人「焼る時はねて悪ひ、

田舎者

甲「江戸は廣い處だ、日本程あらふか 乙「馬鹿を云へ、日本は江戸の二ツがけある、

飛脚

狼が口をあいて山道に居ると、飛脚は來かゝり口へ飛び込み、夫れも知らずに腹の内をサツくと走り、尻からぬけて急ぎ行く、狼の云ふやう、しまつた頓鼻禪をすれば宜つた、

煙草

客「庭に煙草が見へますが、御植なされたか、又苗でも御蒔なされましたか 主人「イヤ左様でも御座らぬ、大方掃除の時に吸殻でも落したので御座らう、

題目

無筆が題目の掛物を買 ○「コト八公見や、家には本尊がないから念佛の掛物を買て  
 来た ハ「ドレ」念佛は六字だが、是は七字だ ○「そんなら南無阿彌陀佛様だらう、

富士

甲「富士の山は何時頃出来ました 乙「ハテ頼朝の時代サ 甲「そんなら鎌倉へ出来さ  
 うなもの、何故駿河へ出来ました 乙「サア其處が北條殿のたくみ、

熊

浅草奥山や其外へ觀物に出る木戸番の親父、今を限りの大病、大聲あげてうは言に  
 熊じゃ〜と計り云ふて、念佛一べんも申さず、女房氣の毒に思ひ、何うぞ臨終の  
 今なれば念佛を勘ても聞き入れず、近所の者ども勸むれども、只熊じゃ〜と計り  
 なるに、氣てんの男、私が御念佛を申させませう、と大きな聲で、コレ伯父さん翌  
 日は大雨だヨ 親父「ヤレ南無阿彌陀佛、

茶がま

茶釜ちやかまのふせてあるを見て 甲「何か此處こゝに黒くろい物ものがある 乙「オ、夫それは茶釜ちやかまだ 甲「何故なぜ此この茶釜ちやかまには口くちがない 甲「ハテふせて置おいた」と云いへば、ひっくり返かへして乙「底そこもない

鉢はちの木き

親父おとう「貴様きさまの謠うたは帆ほを揚あげてと云いふ處ところがよくない 伴おとう阿父おとうさん何なんにも知らぬくせにヤレ早はやいの遅おそひのと、何なんでも師匠しやう様さまで習ならつた通とほりに謠うたふのに 親おや、何なにに俺おれが知らぬ事ことがあるものか、何なんでも知しつて居ゐる 伴おとうそんなら今日けふ習ならつた謠うたを當あてて御覽ごらんなされ 親おや「そんなら謠うたへ 伴おとう「イデ其時そのときの鉢はちの木きは、梅うめ、櫻さくら、松まつにてありしよな」サア」是これは何なにんだ 親おや「知しれた事こと菅原すがはらだ、

泳およぎ

甲「只今ただいま大川おほがわで見みましたが、アノ様やうに泳およげるものでは御座ございません、俯向うつむになつて身動みうごきもせずしに十町計じやうぢやうり、夫それれから中なかの方はうへ出でました故ゆゑ、目めが及およびませんゆへ見捨みすてて來きましたがあんな泳およぎの上手じやうずがあるもので御座ござるか 乙「夫それは土左衛門どざゑもんで御座ござらう

甲「されば御名前は承りませぬ、

塔

二人連で浅草観音へ参り 甲「此の塔は四重だの 乙「馬鹿を云ふナ、塔は三重か五重に極つたもので、是は五重の塔だ、アレ見やれ一二三四五、五重の塔だ 甲「ア、蓋ともにか、

茶

甲「貴様は熱い茶を他人より早く呑むが、何うしてあのやうに早く呑む 乙「アレは雑作ない、二口三口呑で跡は死ぬと思つてグツと呑む、

子息

息子が此の中親父と大喧嘩をして掴み合、長家中が大勢寄つて、やうく外へ出したら息子の云ふには、親父の泥棒め面を見知つて居るぞ、

庄屋

百姓扇の繪の千羽鶴を見て 百姓「是は何と云ふ鳥だ 庄屋「ハテナ、龜があれば鶴  
だが、

始末

客い親父が臨終の遺言に必ず物入すな、夜の内に寺へ遣つてくれと云ふ、親類集り  
然うもなるまい、コゝもなるまいと云へば、親父起直りてそんならモ一死なぬ〜  
なぞ

亭主罷り出で 主「御吸物を申付けましたが、此方よりなぞをかけますから御判じな  
され、若しあがられ下さるべし」と云へば 客「宜ふ御座いませう」と云ふと、然ら  
ばと取り出し 主「是は五十四郡をひとくゝりと申すなぞ御判断を頼みます 客「是  
は面白そうな事、なんであらふ」と大勢思案して知れず、中に一人 客「陸奥で御座  
りませう 主「是は宜ふお判じなされました、サア御吸なされませ、又上げませう」  
と二々茶碗を出し 主「此度は沖中で困る船と申します 客「是は〜別して面白そう

な儀で、イザ皆様御判じなされ」と大勢思案しても知れず、又右の男何うか知れま  
 した様に御座りますが、客間違ひかは存じませぬが、沖中で困る船なれば干潮で御  
 座りませう「主成程左様」と云へば傍の男「〇ア！残念、醬油の味とまでは判じま  
 した、

た  
ら  
ち  
ね

草の名も處によりて變るなり、浪花の芦を伊勢ではまをぎ、東京でよしと云ふの  
 を浪花へ持て参りますると芦と云ふ、又伊勢へ持て参りまするとはまをぎと申すさ  
 うで御座いますから、言葉と云ふものは所々で違ひますもので、土地によりまして  
 極氣の長い御方があるかと思ひますと、又氣の短ひ土地も御座います、先づ上方の  
 お方は幾らか氣が長いやうで、夫れだからお柔和いので、又東京のお方は氣が短ひ



やうで、先づ勇ましいやうで御座います、然う云ふ人が集りましたら、仲が悪いと  
思ふと至極お仲が宜いもので、上方の方と東京の人と御夫婦になつて、誠にお仲が  
よくつて近所の人々が羨ましがつて居りました事が御座います、尤も只今では外國  
の人と日本人と御夫婦になつて居らつしやいますから、別に珍らしい事も御座いま  
せん 大家「八五郎家かな 八」是は大家さん、能くお出なさいました、何か御用で御  
座いますか 大家「八さんは今日はお前に少し相談があつて來ました、他でもないが  
お前一ツ女房を貰ふ氣はないか 八」大家さん御親切は難有ひが、私見たやうな腕の  
ない大工、自分一人喰ふのがやうくで御座いますから御断り申します 大家「八さ  
んや夫れは大變に違ふ、世の例へにも一人口は喰ねエでも、二人口は喰べられると  
云ふじやアないか、是非一人貰ひなさい 八」私の様な貧乏人の處へ來る人がありま  
すかネ 大家「あるとも、幾ら貧乏してもお前さんの心持が宜ひ、第一親をアノ通り  
大切にしてみ送り、實に近所ではお前の事を孝行大工と評判だ、家の婆アさんなん

ぞはお前を大層褒て居ます、宜ひから女房を貰ひな 八「私共へ来る女はマア何う云ふのが参りますネ 大「年は十八歳で、容貌は十人並に優れて居るし、一通りの教育もあるのだ 八「へー其奴は不思議だ、餘り宜すぎますが、何か少しは變つた處がありましやう 大「夫れは少し變つた所があるサ 八「ア判つた夜になると人の寢息を窺ひ、首を長くして油を舐めるのではありませんか 大「馬鹿云ふナ、化物なぞを世話をするものか 八「夫れでは人の顔を見ると無暗に踊るのではないかしらん 大「そんなものじゃアないヨ 八「ア判つた、寢小便するのだらふ 大「そんなものを俺が取り持か、別に變つて居ると云ふ程でもないが、其娘の親は京都の或る御公卿様の御家來であつたので、何うしても其子だからな、少し言葉が叮嚀過るとは結だ 八「何んですつて、夫れではお公卿様の御家來の娘だから言葉が叮嚀過るとは結構で御座います、私などは他人に挨拶をする事も知らねエ位のだ、其女房が言葉が叮嚀は有りがたいや、マア何んな事を云ひますネ 大「然うサ、俺が此間途中で

會たら叮嚀にお辭儀をして、今朝は土風劇しふして小砂眼入す、と云つたヨ 八へ  
 「夫れは火焼の禁厭ですか 大家」然うじやアない、能々考えて見たら、今朝は土風  
 が劇しいから砂が眼へ入つて困るだらうと云ふのだヨ 八「お前さんも大家さんとも  
 云はれる人だ、何とか云つてやりましたらふ 大家」夫れは俺の事だ、一寸傍を見  
 ると道具屋があつた、其處に箆筒と屏風があつたから、逆さまにすたんぶべうと答  
 へたら變な顔をして娘が往つてしまつた 八「成程ソイツは面白い、私しならばりん  
 七、くりとふと云つてやるヨ 大家」夫は何んだ 八「徳利と七輪を逆さまにしたのだ  
 ・大家」成程是も面白いな 八「然う云ふ娘なら結構で御座いますから早速に貰つて下  
 さい、今直に 大家」馬鹿を云へ、人間の一生の大禮だ、先づ吉日を撰んで貰ふのだ  
 八「吉日と云ふのは何處で判ります 大家」曆を見ると直に知れる 八「曆なら此處に  
 あります 大家」何れ見せな、成程今日は婚禮には吉日だ 八「明日は何うです 大家」明  
 日は然うさなア 八「明後日は 大家」明後日も然うさなア 八「思ひ立たが吉日だ、是

非今夜連れて来て下さい 大家「よし夫れでは彼の子も今では或る家の世話になつて  
 居るのだから、先づ當分客分として家へ置くが宜い、夫れでは善は急げと云ふから  
 晩に連れて来るから、家の掃除をして置き、然うして細く長く蕎麥でも取つて置き  
 な、御酒と肴も少しばかり取て置き、夫れでは連れて来るからの、左様なら 八「難有  
 ふ御座います」是から直に湯へ行くやら、髪結床へ行くやら、酒肴を誂へるやら、  
 歸つて参りました 八「ア、難有い、アンナ親切な大家さんはないなア、今日は  
 早く日が暮れば宜ひに、天當何をして居やアがるのだ、オツと御苦勞、モ、酒  
 と肴は来るしと、家は此の通り掃除をしてしまつたし、是からはお嫁さんが来るば  
 かりだが困るなア、今日に限つて日が馬鹿に長い、モ、御隣家のお内儀日は未だ暮  
 ませんかね、弱つたなア 内儀「若し八さん大層劇しさうですが何か御取込でもあり  
 ますか 八「別に取込と云ふ程ではありませんが、今晚此長家へお嫁さんが来るの  
 で 内儀「イ、エ妾は少しも知りませんが何方へ来るの、見渡した處では獨身者はお

前さん許りじやアありませんか 八「實は私の家へ嫁が来るので 内儀「アラお芽出度  
 ふ、少しも知りませんでした、何方から来るのです 八「夫れが其のエー方角は東か  
 ら西の方へ少し寄つて辰巳の方へ觸て居ります 内儀「何だか妾には少しも判りませ  
 んヨ 八「然うだらう私にも判らない 内儀「まア〜お芽出度ふ御座います 八「眞實  
 に何をして居やアがるのだ、遅いなア、先づ是れからコン爐でも出して火を起して  
 置ふ、何うだイお嫁さんが来て何と云ふだらう、オヤお前さんの様な粹な人は訖度  
 浮氣をするヨ、浮氣をすると妾は承知爲ないヨと云ふから、俺が馬鹿を云ふなエ、  
 何んで浮氣をするものか、汝こそ怪しいと云ふと、オヤ妾が何んで怪しいの、サア  
 其理由を聞きませうと来ると、俺だつて賣言葉に買言葉だ、此頃は變だから云ふの  
 だと云ふと、女房が涙をこぼしながら、何んでお前さんはそんなに邪見だらうと来  
 るから、邪見とは何んだと云ふと、女房が邪見だから邪見と云つたが何うしたの、  
 皆な或る人からお前さんの事は聞たワ、何に聞たつてサア誰から聞たか夫れを云へ

大方隣家のお熊婆アから聞いたのだらう、總たいアノ隣家のお熊婆アが氣に叶ねエ、  
 夫婦の仲へ水をさす奴だ、アノお熊婆ア、サア承知しない、熊ハイ御免なさい、先  
 刻から聞て居れば妾が何時其夫婦の仲へ水をさしました、サア其理由を聞させませう  
 ハヤア是は驚ろいた、未だ女房は來ないのだ、來たらこんな騒ぎになるだらふと  
 云ふので、夫婦喧嘩の稽古をして居るので、熊何んたい馬鹿くしい、靜かにして  
 おくんなさいまし、ハハハ、此奴は驚ろいた迂濶獨言も云へねエ、だが此間留  
 の所へ俺が往たら、夫婦であとり膳で飯を喰て居て、俺の事をオイ一人ぼつちで何  
 處へ行くのだと云やアがつたが、明日から二人ぼつちになるのだ、宜ひなア八寸を  
 四寸づゝ喰ふ仲のよさで、俺此方の、女房向ふの御とり膳だ、俺は男だから丸太棒  
 の太い箸に、銀のツボンを穿せ、五郎八茶碗で鬼の金齒の様なお飯で、奈良漬の香  
 の物か何かで女房は柔しいから象牙の箸に銀のバツチを穿せ俺は男だから威勢よく  
 ザク／＼のガチ／＼と飯を喰ふと、女房は柔和いから、サラ／＼のチンチロリンと飯

を喰ふサク／＼のチンチロリンと来ると、又サク／＼のチンチロリン／＼と  
 夢中になつて踊り出すと隣家では驚ろひた 女「若し／＼八さん、何うかなすつたの  
 大變な騒ぎですネ 八「困るなア、兩隣家で格氣をやかれては困る、へい今ネ飯を喰  
 ふ稽古をして居ります所で、壁一重で一々世話をやかれては困るなア、夫れは然ら  
 すとアノ大家さんは何をして居るのだ、モ一連れて来さうなものだ 乞食「ハイ御免な  
 さいまし 八「オツと御出なすつた、何うかお上りなさいまし 乞食「ハイ有難ふ、妾  
 は長々亭主に病はれまして難溢致します、何うかサ、ラカタワシをお買なすつて下  
 さい 八「何んだイ乞食なんぞが来やアがつて、そんな物は入ものかい、いめエまし  
 い奴だ、オツと来たく、アノ足音は確に駒下駄と草履の足音、駒下駄は大家さんで  
 草履はお嫁さんだ、何れお迎ひ」と戸を排けて見て 八「何んだのりやの婆アさんが  
 下駄と草履と片跛に穿て焼芋を買ひに往つたのだ、何んだ馬鹿／＼しい」と氣を揉で  
 居ります、所へ彼の大家さんがお嫁さんを連れて遣つて参りました 大齋「八さん、

家かエ 大家「サアあの子や此方へお上り、遠慮には及ばぬから、偕て八五郎さん此の子がお前さんのお内儀になるのだから、能く可愛がつて遣つて下さい、千代も八千代も友白髪の末までも、ア「芽出度く、私は是でも開きにするヨ、今夜は些と據ころない用事があつて直に是から出懸るのだから 八「若し大家さん、何程貧乏人の嫁入でも餘まりお手輕過るヨ、モ「些とおつぼみにして下せエ、アラモ「往つてしまつた」跡に二人はもぢくして居りましたが、八五郎はやうく頭を撫ながら 八「アノお子さん、私は大工の八五郎と申しまして、へい宜しくお頼み申します、今に俺の友達が遊びにでも來ると、今度お前女房を持たが名は何んと云ふのだと聞れると困るが、お前さんの名は何んと云ふのですか聞しておくんさい 鷺「自分が事の姓名を問ひ給ふや、父は元京都の産にして姓は安藤、名は啓藏、字は五光と申せしが、我母三十三歳の節、或る夜たん鳥の夢みして孕めるが故に、父母ねの體內を出し時は、鶴女と申し侍りしが、成長の後是を改め、清女と申し侍るなり 八「何



んだいまるで法性寺の入道前の關白太政大臣と云ふ様な名だア、待ておくんなさい  
 俺が今書附まするから、一々然らう云つておくんなさい」と是から硯箱を出して假名  
 で書始めましたが、やうく本が一冊出来上つた。八「是は驚ろいた、本が出来上つ  
 たぞ、先づ俺が仕事から歸つて来て、湯へ行くのだから手拭を取つてくれと云ふの  
 で、お前さんと呼ぶのだ、一番稽古をして見やう、オイ今歸つたヨ、家のアノエ  
 と居ないかな、アノ自ら事の姓名は、父は元京都の産にして、姓は安藤名は啓藏、  
 字は五光と申せしが、我が母三十三歳の節丹鳥を夢見てしより孕めるが故、父母の  
 エ一體内を出し時は、エ一鶴女と申して侍るなり、鳥渡手拭を取て呉れ、叶ねエや  
 夜の短い時には名を呼で居る内に夜が明けてしまふ」先づ是から御盃が濟みますと  
 お嫁子さんは八五郎さんの前へ兩手を突きまして、嫁「ア一我君、八「是は驚ろいた  
 大工の我が君か何んだイ、嫁「千玉千だんに入つて是を學ばざれば、金たらんど欲す  
 八「何んだイ金太郎を何うとかしらつて、嫁「借老同穴の契相濟む上からは、天へ登

れば比翼の鳥、地に入らば連理の枝、必ず變ずること勿れ。ハ「何んだイ蛙を胴中からひつちぎつたつて。嫁「ハハア。ハ「マア宜ひや」と夫より枕に就きました。夜が明ますとお嫁さんは直に飛起て夫に寝顔を見せるのが女の恥で御座いますから、悉皆身じまいを致しまして、又々八五郎の前へ手を揆へ。嫁「ア、我君、米の在所は何處に侍る。ハ「よねの在所と云ふのは。嫁「米かは人はみ虫の事。ハ「厭だぜ、何んぼ獨身者でも虫なんぞは居ねエヨ。嫁「人はみ虫とは米の事。ハ「米が符帳で云つては叶ねエ、其臺所の隅にあります」と教へますと、直にお米をとぎ夫れより汁を拵へると、實が無いから困つて居ると、恰度此の裏へ入つて參りました。八百屋さん。八百や「エ、葱はよしかネ、岩槻葱はよしかネ。嫁「コリヤア、門前に市を爲す賤の男の子、賤の男の子八百や「へい、是は驚ろいた、しづのもの子は私の事ですか。嫁「まろじヤア八百や「へい買ておくんなさいまし。嫁「汝が携へたる白根草は錢一ツけつ文に何程ぞや八百や「今度けつだと云ふな、一把五文と御座います。嫁「何に五け

つとや、我君に召すや召さずや伺ひ奉つる間、垣の關根に控へて居じやア八百ヤ「ハ  
 アイー是では恰で芝居だ 嫁「アいら我君 八「聞て居たヨ、俺の腹掛の隠しにあるか  
 らお錢を出して買ておくんなさい」と葱を買ましていよ／＼御飯の支度が出来上り  
 ました 嫁「アいら我君／＼ 八「困るなア、俺の友達は皆な口が悪いから、我君の八  
 公なんて綽名をつけられるヨ 嫁「我君日も東天にましましては咳嗽洗面を濟せられ、  
 神前佛前等へ御燈明を備へ、禮拜あつて後、朝飯をすゝられて宜しからんと存じ奉  
 つる、恐惶謹言 八「何に飯を喰ふのが恐惶謹言なら、酒をのんだら酔てくだんの如  
 しだらう。

味噌藏留守宅の大宴會

是は極くしよい御方の御話を一席申上げます、儉約と申すものは誠に宜しいもの

で御座いますが、此の吝嗇と申すのが御座います、經濟とか節儉とかは爲なければ  
 なりませんが、きたなく稼いできれいに遣へと、昔の人が能く申しますが、自分の  
 贅澤を慎んで人に慈善をするのは誠に結構で御座います、自分喰はず他人にも喰せず  
 と云ふのは誠に困ります、或る御大家の旦那様が大變な吝嗇で、先づ奉公人が十人  
 あるのを、一人に付一ヶ年に百圓と見る、一人今年は廢したら百圓儲かつたから、  
 翌年には五人減して五百圓儲かつた、又其翌年は五人廢して彌々千圓助かる、今度  
 は妻君に暇を出して見る、餘程金が貯つたから、札を積で置いて、今度は俺も贅なも  
 んだからと、トウ／＼自分も首を縊つて死でしまつたと云ふ馬鹿が御座います、茲  
 に麴町に客屋の客兵衛さんと云ふ方が御座いまして、名は其人の態を現はすと申す  
 通り、馬鹿しわんぼうで、五十二歳になつて未だ御家内もなく、獨身者、御商賣は  
 味噌屋で奉公人も七八人居ります、或日の事番頭の佐兵衛さんが、旦那の前へ参り  
 まして 焦へイ旦那様へ申上げます、先達より御親類方もア／＼やつて種々御心配遊

ばす通り、何時までも貴下お一人では、第一此の御身代を護るお方もなく實に御先祖へ對して御不孝で御座いますから、是非一人御家内を御貫ひ遊ばしては如何で御座いませう。且、オイ番頭さん、御前は他人の憂ひを喜びなされるな、是れ能く聞きなさい、人間一人殖ると年分には幾何違ふと思ひなされる、第一是れ禮と云へば親類へも打棄ても置けますまい、然うすれば其入費は何處から出ますエ、嫁が來れば飯を喰ふだらう、又子供も出來て見なさい、蕙の上にも三貫と云ふが、夫れは昔しだ何う儉約を爲たつて直に十圓やそこらはかゝらうじやアなるか、小兒が乳を吸ば家内が大喰になると云ふ事位か、何程不經濟のお前さんでも判りさうなものだ、夫れく物入は段々多くなりませう、誰が何んと云ふとも決して女房などは持せせん、其つもりて居て下さい。佐、夫れは成程御最もでは御座いますが、夫れは大いなる御心得違ひで、第一に御家内が出來ますれば、年分に何の位のお徳があるか知れません。且、何に徳がある、夫れは承りませう、何う云ふ徳があります。佐、御家内は内實と申し

まして、御家の寶で旦那さま幾ら御一人で御働さになつても、夫れはお目が届きま  
 せん、貴下が店に御出になれば御臺所や御奥で贅な事を致しますし、又貴下が臺所  
 や奥にお出になれば、御店に贅が出来ます。且夫れは大變、先づ臺所の贅と云ふの  
 は、佐夫れは飯焚の權助が飯を焚ましても、焦が出来れば握飯にして喰たり、一寸  
 澤庵を出しても頭や尻の方はどん／＼捨ると云ふ始末。且やれ／＼情けない。且夫  
 れが御家内様が臺所に居れば御自分の身代が可愛いから、飯を焚にも萬事氣をつけ  
 まして、焦が出来れば自分で召あがり、釜に飯がついて居れば取つて置いて干飯にす  
 ると云ふ、澤庵は其通りで決して捨る杯と云ふ事は御座いません、又奉公人の着物  
 や何かも家で御仕立になりますれば、外へ金は出ませんし、旦那様が奥に御用のあ  
 る時には、御家内が店へ御出になれば是程結構な事は御座いません、其毎日の御徳  
 を年分に積んで御覽なさい、豪イもので御座いますぞ。且成程夫れも徳用だ、若し子  
 供でも出来ること叶ないから、私は女房を貰つても寢所は別々にしますが、宜しいか

夫は旦那の御勝手に御座います 且宜し夫れでは一人相當の者があつたら貰ほふが成る丈ケもらふなら容貌は何うでも宜ひから、餘り飯を喰さうもない、壯健で衣類や金は成る丈ケ持て来る奴を貰ひましやう」と承知を致しましたから、番頭さんは親類へ此の事を話しをすると、恰當幸ひ御殿下りの女中がおりまして、いよく吉日を撰んで御嫁入、客兵衛さんは五十二歳で始めて女房を貰ひましたが、一年になつても一ツ寢を爲ないと云ふ位のだが、頃しも十二月の末の方朝からの雪模様、ビウ／＼風の雪、チラ／＼と來ましたので、流石の客兵衛寒くつて寝られない、弱つたなアア寒いと、其晩何う考えたか御家内の部屋へ参りまして、夜と共にお話をなさいました、スルと或日の事御家内が旦那の部屋へ参りまして 女房若し旦那様一寸申上げますが、妾は此頃は少し酢物が喰度になりましたから御断り申して置ます 且何んだい酢ばい物が喰たい、贅澤を云ひなさんなよ、大方すしでも喰やうと云ふのだらう、する物が喰たければ酒屋へ往て酢でも買て飲なさい 女房「イエ然うじ

やアないので、妾は此頃見る物を見ませんので、旦那んだ見るものを、大方芝居か  
 何か見たいと云ふのだらう、夫れは 女房「イエ妾は月のものが止つたので、旦那何處  
 へ何が止つたのだ、判らないなア 女房「貴郎こそ、妾はお腹へ小兒のが出来たので  
 旦那何に虫か虫なら熱湯でもかけてやれ 女「困りますねエ、お腹へ赤坊が出来まし  
 たので、旦那夫れは御芽出度何方の家へ女「妾のお腹へ旦那何んだお前の、ウーン」と  
 後ろへ倒れた、御家内は驚ろいて 女房「若し貴郎、確かりなさいまし」と云ふ騒ぎ  
 旦那「エー大變な事になつてしまつた、お前さん恰で詐欺見たやうな人だ 女房「アラ  
 他人聞の悪い、何んで妾が詐欺で御座います 旦那「ダツテ小兒は決して出来ないと受  
 合たではないか、是れ番頭を呼べ、オイ番頭、佐兵衛早く来て下さい 女「へい何か  
 御用で御座いますか 旦那「何か御用處ではない、大變だヨ、トウ／＼女房が腹に子が  
 とどまりましたよ 女「何か御洒落で御上手さまで 旦那「洒落所ではない、家内が赤坊  
 が出来ましたとよ 旦那「夫れは何より御芽出度事で、益々御家御繁昌で御座います、



御喜びを申上げます 且馬鹿、何かお芽出度のだ、御前さんは人の愛ひを喜ぶ人だ  
 小児が生れる節になれば薙の上から三貫處か物入は大變だ、第一私が貰はぬと云ふ  
 に、お前さんが無理やりに勸めて貰つた家内だからネ、此の産の入用はお前さんの  
 給金で差引ますから其つもりで御出なさい 佐何う致しまして 且イヤ決して遠慮  
 爲なさんな 佐誰が遠慮する者があるものか 且オイ佐兵衛どん、お前夫れが苦し  
 ければ何んとか産の物入のない工風をしてもらいたい、サア返答を爲なさい 佐驚  
 るさましたなア、マア旦那コゝ爲さいまし、御新造様を當分小梅のお里へ御預けに  
 なりまして、身二ツになつたらば御引取爲さいまし、御里方では初孫さんの事です  
 から、御両親とも御喜びになりました、屹度お世話をなさるに極つて居りますから  
 且「成程是は宜い工風だ、夫れでは早速實家へ家内を預ける事に致しませう」と  
 夫れより御實家へ御預けになりましたが、月日の經のは早いもので、最早御新造様  
 は月が満ちして、今虫氣づいたと云ふので、小梅の御實家から夜分態々小僧が客屋

の家へ御迎ひに参りました。小僧へイ御免なさい店の者へイ入来しやい、味噌を上  
 げますか。小僧、イエ買物では御座いません、小梅の萬屋から参りましたが、只今此  
 方の内儀が赤坊さんが生れさうで御座いますから、旦那に直に御出なすつて下さ  
 いまし、御奥へ宜しく願ひます店の者、少しお待ちつて、へイ旦那申上げます、只  
 今小梅の御宅から、此方のお内儀が虫氣ついたから直に旦那に入らしつて下さいま  
 すと御使が参りました。旦那夫れは大變、いよく三貫が近づいて來ました、佐兵衛  
 どん何うしませう。旦那夫れはお芽出度事で、直に旦那様には先様へ御出に成りませ  
 んと惡ふ御座います。旦那困つたなア此の寒いのに、小僧さんや家へ歸つて然う云つ  
 てお呉れヨ、モ、少し我慢しろと云つて、口へ雑巾でも押し込で置けと云つてくん  
 ナ。小僧馬鹿を云つては叶いません、七輪の口じやアあるめエし。旦那御宅は私が確と  
 御留守を預かりますから早くお出なさい。旦那夫れでは據ころない往つて参りますが  
 皆なはモ、飯を喰ましたか。皆へイ有難ふ御座います、皆頂戴致しまして。旦那夫

れでは長松や其飯のお鉢を持って来い、封印を附て置くから、コレ／＼然う火を起し  
 ては叶ませんヨ、何に寒い、寒ければコゝしなさい、上の梁から細い繩を下げて、  
 然うして大きな石を結いつけて置いて、其下に座つて居れば今此繩が切ると自分の頭  
 が碎けると思ふと、脇の下から冷汗が出来ますから、よく／＼物の費へのない様に頼  
 みます、私は今晚小梅へ泊るかも知れませんから、夫れにこんな風の吹く晩には火  
 の元を大切にして呉れヨ、これ長松貴様は供に行くのだ、少しでも先様で御馳走に  
 なれば幾何か内の爲になる、若し小梅の小僧さん、御待遠ふさま、サア往きませう  
 呉々も俺が居ないと云つて炭などを無暗に起してくれないやうに、宜ひかな、大將  
 しふ御座います、御ゆつくりと往つていらつしやいまし、皆／＼何うだい皆な、大將  
 はトウ／＼出懸けて往つた、珍らしい事があつたものだゾ、オイ皆な此處へあつま  
 れ、少し相談があるから、オイ梅どん、お前は先づ此の店では番頭さんをぬいては  
 一番古いから何んとか今夜一ツ遊ぶ工風をしねエ、舞宜ひと、且那は明日の朝

でなければ歸らないと極つて居るから、今夜皆なで一ツ喰物を喰い、飲たいものは  
 飲むべイ、棧皆なの前だが私は此處に十六年居るが、魚一疋喰た事がない、恰度私  
 が十一の時だ、頭へ白雲が出来て其時に鱈を一疋買て、頭へころがして呉れたさ  
 だヨ、夫れでも旦那は貴様に魚を買てやつたと思にかけて居るから恐ろしい位だ  
 棧コレ一同の者ども、何でも今飯焚の權助を買物にやるから、喰たい物を神妙に  
 申し上げる、いろ／＼書附にするから、〇へイ源兵衛からお願ひです、お汁粉に雑  
 養あべ川にゆであづき、を願ひます、棧、オイそんなに一人で喰ふか、馬若し残つた  
 ら取て置てチビ／＼喰ふヨ、棧、客な事を云ふナ、今夜は御大名だ、サア／＼跡は何  
 んだ、棧、へいおそばにてんぶらで、玉子どじ、跡はおかめにひつぽこ、棧、私は鰻、  
 〇私は焼芋、棧、釜小僧は定めて甘味だらう、小僧、此の岩松は一寸あつさり、あさ  
 し身に茶碗で、願はくば別嬪の御酌を願ひたい、棧、跡は何んだ、竹、私は能く横町の  
 豆腐屋の前を通ると鼻へブンとくるので、是非喰ひたいと思つて居ました、アノ木

の目でんがく是非願ひたい 梅ヨシ、夫れでは番頭さんに一ツ願つて見やう」是か  
 ら帳場に遣つて参りますると高慢な顔をして番頭佐兵衛が、御年は四十五歳、頻り  
 に算をはじいて居る處へ 一同「へい番頭さんに御願ひが御座いますので、今夜幸ひ  
 に旦那様が御留守故に、鬼の居ない内洗濯で、一ツ一同の者が飲んだり喰たり致した  
 いと存じますが、どうか御許しの程を願ひます、如何で 番何んですエ、假初にも  
 店を預かる所の番頭へ對して怪しからん事を、決して然う云ふ事はなりませんと云  
 ふのは表面、一ツ遣らかさう 一同夫では毎時番頭さんが湯の歸りに寄て居る清元  
 の師匠を招で來ませう 佐是は驚ろいた、能く知つて居るナ 權夫れはチャンと心  
 得て居りますから、兜を脱げ 佐何んだイ是は權助さん 權サア往つて來るべい、  
 佐毎時は呼でも中々返事もしないのに、直に返事は是は驚ろいた、權助や此番附  
 にある通り逃へて、横町の酒屋へ往つて酒を一斗ばかり、夫れから清元の師匠を知  
 つて居るだらうから、旦那の居ない譯を能く判る様に能く理由を云はないと心配す

るから「宜ふ御座いますヨ」佐「早く往つて来てお呉れよ」眞「ハイ、往つて参りま  
 すと」、權助は直種々ど誂物をする、其内にドン／＼誂物が繰込んで来る、大  
 陽氣になつて来る、佐「オイ火をドン／＼おこして、飯も澤山焚て若し餘つたら近所  
 へ遣つてしまふから構はないから」○「へい今晚は、御芽出度ふ、承まはりますれば  
 此方の旦那さまが珍らしく泊りに居らしつたと云ふ事で、佐「頭能く知つて居るね、  
 眞「夫れは先程旦那が、今夜留守にするから何分頼むと被仰つて、御座いましたか  
 ら、今晚あたりは大方御樂しみと存じて御手傳ひに参りました、皆々「夫れは御苦勞、  
 オイ酒がついたら早く此處へ出しな、燈火が暗いから百目懸けの蠟燭を十本ばかり  
 つける」と云ふ騒ぎ、師匠「へい今晚は有難ふ、今ネ御迎ひで、實は嘘ではないかと  
 阿母さんが心配をして居ましたの、然うですつてねエ、此方の御内儀が赤さんが生  
 れるつて、アラお芽出度事、皆さん今晚はありイ」、と是から三味線が出る、始め  
 の内は爪弾かなんかで近所へ遠慮して居りましたが、追々酔がまわると各々隠し藝

が始まる、頭が葉唄を唄ふと、源兵衛どんが尻ふりを踊る、サア〜陽氣に惣踊り  
 かつぼれが宜ろふと番頭佐兵衛さんが禿頭、鉢巻尻つばしより、藝の無いものは何  
 か喰ながら井鉢を叩くと云ふ處へ、小梅へ参りました旦那様は何うも御宅が氣に  
 なるので、子僧を連れて歸つて参りましたが、何んだか自分の家の近所で大變な騒  
 ぎ 旦那ハテナ、此の夜更に何處の家だかアノ騒ぎ、世の中には随分慾を知らない  
 馬鹿な奴もあるものだなア長松 長ハイ左様で御座いますが、今夜は馬鹿に寒う御  
 座いますねエ、オヤ〜何んだか家の店の様ですぜ 旦那成程、是は大變、何んて  
 馬鹿な眞似をして居やアがるんだらう、と旦那は大いに怒り戸の節穴から覗ひて見  
 ると、番頭が先立で店の者残らず師匠の三味線で頭の唄で惣踊り、是は呆れた……  
 旦那「オイ早く此處を開ける」、と戸を無暗に叩くと、家では氣が附ず、サアヤレヤ  
 レ、吞で喰て騒げ〜、何うせ此の家は近々に潰れるのだ 旦那アレあんな事を云  
 つて居やアがる、是れ俺が歸つた早く開る店の者「オヤ大變大將が歸つて來た、番頭

さん踊る處じやアない、旦那が歸つて來ましたヨ 佐エ、何に旦那が」と一同大  
 うろたふ、師匠を戸棚へ隠す、頭は臺所へ逃込む、權助は寝たふりをする、其内に  
 番頭さんは據ころなく戸を開けると、旦那は呆れて口もきけず、只々白眼つけて居  
 りますると 佐コレはくエー旦那様早いお歸りで、何ともエー申譯が御座い  
 ませんで、御生れの御子様は女のお子様ですか、又男の子様で御座いますか、實に  
 お芽出度事、實は今晚一寸前祝ひを致しました事で、遂へい、何とも申譯のない次  
 第で 旦那イヤ小言は云ひません、店の者一同暇を遣ります、オイ番頭さん、い  
 年をして何んだイ其姿は、鉢巻を取なさい、オイ頭おまへさんも何にも隠れるには  
 及ばない、大きに御苦勞さまで、恚ふ云ふ風の吹晩には若し火事でもあつたら何う  
 する」と小言を申して居ります處へ、先程横町の豆腐屋へ詔らへて置きましたで  
 んがくが焼て参りました豆腐やへい御免なさい 旦那へい何誰で豆腐やへいお待遠  
 さま焼てまゐりました 旦那ナニ焼て來た、何處から豆腐や横町の豆腐屋で……



旦那「何に横町の豆腐屋、夫れは大變、何の位の焼ました豆腐や」只今五六挺、跡から追々、旦那「何に五六町で、跡から追々とは情けない」、と潜り戸をあけると、でんがくの味噌の匂いが旦那の鼻へブン、ヤレ大變、何うく味噌蔵へ火が這入つた。

### 若旦那氣質

落語家は世上のあらで飯を喰ひ、講釋師見て來た様な嘘を吐と云つた人があります、誠にも口の悪い方で、是は誰が云つたと云ふと、川柳と云ふ先生が云つたのださうで、川柳と云ふ人は食客の事などを大層悪く云つて居ります、「食客嵐に家根を這まわり」「食客雨だれ程の戸を叩き」、是は柔和食客で、まだおとなしいのがあります、「食客三杯目にはそつと出し」、中にやけなのがあります、「食客出さば出る氣で五杯喰ひ」是は亂暴で御座います 主人「若し若旦那一寸此處へ御出を

願ねがいたい。若わ旦那だんな「ネイヨ、何なにんでげす。主ま私わたしはネ、貴あな下したにこんな事ことを云いひたかアな  
 いや、若わ私わたししもそんな事ことなら聞ききたかアないや。主ま未まだ何なにんとも云いはないヨ。若わ何なに  
 うれで私わたしにも判わからない。主ま若わし若わ旦那だんな、貴あな下したも何いつ時ときまでも私わたしどもの二階かゝいにくすぶつ  
 て居いてもつまりますまい、何なにか一いつツ御おん考かんえなすつては如何いかで御ご座ざいます。若わ夫たむはお  
 前まへさんに云いはれるまでもない、私わたししも一いつツ此この家うちを退たい散さんしやうと思おもつて居いるので、  
 先まづ立たつ鳥とり跡あとを濁にごすなと云いふ事ことがあるから、何なにうせ此この家うちを出で懸かけるには、せめて千兩せんりやう  
 もお前まへさんに上あげ度たい、いろくど考かんがへて居いるので。主ま若わ旦那だんな志こころざしだけで澤山たくさんで  
 御ご座ざいます。若わオいお前まへは私わたしを馬鹿ばかにして居いるネ、私わたしが一日いちにち商あきなひに出でると千兩せんりやう儲たくわ  
 かるからおかしいやア。主ま何なにんな事ことをなさるので。若わ先まづすし屋やだネ、私わたしのすし  
 やは芝居しばいが、り、お前まへも芝居しばい好好きだから知しつて居いるだらう、煙草屋たばこや源七げんしちの拵こしらへた淺あか  
 黄あうの手甲てつこうに脚絆きゃはん、此この顔かほへおしろいをべつたり塗ぬるので。主ま其その面つらへおしろいをぬるの  
 ですか。若わお前まへは私わたしを馬鹿ばかにして居いるネ、其その面つらとは何なにんだエ、お前まへは始し終つひ私わたしを

見限つて居るから醜な男に見へるが、私しの善い男の證據は往來を歩行と、女が嬉しうな顔をして皆な見るぜ、主、夫は見ますとも餘程とほけた顔だもの、若、私しがあ囃子を連れて、底拔屋臺で先づ家を出ると、木の頭らでチロン／＼と拍子木が鳴ると、鳴物が狂言格好と云ふので太鼓がテンド、テンド、主、若し若旦那睡がはねますヨ、若、是は失禮、遂太鼓がはねまして、大陽氣で繰出すと、さる御屋敷の御物見下へ來ると御物見の窓から御女中が大勢で、御簾の内から覗く、女中が若し梅浦さん、何んと善殿子では御座りませんか、女、ホンにまア、と評判をするが、お前の前だがア、女が御簾の内からコゝ見る處ろは實に宜ひものだ御話しが他へそれて濟ないが、先達、私が御湯へ行く途中で、或る窓下へ來ると、窓の簾の内から色の白い女がコゝ私の姿を見て居る様だから、私の方でも別に用もないが、其の窓下を三十六度通つて、終に能々傍へ依て覗くと、女の顔ではなくつて白鳥の徳利の中へ梅が活てあつたから可笑いや、主、何んだイ馬鹿／＼しい、若、夫れから先刻の話の續きだ

能くお聞きヨ、御殿の御女中が云ふには、姫君様が御退屈で御在遊ばすから、アノ  
 商人を呼び入れて御慰みに御覽に入れたら如何で御座いませうと、御年寄の路芝さ  
 んと云ふお婆さんに相談すると、いよ／＼其商人を御庭へ通せと云ふ事になると、  
 鳴物が替り早渡りとなる、テレンガ／＼ドンドコドンと繰り込で、いよ／＼是から  
 しやぎりがあると、其處へ一人の御家來が出て来て、コリヤすし屋、すしは何う云  
 ふのを持って居るか、物語れよ、と来るから、俺が直に義太夫だ、物語らんと座を構  
 へと来るだらう、若旦那一寸待ておくんなさる、お前さん義太夫は語らない方が  
 宜ひヨ、若何故、若何故もないもんだ、お前さんは義太夫は餘り巧妙は無ぜ、若オ  
 ヤ御前私の義太夫を聞た事があるかエ、若ありますとも、此の十五日の晩に向ふ裏  
 の仕立屋の二階で、お前さん義太夫を語つたらう、若、ア一語つた、アノ時は私の十八  
 番三十三間堂と來たのだが、近所の評判は何うだい、遠慮なく聞してお呉れ、若近  
 所の評判はかたなし、アノ義太夫は目へしみるとサ、夫にライオンの聲がするとサ、

人間がまア何うしてあんな聲が出るだらうと云つて居ました、アノ時にのりやの婆さんが熊の膽を持って仕立屋の家へ駆込で、アノ貴下の家御二階で御主人が大層苦しさに呻吟て居る様ですから、早く此の熊の膽をお上げなさいと云ひましたぜ、若夫は少し驚ろいたが文句を考がえて置たから聞ておくれ、何う云ふすしを持って居るか物語れよ、と向ふが云ふから、私しが直に物語らんと座を構へサ、借もつけたるすし桶の中に一と際すぐれし丸づけ、流石の芝海老、あじ、さより、蛤つけて、「オイ」握り出すと、私が熊谷の陣屋をもじつて語るに、先方が威に堪へてしまふ、コリヤすし屋、すしは皆求めて遣はすが、其海苔巻は一本幾何致すな、と来るから、へいさやう海苔巻は一本五兩で、へいまぐろの醤油づけは十五兩、鯖の丸づけが五十兩、だて巻が百兩で、と云ふ、主大層高價すしがあつたものだ、第一御大名様が海苔巻は一本幾何するなんて云ふものか、若馬鹿云つちやア叶ねエ、御大名だつて云ふヨ、御家來が主人の金を預かつて居るのなもの、云ふとも、コリヤすし

屋皆求めて遣はす、へい左様ならば五百金程頂戴致しますと云ふと、然らば千兩遣はす釣銭は要らんと来るだらう、私も堅氣の商人だ五百兩と云ふ餘計な金は只は取ない、夫丈けの御慰みを御覽に入れるヨ 圭何を見せます 若然うサ、振事を見せてやらうか 若振り事と云ふと踊りじやアありませんか 圭先づ踊だネ 圭夫は廢た方が宜ふ御座います 若何故 若何故もないものだ、お前さん三年跡に深川の八幡様の御祭禮の時に、頭の萬さんの家で踊を踊つて撲られた事を忘れましたかエ、若アゝ忘れた、おまへは能く覺へて居るネ、アノ時は私が生意氣で確に遣り損なつた、アレは憐うなんで、私が頭の家格子から覗く、近所の娘連が五六人で三味線を弾て居たから、私が格子をガラリと排ると、皆が赤い顔をして三味線を隠したから、宜ひじやアありませんか三味線をお弾なさい、私が何か振事を御覽に入れませうと云ふと、豊夫人の顔を見て三味線を隠す位だから、弾はすまらと思ふと、豊圖らんやおせいさんと云ふ子が、三味線を取つてサア願ひませう、と來たから此

方も負ない氣になつて扇を取つて立上ると、夕暮に眺め見渡す隅田川と來たが、私  
 は實は夕暮を能知らないからごまかしてやらうと、夕暮にと來たから、扇を持と一  
 ツぐるりと廻つたが何うだい 主「エライ、手が判らないからぐるりと廻るのは威心  
 若「眺めと來たから又ぐるりと廻つた、又見渡すでぐるりと、隅田でぐるり、川で  
 ぐるり、月にふぜいで又ぐるり、待乳でぐるり、山でぐるり、あれでぐるり、餘ま  
 りぐるり」廻つたので目が暗んで、すしの皿の上へ尻持を搦た、スルと頭が歸つて  
 來て、若「旦那困るではありませんかと云つたから、私が皿に構はないと洒落たら、  
 どうく頭を撲られた 主「夫は宜くないやア、他人の家の皿を毀して洒落を云ふの  
 は悪い 若「誠に濟ない、遂悪からうと思つて洒落たのではない、時の張合で誠に失  
 禮 主「今詫つても叶ません、三年跡の事だ 若「成程、三年跡の鳥のせいだ、夫れか  
 ら先刻の話の續きだ、いろく御慰みを御覽に入れると、御家來が御上から其方達  
 へ御馳走を下さるから、兎も角も此方へ上れと云ふから、御殿へ上り先づお囃子の

連中は次の間で、私一人は一間へ案内がある、一同に酒肴が出る、スルと御殿の評  
 判が大變だ、美しい商人が参つたと女中どもがゾロ／＼と覗きに来る、主誰が覗く  
 奴があるものか、若あるヨ、御當家の姫君が何う云ふ男子であるか、しげ／＼見た  
 いと拔足さし足で御出になり、襖の間より御覗きになると、驚ろいたねエ、忘れも  
 しない去年の櫻時に何時しか此の私を御見染になつて居たのだが、深窓に育つて御  
 出ゆへ恥しいと云ふので、うつ／＼と病つて御出になつた、所へ俺が往たから堪ら  
 ない、恥しいのを打忘れ間の襖をコゝ排て、思はず知らず駈込で、貴郎じゃア／＼  
 やつぱり貴郎で御座んすわいなア、と恚う云ふ様に膝に手を揆く、主ア／＼痛い／＼  
 何んだイ若旦那他人の膝を揆て馬鹿／＼しい、若處で私が學問がある、袖をばツと  
 拂つて男女七歳にして席を同じふせず、貴嬢は御身分があらつしやる、私は構ひま  
 せんが貴下の御爲になりませんから何うぞ彼方へ御退りを願ひたいと云ふと、此時  
 彼方の一室の内當家重役の聲として、不義者見つけた其處動くなと云ひながら、ツ



カト／＼と出て来て私の襟髪を掴んで、扇子を以てポン／＼と打つ、私も頬に障るから  
 コー顔を見上げると、扇を反して私の眉間をトンと打つと、眉間が破れて血汐が流  
 れる、コーなると俺も堪忍袋の緒が切れた、淺黄の頭巾を後ろへ投ると、頭髮は中五  
 分、腕まくりをすると、左りの腕が登り龍、右が下り龍の入墨、主若し若旦那お前  
 さん入墨なんぞはないじやアありませんか、若是から彫ヨ、あげ安座をかゝて、お  
 姫様と家來の面をコー面へ凄みをつけて俺が白睨、主ム、若し若旦那、お前さんは  
 矢ッ張白眼ない方が宜ひヨ、白眼と段々どぼけて来るから、若夫れでも上つ方の前  
 で犢鼻禪を出してあげ安座と來たら驚ろくだらう、主夫れがネ、お前さんの犢鼻禪  
 は餘まり白眼が利ないぜ、若何に犢鼻禪に白眼の利ないのがあるか、何うだイコー  
 尻を捲つたら、成程是は叶ない、私の犢鼻禪は恰で帆掛船だ、お前のを借やう、サ  
 アコーなつたら仕方がねエ、御姫様を俺に呉れサア御姫をくれ、お姫をくれ、主若  
 し若旦那、御姫をくれと云ふと恰でお前さんは赤坊さんの様だネ、若能くお前は他

人の話の腰を折ネ、だが相手が相手だからコト云ふ奴はど、先方で先づ金百兩私の前へ出して、何んにも云はずに是を持って歸れと来るから、何んだ百兩許りの目くされ金要ねエやイ、とボンと足で蹴ると、先方の侍も残念だが相手が悪ひから我慢して二百兩、夫れから鰻のぼりにトウク千兩、何うだい遠慮しないで取てお置ヨ。未だ何んにもないではありませんか、若能々考えたら未だ無いナ、在たら上げやうと云ふ了簡だ、何うだい、主マア、其の志しが可愛いネ、若可愛いければ小遣を貸せ。

魚 賣 人

只今では皆様方が學問が御出来で御座いますから、古の様に慢心をなさる方は御座いませんが、昔は随分四書五經位の本でも御讀になりますと、先づ世界に俺位

ゐな豪イ者はあるまい、無暗に人が馬鹿に見へまして、御自分の御宅は向島邊りへ  
 極閑靜に構へ、四疊半へ丸窓澤山、唐机の上へ孔雀の羽根を立て、書物を堆高く積  
 上げまして、人が表を通ると其の人に聞へる様に熊と大きな聲で、子のたまわく、  
 したるわが君子あり、エー火の玉わく、エーひのたまわくと怒鳴て居りますと往來  
 の人が、何んだイ此處の家では火の玉を喰ふと云つて居やアがると笑つて通ります  
 先づ魚屋さん杯は、生物を持って居りますから先を急ぎます、然う云ふ人をつかまへ  
 ては困らして居ります 魚屋「オー鯛こイ若旦那」コリヤア魚賣人、魚賣人 魚「へい、  
 旦那馬鹿にしては叶ません、夜ばる人なんテ若旦那、コレ魚賣人とは魚を賣る人と書  
 のである、文字暗ければ理に疎し俗物のつべらぼう、韃の向ふ面、徳利に目鼻立あ  
 りと雖ども、只々空氣の通ずるのみ、わん／＼泣ば犬も同前、知らずんば知らずと  
 せよ之れ知るなり、思ふ事云はで駄なん腹ふくるの道理、些と朝飯前に稽古に來  
 イ 魚「何んだイ是は、何んでも宜ひや何か買ておくんなさい 若旦那」然らば魚賣人青

魚イサを持もて居ゐるか 魚イサ「せぬぎよ、夫それは無ないなア、富士見フジミせぬぎやうは後しろ向むかになつて、坊ぼうさんが富士フジを見て居ゐるのだらう 若わ且且然さうではない、青魚アヲイサとは青アヲき魚イサ、鯖まははあるかど云いふのだ、文字暗もんじくらければ理りに疎とし、俗物ぞくぶつのつべらぼう、轆たの向むかふ面めん徳利とくりに目鼻立めはなたちありと雖いども、只々空氣ただただくうきの通つうずるのみ、わん／＼泣なげば犬いぬも同前どうぜん、知しらずんば知らずとせよ之れ知るなり、思おもふ事こと云いはでやみなん腹はらふくるゝの道理だうり、チト朝飯前あさめしに稽古けいこに來こイ 魚イサ「驚おどろいたなア、夫それではせいぎよは御座ございません 若わ且且然さらば白魚はくぎよはあるかナ 魚イサ「何なにんだもくぎよ、木魚もくぎよなんぞはありません、道具屋だうぐやへ往いつて聞きて御覽ごらんなさい 若わ且且木魚もくぎよではない、白魚はくぎよとは白しろき魚イサ、しら魚しらイサはあるかど云いふのだ、文もん字暗もんじくらければ理りに疎とし俗物ぞくぶつのつべらぼう、轆たの向むかふ面めん、徳利とくりに目鼻立めはなたちありと雖いども只々空氣ただただくうきの通つうずるのみ、わん／＼泣なげば犬いぬも同前どうぜん、知しらずんば知らずとせよ之れ知るなり、思おもふ事こと云いはでやみなん腹はらふくるゝの道理だうり、チト朝飯前あさめしに稽古けいこに來こイ 魚イサ「困こまつたなア、夫それでは白魚はくぎよはありません 若わ且且夫それでは海老かいろうはないか 魚イサ「蛙かいらう、エーかゐる

は虫屋へ往つたらありませう 若馬鹿、蛙ではない、海老とは海の老、海老はある  
 かと云ふのであるぞ、エ文字暗ければ理に疎し、俗物のつべらぼう、轡の向ふ面  
 徳利に目鼻立ありと云へども、只空気の通ずるのみ、わん／＼泣ば犬も同前、知ら  
 ずんば知らずとせよ是れ知るなり、患ふ事云はでやみなん腹ふくるゝの道理だ、  
 チト朝飯前に稽古に來イ 魚 旦那宜ひ加減に勘辨しておくんない、魚が腐敗して  
 まいります、夫れじやアかいらうはありませんから 若 そんなら何を持って居るのだ、  
 魚 夫れだから先刻から鱈こいと云つていますから、鱈を持って居ります 若 何にじ  
 らさきを持って居るとナ 魚 ヘイ旦那、鱈がむらさきと云ふのは一寸承はりたいネ  
 若 知らぬとあらば云つて聞せん、文字暗ければ 魚 オット待つた、其文字暗けれ  
 ばの一件はちやんと心得て居ります、むらさきの一件を聞いておくんない 若 其  
 の昔し紫式部と云ふ御婦人が或る時鱈を食さうとすると、傍に居た方が鱈を申す  
 ものは下々の魚であつて、上つ方の食するものではありませんと云ふと、紫式部が

其の時詠だ歌が面白い、日本に渡らせたまふ岩清水皆人毎にまわらぬはなし、と云ふ歌を詠で鯛を食したから、鯛の事をむらさきと云ふのだ。魚成程そんならむらさきを買ておくんなさい。若然らばそのむらさきは十尾幾何致すナ。魚何んだイ十尾と云ふのは、若十尾とは十の事であるぞ、文字暗ければ理に疎し、俗物のつべらぼう、韃の向ふ面、徳利に目鼻立ありと雖ども、只々空気の通ずるのみ、わんく泣ば犬も同前、知らずんば知らずとせよ之れ知るなり、思ふ事云はんでやみなん腹ふくるゝの道理、チト朝飯前に稽古に來イ。魚夫れでは旦那、十の事を十尾ですネ、宜しい、そんなら今までやつこに賣て居ましたが、のならに負て置きませう。若何に奴がおならをしたと、宜しく只今字引をしいて見やう、多分玉編にあるかな、魚何んぼ鯛でも字引をひいても叶ねエ、今まで奴と云ふのは二百五十に賣て居ましたが、お前さんの事だからのならとは二百二十に負て置いと云ふので、文字暗ければ理に疎し、俗物のつべらぼう、韃の向ふ面、徳利に目鼻立ありと雖ども只々空

氣の通ずるのみ、わん／＼泣ば犬も同前、知らずんば知らずとせよ之れ知るなり、思ふ事云はでやみなん腹ふくるゝの道理、旦那チト朝飯前に稽古に來なさい。

發句泥棒

女屋「若し貴郎、又與太郎が辛抱が出来ぬと申して奉公先から歸つて参りました、何うか伯父さんと伯父さんに意見をして呉れと申して参りました、先刻から私が見致しましたも少しも判りません様子故、貴郎發句ばかり考えて居らつしやらないで、少しは意見をしてやつて下さいまし、主人「何んだ意見なんて不風流だなア、まア、此處へ與太を呼べ、與伯父さん今日は、モト辛くつて私には辛抱が出来ませんから宜しく願ひます、主人「何んだ此の馬鹿野郎能く考えて見ろ、奉公と云ふものは辛ひのが當然だ、煙くとも後に寝やすさ敷遣り哉、と云ふ事があるぞ、人間一人

前に成るまでは誰でも一と通りや二タ通りの苦勞ではない、「ぼうふらや蚊になるまでの浮沈み」、「雪の日やあれも人の子楳拾ひ」、第一貴様杯はお母が甘いからだ、「大きなのは母の情や二日灸」「母親の情もあつさ蒲團哉」、であまく育てたから貴様の様な馬鹿者が出来上るのだ、此頃は生意氣になり居つて、用も無いのに變な處を歩行居ると云ふ事は伯父さんがチャンと知つて居るぞ、「青柳や格子あくれば招き猫」と云ふ様な處へ往き居つたり、女湯を覗き居つたり、「襟足は長しゆず湯の糠袋」「紅だけの前髪さしやこぼれ松」だのとやれ「帷子や恥しい程橋の風」と變な處へ許り目をつけて、少しも勉強をしないナ、俺を見ろ若い時からせつくと働いたから、先づ是丈ケの身代で今では忤に世を譲り樂隱居だ、「ゆず味噌や豆な八十以上かな」又「梅の主筆を嚙齒もなかりけり」此の年になつても足も壯健、他人様には「來ないでも宜ひに杖突て御慶哉」と悪口を云はれる位だ、是れ與太郎何故返事を爲ないのだ 女房「モシ、貴郎與太郎はモ、先刻歸りましたよ 主人」何に歸つ



た、夫れでは早く知らせれば宜ひに、何に怒つて歸つた馬鹿な奴、「むツとして歸れば門の柳かなだ」女房「貴郎伺ひますが、今晚も又發句の開きで御座いますか……」

主人「當然だヨ、お前さん達が世話を焼くと五月蠅くつて叶ないから、茶と菓子と湯と火丈ケを氣を附て置いて呉れれば宜ひから、女どももお前も皆な寝てしまいなさい何うせ開きの跡は運座だから女房「ハイ宜しよ御座います 下女「皆さんが御出になりました 主「然うか何うかお通りを願ひます、ヤア是は三與さん、若月大人、かしくさん、琴月さん、雪我さん、衣水さん、すゝめさん宜ふこそ 皆「皆是は横好大人、今夜も御邪魔に出ました 主人「是ヨ、皆な構はずに寝てしまへヨ、締りか縁側の雨戸丈ケ明て置け、庭の櫻へ月が宿る所は又別段だ 女房「皆さま御免蒙ります」是から文臺を置きまして開きが始まり、皆々夢中になつて居ります處へ、庭の垣根を乗り越えて一人の泥棒が忍び込み、暫く櫻の花に見とれて居りましたが、何處から入らうと見廻しますと、幸ひに縁の雨戸が開て居りますから、是からソツと忍び込

み座敷へ参つて、今何を盗もふと新まいの泥棒と見へて、ガタ／＼顛へながらうか  
 かつて居ると、奥の聲が手に取る様に聞へます、發句開き六印の部

年禮やまわらぬ舌は乳母がだす

花袋やまた片言のあめいちり

夕立に洗ひ上げてや富士青し

末子のはゞをさかせる炬燵かな

泥棒先生根が發句が好だから堪らない、ヅカ／＼と間隔た座敷へ遣つて参りま  
 して、襖をソ／＼開けまして、頬冠りをした儘入つて参りましたが、連中は運座  
 の最中で皆な夢中で考え込で青くなつて居る人もあれば、溜息も吐て居る人もあれ  
 ば、頬杖又は腕組で何れ餘り名人の方ではないと見へます 甲「此の櫻は題が廣すぎ  
 て却つてむづかしいて、エー夜櫻やか……エーと夜櫻やかな 泥棒「夜櫻には良い句  
 があります、夜櫻や松坂稿の早がへり 主人「成程粹な句だ、ハテナお前さんは何ん

ですエ、頬冠ほのかむりをしてと、頬冠ほのかむりか、夜櫻よざくらやお子おこありげな頬冠ほのかむり、とは何なにうです、

泥棒どろぼう成程なるほど、頬冠ほのかむり花泥棒はなどろぼうと知られけり 甲斐あひ成程なるほど泥棒どろぼうか是これは威心かんしん 乙斐おつさりり

すと云いふ題だいですが、弱よわつたなア、何なにんですエ泥棒どろぼうが入はいつたか、泥棒どろぼうや宵よひから壁かべをさ

りりす 甲斐あひ然さう云いふ句調くごうだと跡あとが付け度たくなるナ、主人あるじも屹度きつど家うちに松虫まつむし 乙斐おつ成

程ほど、是これは變手へんて古ふるなものが出来できました 主人あるじ泥棒どろぼうや宵よひから壁かべをさりりす亭主ていしゆもさつ

と家うちに松虫まつむし 泥棒どろぼう「オ、恐こはやすんでに首くびをさりりす御縁ごえんもあらば又またもこうろげ、左

様さまなら 皆々みな「オイ、一體たいお前まへさんは何なにんですエ 泥棒どろぼう「マア、宜よろしふ御座ございます、

皆々みな「宜よろしかアない、お前まへは何なにんだイ 泥棒どろぼう「實じつは今晚こんばん此方こちらへ入はいりました泥棒どろぼうで……

皆々みな「何なにに泥棒どろぼう 泥棒どろぼう「悪わるい了簡れうけんで入はいつた譯わけでは御座ございません 皆々みな「餘あまり宜よろひ了簡れうけんで

もあるまい 泥棒どろぼう「實じつは今日こんにちが泥棒どろぼうの口明くちあけで、私わたしは發句はつくにこりまして商賈しょうがが手てにつか

ず、夫れ故ゆゑトウ、家うちを追出おひだされ、何なにうする事ことも出来できず、今夜こんや御庭ごにわの櫻ざくらを堀越ほりこしに眺

めて居をりました處ところが、庭にわの切戸きりどが風かぜにあをつて居をりました處ところから、惡わるひ心こころが起おこりま

して御内へ忍び込ました處が御奥で大好物な發句の開き、遂ウカ〜と御座敷へ入  
 り込ました、實に面目次第も御座いません、モ一決して泥棒了簡は出しません、何  
 うぞ御勘辨を願ひます 皆々「成程然う云へば人の宜さうな泥棒さんだが、風流の面  
 汚した、決して悪ひ心は廢して下さい、一句詠で往きなさい 泥棒「人中へ丸くなつ  
 て出る毛虫哉とは如何で 皆々「なか〜話せる泥棒さんだ 泥棒「是を御縁に又ちよ  
 く〜参ります 皆々「御免蒙る 皆々「何うだい改心したら罪はない、一ツ運座をし  
 てゆきなさい 泥棒「夫れでは今夜は此方へ御厄介に成りませう 皆々「然うサ、正直  
 さうな泥棒だから泊て遣りませう 主人「誰だ雨戸を締て居るのは、ア一女中なべか  
 何故眞張を内へするのだ、此の人が泊つて居るから今日は外からしろ。

相 撲 狂

一年を廿日で暮す宜い男、相撲は男子の見るべき者、芝居は御婦人の御覧なされるものと何も極つて居る譯でも御座いませんが、先御相撲は男の見るものでムいませう、此相撲に凝ますと妙なもので往來を歩くにも何となく相撲取のやうに見せたいと云ふ、當人は大關の位置でも古たやうな了簡で御座いまする。○「オイ何うだへ向ふから來るのは薪屋の喜兵衛さんだぜ、此節は相撲に凝てしまい、旦那と呼でも返事を爲ねエ、關取と云わなければ返事を爲ねエのは乙だネ、一ツ呼で見やうじやアねエか、モシ關取何處へ御出なさる 喜場所へ行ますツイ ○「大層身體が出來ましたネ 喜股が摩て歩けんでナア ○「ヘエ大したもんだネ、時に久しく御目にかゝりませんが關取は何方へ行つてましたへ 喜長崎へ行つて居りやした、晴天五日の興行でナ ○「成程、勝負は何うでした 喜勝たり負たりでござんした ○「偉ひナ、何う

だ聞たかへ、大概の關取は長崎と東京だ、何百里を離れて居るから、嘘を吐た所で  
 知れてねへから、勝續けで御座いましたと云ふ所を、勝たり負たりとは有難ひね、  
 何うでしたへ初日は 喜 此方が負ました ○「オヤ／＼初日に負てしまつた、最も怪  
 俄負た云ふのも御座いますから仕方がねエが、二日目は何うしましたへ 喜 先方が  
 勝やした ○「成程、三日目は 喜 三日目は、此方が負やした ○「四日目は 喜 先方  
 が勝やした ○「五日目は 喜 此方が負やした ○「夫じやア關取、皆な負たんで 喜 早  
 く云へば ○「遅く云つたツて皆な負たのだ、關取の親方は誰だへ 喜 俺は梅ヶ谷の  
 弟子でござんす ○「梅關には良弟子があるね、巧者の玉椿又梅の花良い角力取だネ、  
 處でお前さんは何と云ふ名だネ 喜 梅ヶ谷の弟子で梅干 ○「梅干……梅干關なんと  
 云ふのは聞かねエナ、全體番附には何處へ出て居ますぬ 喜 此他東西に御座候と云  
 ふ内に入つて居りやす ○「冗談云つちやア叶ねエ、然し關取が負た事ばかり聞のは  
 心持が悪ひが、出來のいゝ所を一ツ聞かしておくんなさい 喜 大阪の場所十日の

間土付かずでござんす。○「有難ひネ十日の間土付かずは嬉ひネ、初日は誰でしたへ、  
 喜「イヤ其時は風邪を冒て臥て居りやした。○「馬鹿にしちやア叶ねエ、風邪を冒て  
 臥て居れば砂の付く譯はねエ。喜「ハ、偉ひもんでござんす」憊う云ふ風に寝て居るの  
 だから堪りません、私の戀意な方ですが十日の相撲を十日見ると云ふ相撲狂ひで、  
 然う云ふ所へは又同じやうな氣狂が飛込で参ります。○「今日は。△「イヤ、誰かと思  
 つたら熊かへ、此方へ入シねエ。○「有難ひ、オヤ朝から飲て居るナ。△「力酒だ、今  
 日は鬮子を下して悠々飲ふじやアねエか。○「有難ひナ、時に昨夜は雨だつたが今日  
 は天氣になつたから太鼓だ、明日は場所入をしなければならねエ、處で兄貴は木戸  
 御免だから場所へ入つても幅が利く、本統に美しいぞ。△「お前だつてモ、二三年辛  
 抱すれば木戸御免になるじやアねエか。○「然し何だね、兄貴などは子供の内から強  
 かつたらう。△「夫は俺も埼玉縣で生れて今じやア江戸に来て居るが、子供の内から  
 相撲が好で鎮守の祭禮の時などは毎時も大關の位置を占たものだ、形は小さいが

腰が良のでケタグリが利もんだから人に奪られたものだ。○「俺だつて兄貴素人角力  
 で不覺を取た事は無エのだ。△「豪氣だナ、然し場所が始まつて汝に見せてエのは、  
 互ひに相四か何かになつて、年寄は來年の事があるから分てエと思ふて、關取乗は  
 勝負を付てエ、検査役はコ、デ分て置いて來年ウンと客を取らうと云ふ了簡がある、  
 水が宜からうと行司は氣を揉で四本柱に居る年寄の顔を見る、扇を鳥渡懸う持上げ  
 る、西東の溜に居る關取がウンと云ふ序に俺の面を鳥渡見ると思ねエ。○「成程△「其  
 時、腮を持上げると其をキツカけに分になる。○「大層なもんだネ。△「此間も餘り分  
 ねエから俺が土俵へ飛出したらトウ／＼掴み出されたが。○「掴み出されるなんぞは  
 氣が利かねエナ。△「何うもお前と恚うやつて兄弟分になつて美しく交際て居るが角  
 力へ行とガラリ變つて敵同志になるのは妙だぜ。○「夫りやア愛願／＼で違うからナ  
 △「愛願で違うと云つても汝はイヤニ東の肩を持ちやアがるから癩に碓つて堪らね  
 エ。○「然う云ふ兄貴も西の肩を持ちやアねエか。△「夫は至當ヨ、俺が座る所が西じ



やアねへか、溜たまりに居ゐる關取衆せきとりしゆうが早はやうごんす御寒おまひうごんすと聲こゑをかけてくれるんで  
 自然しぜんと西にしの肩かたを持もたくなるのが人情にんじやうじやアねへか ○俺おれだつて東ひがしの溜たまりの傍そばに居ゐれば  
 自然しぜんと東ひがしの肩かたを持もつやうにならア △夫それは御互おたがひで仕方しかたがねへとしても東ひがしの角力すまゝが勝かつ  
 と俺おれの面つら見みちやアドンと胸むねを叩たたくが癩しゆくにさわつて堪たまらねエ ○然さう云いふ汝おれも西にしが  
 勝かつと俺おれの面つら見みちやア胸むねを叩たたくじやアねへか △夫それは人情にんじやうで然さうならア、然しかし考かんえ  
 て見みれば西にしは大層たいそうな關取せきとりが居ゐるぜ ○然さうヨナア、ズラリと並ならんで居ゐらア △ヤイズ  
 ラリと並ならんで居ゐるとは何なんだ、失禮しつれいな事ことを云いふナ、憚はりながら横綱よこづなには梅ヶ谷うめがや藤太郎ふじたろう  
 脊せの高たかさが五尺五寸六分しやくすんぶ、目方めかたが四十四貫しゆじゆくわん、腹はらの周圍まはりが四尺四寸五分しやくすんぶ、夫それに新横綱しんよこづな  
 の太刀山たちやま、十八番はちじゆばんが上突張うはつ、はり、ドント一ツ鐵砲てつぱうをかませた節ひにはドンナ關取せきとりでも腰こしが  
 碎くだけてしまふ、相手あひてが相撲上手すまゝじやうずだと、ドツコイ然さうは叶いねエと、十分じゆぶんに腰こしを下くだしてサ  
 ア来こいとなれば何なんのと咽喉輪ののゝわを賣せつて土俵どへうを突出つきたしてしまふ、偉えいひじやアねエか、夫それ  
 に張出はりだし大關おほせきの國見山くにみやま、愛嬌あいけうのある關取せきとりだぜ、前齒まへはが一本ほん飲かけて居ゐるが確たしかに大關おほせきの價ね

値があらア、形は小さいが上手な角力を取のは玉椿、脇の下へ手を入れて腰を下し  
 て喰下つた節には常陸山關でさへ困つてしまい、宛然で蛛と相撲を取て居るやうだ  
 と云つた、又大鳴戸大したものだ、然うかと思ふとケンくの風、老巧で谷ノ音夫  
 に縁島、美男子では黒瀬川。○「マア待ておくんなせい、然う云はれると、まるで東  
 には相撲が無エやうなものだ、先づ俺の方には横綱の常陸山、阿父さんが石毛さん  
 と云つて中學校を卒業した日の下開山横綱大關、何うだへ大したものだらう、夫に  
 駒ヶ嶽、左りが一本入つた節にはビツクとも動かねエ、然うかと思ふと上方の相撲  
 だが相生、出足の早い凄い力士だぜ、夫に續いて以前の國岩當時の兩國、巧者なも  
 んだ、引ついで高見山、夫に大野川佐賀ノ海、豪ひものだぜ。△「生意氣な事を云  
 ふナ、サア夫ほど汝が東の肩を持なら俺と一番取て見ろ。△「面白い取つて見やう、  
 ○「サア来い」大變な騒ぎになりました。△「俺が梅ヶ谷だ。○「兄貴が梅ヶ谷なら俺  
 が常陸山だ。△「サア何うだ、之が手四ツと云ふ手だ。○「然うなれば梅ヶ谷は上手だ

此手このてを解とて懐中ふとろへ飛込とびこむ △「ドッコイ然まうは爲ませねエと恚こう常陸山ひたちやまが防まぐ ○「顔かほと  
 顔かほを見合みあして能見よくみたら随分ずぶん兄貴あにさまはまづい面つらだ △「何をなに云いやアがる、サア此手車このてぐるまが解と  
 て恚こう頭あたまを引ひくのズブネリ ○「オツと其手そのてを防まひで今度こんどはケタグリ △「オヤ、コン畜ちく  
 生しょうケタグリで炭取すみどりを引ひくりけへしたナ、よし其手そのてをグツと押おへて泉川いづみがは ○「今度こんどは此  
 方ちは門かどだ △「然さうくれば今度こんどは咽喉輪のどわを責せる ○「オイ咽喉輪のどわは宜いが、爪つめを立たてるのは  
 甚ひさいな、夫それに齒はをむき出だして宛然山まろてやま犬いぬだ 女房ぢやうぼうアラ鳥渡ちやうどお前まへさん何なにをして居ゐるんだ  
 ヨ、取組とくみ合あて御膳おぜんを轉覆ひつくりかへしてさ、鳥渡ちやうど何なにうしたんだネ △「何なにうも恚こうもねエ、大關おほせき  
 同志どうしの取組とくみだ、行司ぎやうじが來きて引分ひきわけた上うへ、是これより新あらた手を御覽ごらんに入いれますと來こなれば此  
 手ては取とれねエ 女房ぢやうぼう本統ほんどうに困こまるな、鳥渡ちやうど八はちさん △「何なんだへ 女房ぢやうぼう内うちの人ひとが四よに渡わたつ  
 て何なにうしても放はなれないんだから鳥渡ちやうど分わけておくんなさいヨ △「イヨ感心かんしん、四よつになつ  
 たから分わけてくれるとは面白おもしろひ、サア俺おれが木村庄きむらじやう之助のすけになるヨ、分わけだく △「分わけか、  
 ヤイ熊くま、手てを放はなせ ○「分わけはい、が咽喉輪のどわを責せられた時ときに爪つめを立たてられたので痛いたくつて

堪らぬエ 八「痛ければ此薬を貼ねエ ○「何だへ此薬はへんにビリ／＼浸るじやアね  
 へか 八「夫は醬油だ ○「何、醬油だ、オオ醬油を付るのは甚いぜ 八「然し角力に醬  
 油は滿更縁の無エ事はあるめへ ○「何故 八「角力醬油(勝負)點(付)

## 大 晦 日

陰陽と云ふものは四季に御座います、春浮れ夏が陽氣で秋静き、冬が陰氣で暮が  
 まごつき、と云ふ位のもので、暮にまごつくのは平素の行ひにあるさうで御座い  
 ますが、先日或るお客様が福圓遊コ一云ふ物を遣るから、自宅へ持て往つて貼て置  
 けと書て下さいました、其文句は「油断せぬ心の花が暮に咲く」又「元日や後に近  
 き大晦日」と云ふ事を常に心掛けて置けば、暮にまごつく事はないと被仰て下さいま  
 したが、手前杯は大晦日へ來て始めて驚ろいて、イヨ入らしつた目の先へ大晦日、

杯と云つて居ります、實に暢氣なもので八五郎「オイ今歸つたヨ」女房「オイお前さん何處をのたくつて居るのだエ八五郎」何んだのたくつて居るとは、恰で俺は蛇の扱ひだ、悠然とお歸りになつた女房「何んだい悠然もないものだ、今日は何日だと思つて居るのだエ八五郎」今日は大晦日、明日は元日で、お芽出度女房「夫れは餘所の家はお芽出度だらうが、家なんぞは些ともお目出度はないヨ、何うするつもりだヨ、八五郎」何にツ何うする女房「借金をサ八五郎」借金あるのは男の働らきで云ひ譯をするのは女の働さだ女房「妾はモロ口がすすばくなつてしまつたヨ八五郎」女童の知る處にあらず、スサリ居らう、方寸の内にあるから心配をするな女房「何んだい方寸と云ふのは八五郎」胸にある事を方寸と云ふのだ女房「アラうゐんの事八五郎」判らないなア、人毎に一ツの癖はあるものヨ、我にはゆるせ敷島のみち、と云ふ事があるだらう女房「何んだか妾には少しも判らない八五郎」然う云ふ俺にも判らないヨ、然し心配するナ、好きな道には心を奪はれると云ふから何んでも借金取りの好きな事を

やつて追返さうと云ふのは何うだ 女房「お前さん生意氣な事をお云ひでないヨ、此  
 の盆の事を忘れなすつたか八五郎何に此の盆に何うしたツけ 女房「何うしたツけも  
 ないものだ、お前さんが妾を呼で涙をこぼして、お前と永らく添て居たが、借金で  
 何うにもコゝにも首がまわらない、氣の毒だが里へ歸つて呉れと云ひなすつたらう  
 其の時妾もコゝやつて永らく添て居て今更別れるのも見得でもないから何んとか  
 工風はないかねエと云ふと、お前さんが暫く考へて居たツけ、やうく思ひ出して  
 憊うなつたら仕方がない、何方へ往つて空櫓を借て来いと云ひなすつたから、やう  
 く妾が空櫓を借て来たらばお前さんが死んだ装をするから、大家さんが来たら涙  
 をこぼせと云つたらう、妾は可笑つて涙が出ないと云つたら、辛子をかいてしやぶ  
 れと云つたらう八五郎然うく 女房「妾も一生懸命だから覺悟をして居ると、大家  
 さんが遣つて来て、お前の家位おづうくしい家はない、サア店賃を寄越せと云つ  
 たから、妾も知れない様に辛子をしやぶりながら、旦那の前で御座いますか、家の

八五郎は昨晚頓死を致しましたと棺桶へ指をさすと、大家さんは驚ろいて何に八五郎が死んだ、ヤレ／＼人間と云ふものは實に判らないものだ、昨日までも今日までもピン／＼して居たと思つたら、然う云ふ事になつたか、明日あると思ふ心の仇櫻夜半に嵐の吹ぬものかは、とはよく云つたものだ、ヤレ／＼と涙を滾して下すつたから、妾が直に附け込で、死ぬる今はの際までも貴下の所の借金が氣になると申して居りまして、其聲が今に耳に残つて居りますと云つたら、大家さんが而て見れば左程づるい男でもなかつたのだ、宜しく私が店賃の帳面を皆な受取にして遣りますと云ひながら、帳面へ受取を書て夫れから二十錢紙に包んで妾の前へ置て、是は餘り少ひが眞の心ばかり、佛前へ線香でも買て供へてくれと云はれた時は、何んぼなんでも妾には取れないから、御志しばかりで澤山で御座います、何うか其方へ御しまい爲すつて下さいと云ふと、大家さんが然うでもあらうが取つて置けと争つて居ると、あらう事かあるまい事かも前さんが棺桶の中から手を出して、折角の思召

だから頂いたひて置おけと云いひなすつたらう八五郎然さうく、俺おれもアノ時とき然さう思おもつた、俺おれの處ところの女房位かアの愚ぐな奴やつはないなア、何なうせ明日あしたは露見ろけんをするのだから、貰もらつて置おけば宜よひのと思おもはず知しらず手てを出だしたのだが、今こん度は大だい丈夫じやうぶだ、女房にやうぼう然さうかい、アラ噂うはさをすれば影かげとやら、大おほ家やさんか向むかふから遣やつて來きたヨ八五郎成程なるほど來きた、構かまふ事ことはないからお前まへは其方そのちやうに隠かくれて居ゐなさい、大おほ家やハイ御免ごめんヨ八五郎是これはく大おほ家やさん能よふこそ御出ごいで、大おほ家やイヤ餘あまり宜よくも來きません、店賃たなぢんを貰もらひに參まゐりました、出で來きましたかナ八五郎ヘイ其處そこは御受合ごうけあひまを申まをします、大おほ家や有難ありがたひ、出で來きたのだナ八五郎夫れそれが出で來きない方ほうで、大おほ家や此この長家ながやが三十六軒せじろけんあるが、お前まへの家位うちゑいのづうくしい家うちはない八五郎有難ありがたふ御座ございます、大おほ家やアレ衰はろて居ゐるのではないヨ、何なう云いふ譯わけで店賃たなぢんが出で來きません、承うけたまはりたい八五郎大おほ家やさんの前まへで御座ございます、此頃このころではつまらないものに凝こつて居ゐりまして、商賣しょうばいがよろそかになりましたが、其そのこつて居ゐりますものを明日あしたからせツくと稼かせぎますから、今日こんにちの處ところは黙だまつて御ご



歸りを願ひます、へい左様なら 大家「何んだい俺がお前の家へ来て居るのに、お前  
 の方から左様ならと云ふ奴があるかい 八五郎「成程、遂エ歸れば宜ひと云ふのが破  
 裂を致しまして 大家「怪しからん男だ、然しお前の疑て居ると云ふのは何うせ碌な  
 事ではあるまい、まア何にこつて居なさるのだ、其疑て居るものに依つては此の長  
 屋へ置く事が出来ません、何んだい 八五郎「夫れがネつまらないものにこつて居るの  
 で、實は其狂歌にこつて居りますので、へい 大家「何んだ狂歌、馬鹿を云へ貴様の  
 様ながさつな奴が風流杯が出来るか、儲は私が狂歌が好だから瞞着さうと云ふのだ  
 ナ、宜し全く遣るなら今日は黙つて歸つて遣りませう、サア即吟をやれ 八五郎「宜し  
 ふ御座います、エーと大家さんの前が出来ました、貧乏の棒が次第に太くなり振  
 り廻されぬ年の暮かなとは如何で御座います 大家「是は恐れ入つた、私は上り込む  
 ヨ、モ一一句願ひたいネ 八五郎「貧乏をすれど我家にふぜいあり質の流れに借金  
 の山  
 とは何うです 大家「成程 八五郎「貧乏をしても下谷の長者町上野の鐘のなるのを聞

く、何うでげす 大家「恐れ入つた 八五郎」貧乏を、れば口惜き裾綿の下から出ても人に踏れる、とは何うでげす 大家「オイ、八さん、大分貧乏がつとくナ 八五郎」有難ひ事に此の按排では當分つとさせう 大家「然し感心だ、お前さんが是程出来るとは思はなかつた、今日は黙つて歸つて遣りませうから、明日から稼いで店賃を入れなヨ、オヤ、お内儀さん奥でクスト、笑つて居るナ、些と遊びに来なさいヨ、餅を搗たか、未だ搗ない、そんなら家へ取りに来なさい、家の婆さんなどは餅餘して居るヨ、八さんや、豪い内儀さんも粹な亭主を持って仕合せ者だ、私はモ、歸ります、モ、決して構ひなさんな、下駄杯を直して、然し此儘歸つては敵に後ろを見せる様なものだ、私も一句、エ、と、貸て遣る 八五郎「有難ふ御座い 大家「オイ、氣の早い男だ、狂歌だヨ、貸は遣る借は取らる、世の中に何とて大家喰へなかるらん、八五郎「女房喜へ狂歌がお役に立たはやイ 大家「面白い、八五郎「オイ女房ア、トウ、大家さんが歸つてしまつた、どんなものだア 女房「眞實に面白い、憚う云ふ工

合で借金取が歸るのなら、明日からモツと澤山借やう八五郎「廢せやイ、そんなに借られて堪るものか 女房「一寸大變だヨ、薪屋の久兵衛さんが遣つて來たヨ 八五郎「薪屋の久兵衛は彼奴は何が好だツたらう 女房「彼はカン／＼ノウキウノデス、と云ふアノ馬鹿氣たのヨ 八五郎「是は驚ろいたなア、あのカン／＼ノウキウノデス、と云ふアノ馬鹿氣た唄か 女房「然うだヨ 八五郎「宜しく、ヤア是は入らつしやい久兵衛さん 久「へい今日は、ハア少し許り頂くのがありやしたから貰ひに來やした八五郎「久兵衛さん、お前さんが來たら褒やうと待て居ましたか、先達辨天湯の中でカン／＼ノウを唄つた人があるから、ハテナ此近所でアノ上手に唄ふ者があるのは不思議だと思つて見ると、お前さんだ、實に旨いものだねエ 久「御褒に預かつて面目ないが、私等が田舎では大層に流行で、第一私が自宅に居て薪を割だアねエ、其時私が薪割を片手に持て片ツ方に薪を押へて、カン／＼ノウキエーノデス、と薪を割ると、女房が傍で薪を結びながら、ソラ、キヲキウデス、と云ふと、私がサンジヨナラ宜ひと、又薪を割

と、一日ハア面白く浮れながら仕事をするので八五郎、成程察イ、久夫れは然うと勘  
 定を貰ひたいもんだ。ハ「マア久兵衛さん考えて御覽なさい。久「何んだネ八五郎、御前  
 さんの名前が久兵衛さんで、借があるから、ソラ借があるノ、久兵衛さん、とは何  
 うだイ。久「何んだイ借がある久兵衛さんで、成程替唄だナア面白い、ダガ節期だヨ  
 私氣が氣じゃアないヨ。八五郎、ソラ氣が氣じゃアない、氣が氣じゃアない、催促にイ  
 三度、めんくが悪くツて拂ひがされぬ。久「何うで損だヨ、どて損だよ」と踊りなが  
 ら歸つて行く。八五郎、何うだイ踊つて行やアがつたぜ。女房「アラ眞實に面白いネ、此  
 の按排では御隣りでも大分困つて居なざるから、お隣りの借金取も家へ連れて來や  
 う。八五郎「狎戯るナ。女房「サア今度こそ大變だヨ、質屋の番頭さんが遣つて來たヨ、  
 八五郎「何に質屋の番頭は何が好た。女房「アノ人は芝居が大好ですヨ。八五郎「宜し、芝  
 居なら芝居がしりて云譯を爲やう、先づ彼奴が懸取りに來たから、一番御懸取り様  
 の御入り——と觸込でやらう、其箆筒の抽出に近江八景の扇子があるから此處へ取

つてくれ、コレくオヤ番頭路次を氣取て歩行て居るナ、御懸取り様の御入り——  
 番「何んだ御懸取りの御入り——、ハテナオヤ八五郎さんの家だナ、俺が芝居が好  
 であるから芝居がしりて云ひ譯をするつもりだナ、宜し憊ふなれば俺も上使の了簡  
 で、先づ前掛を肩へ掛れば上下を着た心持になる、しめたナ八五郎御懸取り様の御  
 入り——、ハアトンくトコくイ、ヤア—— 番「八五郎のお飯櫃を扇で叩  
 ひて居るナ、アレは貼扇の音のつもり、成程話せるナ、感心く八五郎、コレはく  
 御懸取り様には遠路の處御苦勞千萬、其處は溝板イザ先づアレへも通り下さりませ  
 う 番「掛取りの役目なれば上座許しめされ八五郎、ハ、ア、シテ御掛取りの趣此家の  
 主人八五郎奴に仰せ聞けられ下さりませうなら有難く存じ奉つる 番「掛取りの趣餘の  
 儀にあらず、謹で承はれ八五郎、ハ、ア 番「月々たまるまで利の勘定、小僧長松を  
 以て度々催促致すと云へど、何時な拂ふ氣色もなく、甚だ以て不都合千萬、今日こ  
 そは大晦日乾度勘定致して宜らう八五郎、其申し譯は是なる扇面 番「何に扇を以て云

ひ譯とや、雪晴るひらの高根の夕暮は花の盛りを過る頃かな、コリヤ是は近江入景  
 の歌、此の歌を以て云ひ譯とは八五郎サ、心は矢竹にはやれども、此の身に重き雁  
 金の貧苦に迫る瘦世帯、資本の料に盡はて、貴殿へ顔を粟津なる、消る思ひを推  
 量して、今暫時唐崎の 番待て呉れと云ふなぞか 八五郎今年も過て來年の石山寺の  
 秋の月 番九月の下旬か 八三井寺の鐘を合圖に 番屹度勘定致して宜らう 八五郎先  
 づ夫れまでは御掛取り様 番此の家の主人 八五郎來春御目に 番懸るで御座らう、  
 八五郎「かず唄、コゝ心のこしてエ、オイ女房往てしまつたぜ 女房ほんとお前は  
 八五郎「オイお前まで氣取ては叶ねエ 女房「サア又來たヨ 八五郎「今度は誰だ 女房「三  
 河屋さんだヨ 八五郎「三河屋は確か萬歳が好だ、萬歳なら萬歳で、其つもりでやるか  
 ら構はねエヤア 三「ハイ御免ヨ、少し許りありましたから貰ひに來ました、何んだ  
 イ變な顔をして厭に氣取て居なさるナ 八五郎「コレはくは三河屋さん、矢立と帳  
 面手に持て、借金取るとはさつてもふうとわ三河屋さん、ポン〜 三「借はお前さ

まは私わしが萬歳まんざいが好すきだから、萬歳まんざいもどきで云いひ譯わけか、そんなら私わしも萬歳まんざいもどきで待まて  
 やる、ハア待まつてやる、半はん年ねんばかりも待まてやる八五郎はちごろう、ハア却かえ々々そんな事ことちやア拂はらひな  
 んどは出で來きねエ 三さん一いち年ねんべいも待まてやる八五郎はちごろう、なかくそんな事ことちやア拂はらひな  
 出で來きねエ 三さん十じゅう年ねんべいじやア何なにうだんべい八五郎はちごろう、なかくそんなここツちやア拂はらひ  
 なんだは出で來きねエ 三さん二じゅう年ねん三さん十じゅう年ねん五ご十じゅう年ねんも待まつてやる八五郎はちごろう、なかくそんなここツ  
 ちやア拂はらひなんだは出で來きねエ 三さん百ひゃく年ねんべいか、千せん年ねんか、二に千せん年ねんじやア何なにうだんべい  
 八五郎はちごろう、なかくそんなここツちやア拂はらひなんだは出で來きない 三さん、オおイい、何いつ時とき頃ころ拂はらひ  
 が出で來きまするナ八五郎はちごろう、アあ、一いち百ひゃく萬まん年ねんも過すて後のち。

滑 稽 万 巻 終

明治四十五年六月一日印刷  
明治四十五年六月七日發行

定價金三十五錢

講演者

三遊亭 福圓遊

發行者

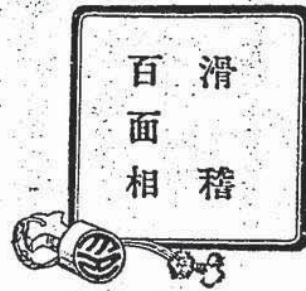
東京市芝區三田三丁目七番地  
神谷 竹之輔

印刷者

東京市神田區表神保町十番地  
今成 温平

印刷所

東京市神田區表神保町十番地  
今成 活版所



滑稽  
百面相

發行所 東京三田 三芳屋書店

電話三二七六番  
東京市神田區表神保町十番地



まは私わしが萬歲まんざいが好すきだから、萬歲まんざいもどきで云いひ譯わけか、そんなら私わしも萬歲まんざいもどきで待まて  
 やる、ハア待まつてやる、半はん年ねんばかりも待まてやる八五郎はちごろう、ハア却まが々くそんな事ことちやア拂はらひな  
 んどは出で來きねエ 三さん一いち年ねんベいも待まてやる八五郎はちごろうなか／＼そんな事ことちやア拂はらひな  
 出で來きねエ 三さん十じゅう年ねんベいじやア何なうだんベい八五郎はちごろうなか／＼そんなここツちやア拂はらひ  
 なんどは出で來きねエ 三さん二に十じゅう年ねん三さん十じゅう年ねん五ご十じゅう年ねんも待まつてやる八五郎はちごろうなか／＼そんなここツ  
 ちやア拂はらひなんどは出で來きねエ 三さん百ひゃく年ねんベいか、千せん年ねんか、二に千せん年ねんじやア何なうだんベい  
 八五郎はちごろうなか／＼そんなここツちやア拂はらひなんどは出で來きない 三さん「オおい／＼、何いつ時とき頃ころ拂はらひ  
 が出で來きますするナ八五郎はちごろうア一いち百ひゃく萬まん年ねんも過すて後のち。

滑なめ稽きる白しろお終はつ

明治四十五年六月一日印刷  
明治四十五年六月七日發行

定價金三十五錢

講演者 三遊亭 福圓遊

發行者 東京市芝區三田三丁目七番地 神谷 竹之輔

印刷者 東京市神田區表神保町十番地 今成 温平

印刷所 東京市神田區表神保町十番地 今成 活版所



# 發行所 東京三田 三芳屋書店

電話 芝三一七六番  
振替口座東京 〇〇〇〇六番

●むらく新落語集

郵三十五錢  
金三十五錢共

●圓歌新落語集

郵三十五錢  
金三十五錢共

●小三治新落語集

郵三十五錢  
金三十五錢共

●圓左新落語集

郵三十五錢  
金三十五錢共

●小せん新落語集

郵三十五錢  
金三十五錢共

●圓右新落語集

郵三十五錢  
金三十五錢共

●三遊落語十八番

郵三十五錢  
金三十五錢共

●落語忠臣藏

郵三十錢  
金三十錢共

●小噺百題

郵二十五錢  
金二十五錢共

●滑稽三題噺

郵二十錢  
金二十錢共

●小さん落語集

郵三十錢  
金三十錢共

●圓喬落語集

郵三十錢  
金三十錢共

●圓遊落語集

郵三十錢  
金三十錢共

●柳枝落語集

郵三十錢  
金三十錢共

●東海道中膝栗毛

郵四十錢  
金四十錢共

●曾呂利新左衛門

郵三十五錢  
金三十五錢共

●諸國漫遊一休禪師

似四十五錢  
郵稅六錢

●請談落語新撰人情噺

郵三十五錢  
金三十五錢共

●請談落語新撰怪談揃

郵三十五錢  
金三十五錢共

●講談落語滑稽五面相

郵三十五錢  
金三十五錢共

落合芳磨畫

四六版全一冊  
紙數二百餘頁

會我廻家喜劇

圓歌新落語集

郵金卅五錢共

これは、關西は言ふまでもなく花の東へ  
 來ても新舊の大舞臺を向ふへ廻はして、泡  
 を吹かせる稀代の人氣者、會我廻家兄弟と  
 滑稽の交換をして、彼は舞臺に是は高座に  
 新らしい新らしい妙味を發揮して居る三  
 遊亭圓歌、一杯の講演集、弊店が獨特の  
 意匠の凝こ精巧の速記に、謂はゞ膝の上  
 で觀られず會我廻家劇、御暇も缺さず御散  
 財も御安い世に氣の利いたオツな本はこ  
 れぢやく。

●むらく新落語集

郵三十五錢 稅共

●圓歌新落語集

郵三十五錢 稅共

●小三治新落語集

郵三十五錢 稅共

●圓左新落語集

郵三十五錢 稅共

●小せん新落語集

郵三十五錢 稅共

●四右新落語集

郵三十五錢 稅共

●三遊落語十八番

郵三十五錢 稅共

●落語忠臣藏

郵三十錢 稅共

●小噺百題

郵二十五錢 稅共

●滑稽三題噺

郵二十錢 稅共

●小さん落語集

郵三十錢 稅共

●圓喬落語集

郵三十錢 稅共

●圓遊落語集

郵三十錢 稅共

●柳枝落語集

郵三十錢 稅共

●東海道中膝栗毛

郵四十錢 稅共

●曾呂利新左衛門

郵三十五錢 稅共

●諸國漫遊一休禪師

價四十五錢 郵稅六錢

●講談新撰人情噺

郵三十五錢 稅共

●講談新撰怪談揃

郵三十五錢 稅共

●講談滑稽五面相

郵三十五錢 稅共

落合芳磨畫

四六版全一冊  
紙數二百餘頁

會我廼家喜劇

圓歌新落語集

郵稅共  
金卅五錢

これは、關西は言ふまでもなく花の東へ  
 來ても新舊の大舞臺を向ふへ廻はして、泡  
 を吹かせる稀代の人氣者、會我廼家兄弟と  
 滑稽の交換をして、彼は舞臺に是は高座に  
 新らしい作新らしい妙味を發揮して居る三  
 遊亭圓歌、一杯の講演集、弊店が獨特の  
 意匠の凝こ精巧の速記に、謂はゞ膝の上  
 で觀られる會我廼家劇、御暇も缺さず御散  
 財も御安い世に氣の利いたオツな本はこ  
 れぢや。

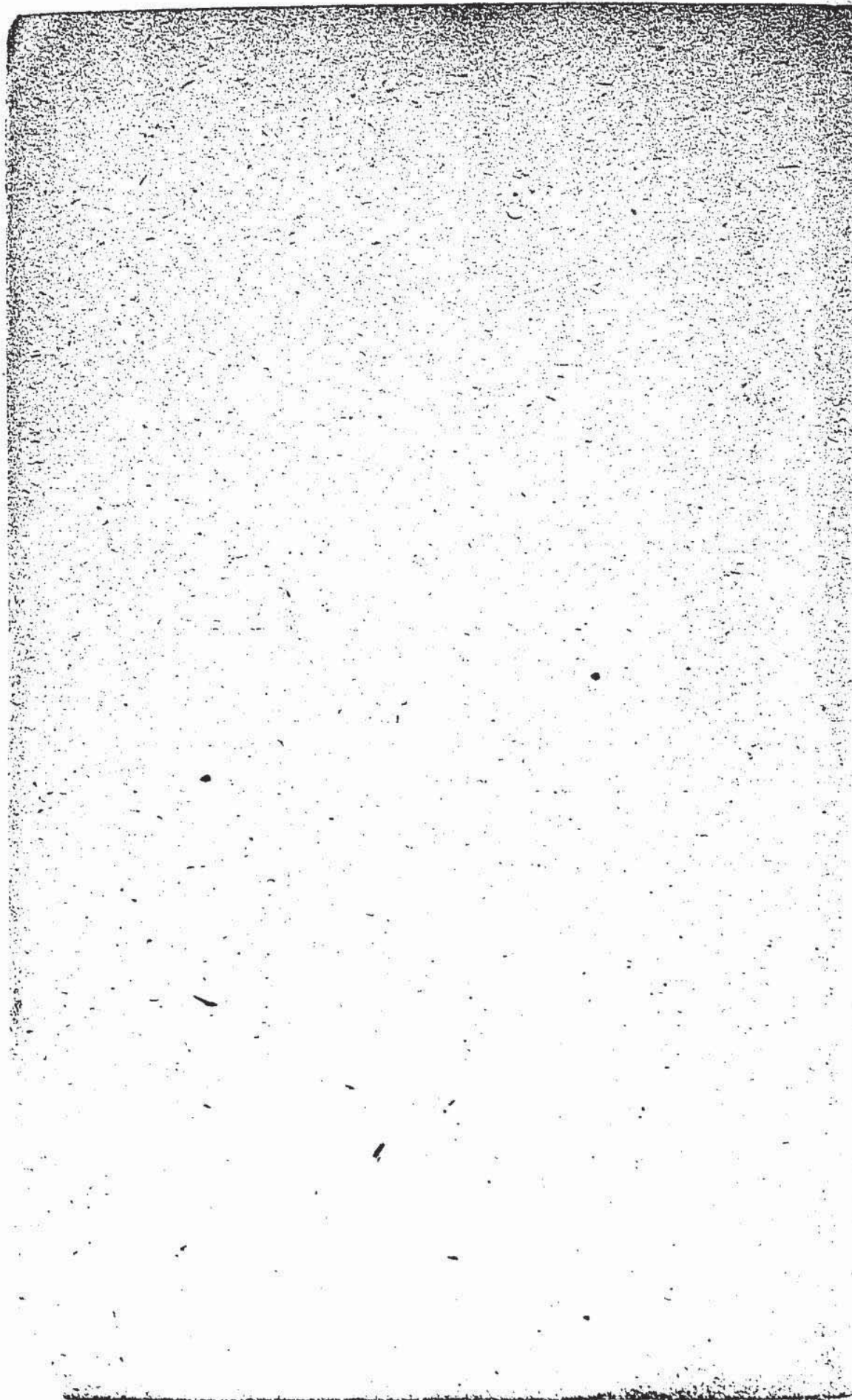
落合芳麿畫

四六版全一冊  
紙數二百餘頁

小せん新落語集

郵税共  
金卅五錢

鹿界柳派の秀才小せんは實に——落語集  
 の御披露に些堅い詞だが——新進氣銳の人  
 天明振を新らしく饒舌活して通語警句の百  
 出、亦類を見ない所、今様落語の極製、當  
 世の穿を言はせて憎らしい程身に泌みさせ  
 る、其粹を撰つてなつたが此集、此れを讀  
 逃さば時代の通に遅れると申すもの也。







369  
325





097981-000-9

特12-996

滑稽百面相

三遊亭福円遊 / 講演

M45

DBT-0174



